



中国語非動作主卓越構文の研究

于, 一楽

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2013-03-25

(Date of Publication)

2013-06-13

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5691

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005691>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

平成24年12月4日

中国語非動作主卓越構文の研究

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

于一楽

中国語非動作主卓越構文の研究

于一楽

目次

謝辞	iv
略語一覧	v
序章	
0.1. 枠組みと目的	1
0.2. 本論文の構成と概要	2
第一章 先行研究	
1.1. 問題提起	4
1.2. 結果複合動詞構文の項の文法関係	6
1.2.1. 呂 (1946)	6
1.2.2. Li (1995; 1999)	8
1.2.3. Her (2007)	11
1.3. 存現文の項の文法関係	13
1.3.1. 語順	13
1.3.2. Locative Inversion	14
1.3.2.1. 語彙論的分析	14
1.3.2.2. 統語論的分析	16
1.3.3. Pan (1996)	17
1.4. 双数量詞構文の項の文法関係	18
1.5. 語彙概念構造と項の具現化	20
1.6. まとめ	23
注	24
第二章 結果複合動詞構文	
2.1. はじめに	25
2.2. 先行研究	25
2.3. 提案	27
2.3.1. 語順	27
2.3.2. LCS 分析	29
2.3.3. 前項動詞の動詞分類と動作主目的語	36
2.3.4. 自動詞＋自動詞	42
2.3.5. 三項動詞＋自動詞	45
2.4. まとめ	50
注	52
第三章 存現文	
	54

3.1. はじめに	54
3.2. 先行研究の問題点	55
3.3. 提案	56
3.3.1. 語順	56
3.3.2. 存在と所有の変換規則	58
3.3.3. AT 述語と他動詞	62
3.3.4. AT 述語と自動詞	67
3.3.4.1. 非能格自動詞	67
3.3.4.2. 非対格自動詞	69
3.4. LCS 転換規則の根拠	74
3.4.1. 語彙的操作	75
3.4.2. アスペクト	75
3.4.3. 置換と状態性	76
3.5. 状態動詞	81
3.6. まとめ	84
注	85
 第四章 双数量詞構文	 87
4.1. はじめに	87
4.2. 先行研究の問題点	88
4.3. 分析	91
4.3.1. 語順	91
4.3.2. 提案	92
4.3.3. 三項動詞とその目的語名詞の解釈	100
4.3.4. 動詞“看”の特殊性	106
4.4. まとめ	112
注	114
 第五章 結び	 115
 参考文献	 117

謝辞

本論文がこのような形で完成に至るまでには、いくら感謝しても感謝しきれないほどの周りの多大なサポートがあった。

指導教官である岸本秀樹先生から教わった数多くのことは僕の研究人生の宝である。先生は輪郭の见えない僕の論文と話にいつも親身になって聞いてくださり、活発な議論と丁寧なご指導で僕を勇気づけて下さった。いつも貴重なお時間を割いていただき、時には昼食中や帰りの電車の中でも僕の論文の相談に乗っていただいた。この場を借りて、心より御礼申し上げます。副指導教官である松本曜先生と鈴木義和先生にも御礼を申し上げたい。年に二回ほどある博士論文の中間発表など、本論文の各過程において、いつも建設的で有意義なコメントをいただいた。また、田中真一先生、窪園晴夫先生、西光義弘先生にも心より御礼を申し上げたい。言語学研究室の先輩方、院生、研究生にも感謝の意を表したい。とても楽しい時間を一緒に過ごすことができた。神戸大の伝統、隔たりのない温かいムード、お花見、BBQ 大会、忘年会など、ここの研究室でしか味わうことのできない数多くの経験は、研究者としてだけでなく、一人の人間として成長することに欠かすことのできない産物である。

僕の学部生時代と修士時代の恩師である影山太郎先生には言語学者のあるべき姿を教わった。先生は常々「新しいデータ、新しい理論」というフレーズを繰り返しおっしゃっていた。事あるごとに、この言葉が脳裏をよぎったものである。この場を借りて、心より御礼を申し上げたい。また、KLP の研究会メンバーにも御礼を申し上げたい。修士一年生だった僕を温かく迎えていただき、発表の機会も与えていただいた。特に、由本陽子先生にはたいへんお世話になり、本論文も含めて数多くの貴重なコメントをいただいた。この場を借りて、心より御礼を申し上げます。KLP の他、関学時代の先輩である浅野真也氏、工藤和也氏、大阪大学大学院の依田悠介氏などと共にしていた勉強会でも多くのことを学んだ。勉強会のメンバーは徐々に増え、関学、阪大、神戸大、京都外大など広範囲にわたっていた。そのせいか、いつも活発な議論が行われ、毎回「怠けるな、頑張らないと」と触発されたものである。

僕の（研究）人生において一番欠かせないのは家族の存在である。まず、僕を小さい頃から育ててくれた祖父母に感謝したい。特に、おじいちゃんには卓球、（中国）将棋、囲碁など多くのことを教わった。すべて忘れられない思い出である。次に、バイリンガルに育ててくれた両親に感謝したい。他の人では経験できないような環境や機会を多く与えてくれた。特に、中国と日本の文化を身につけさせてくれたことは僕の価値観の根底となっている。そして、何よりも人としての生き方を教えてくれた。父が言語学者であることもあり、小さい頃から「ことば」に対する興味があった。僕が小学生の頃、当時国語学をしていた父の命令で、日本の古典文学をワープロに打ち込むという作業をひたすらしていたことを鮮明に覚えている。おかげでワープロ打ちは随分と速くなった。言語学者を目指し始めてからも父と母は金銭面においても精神面においてもいつも支えてくれた。

最後の感謝は妻に捧げたい。「고맙워요」

略語一覽

ASP Aspect

BA marker of the *ba* construction

CL Classifier

GEN Genitive

NEG Negative

PROG Progressive

Q Question particle

序章

0.1. 枠組みと目的

本論文では、中国語の非動作主卓越構文（結果複合動詞構文、存現文、双数量詞構文）における項の文法関係（項の具現化）について考察する。項の具現化研究を含め、理論言語学では、英語を中心に研究が進み、アジアの諸言語の中では、おそらく日本語が一番よく研究されている。少なくとも、中国語は英語や日本語ほど理論的研究は進んでいない。そんな中でも中国語の統語論研究は近年盛んに行われており、Huang et al. (2009)のような著書もある。しかし、中国語の語彙意味論に関する研究はそれほど進んでいないのが現状である。このような状況の中で、本論文は中国語の動詞に焦点を当て、いくつかの構文における項の具現化パターンを考察し、中国語の語彙意味論研究に光を当てようと試みるものである。中国語の項の文法関係には、英語や日本語とかなり異なるパターンが存在する。本論文では、これらの中国語に特有の現象を調べることで、中国語の動詞の意味構造にどのような共通性があるのかを考察し、ひいては言語一般にどのような普遍性が見られるのかということを具体的に示していく。理論面は言うに及ばず、特に経験面で興味深い事実を浮き彫りにすることで、言語の普遍性と特殊性の探求に少しでも貢献できればよいと考えている。これが本論文の目的である。

項の具現化とはある事象における参加者がどのような形で統語構造に現れるかということをも明らかにする課題である。この問題は多くの理論的枠組で中心課題となっており、統語論や意味論などさまざまなアプローチから捉えられているが、本論文では、語彙意味論のアプローチを採用する。Levin (1985: 1-4)で述べているように、語彙意味論の第一の目的は項の具現化の普遍的なパターンを明らかにすることとされている。詳しい議論は次章以降に任せることにして、ここでは項の具現化に関して、語彙意味論の枠組みで想定されている基本的な概念を導入しておく。

通常、項のリンキングは項構造から統語構造へ行われると考えられている。項とは、事象の参加者のことで、しばしば動作主、対象、受益者などの意味役割によって表示される。語彙意味論では、これらの意味役割はさらにより深い意味構造、すなわち語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structures) から派生されるものと考えられている。語彙概念構造とは、動詞の意味を抽象的な意味述語に還元し、それらを組み合わせることで表示するものである。代表的な意味述語には DO, CAUSE, BECOME, BE などがある。DO は動作主を項にとり行為を表す意味述語、CAUSE は使役を表す関数、BECOME は対象を項にとり変化を表す意味述語、そして BE は対象を項にとり状態を表す意味述語である。語彙概念構造では、これらの意味述語から事象の参加者の意味解釈（意味役割）が得られる。たとえば、[x DO] の LCS において、DO がとる項 x は動作主であると考えられる。なお、本論で仮定している枠組みでは、意味役割は原理的(primitive)な概念ではなく、語彙概念構造から派生的に定義されるものであり、本論は意味役割を便宜上、説明の道具として使用することになるという点にも注意しておいてもらいたい。

語彙意味論では、項の具現化は語彙概念構造→項構造→統語構造という一連の写像により行われる。この図式では、語彙概念構造から項構造へ統語構造で必要な意味役割情報を

含む項が継承され、それらの項が項構造から統語構造へリンクされることになる。「リンキング (ルール)」は二つ目の矢印で示しているように、項構造から統語構造へ適用されるもので、その統語構造に必要な意味情報を含む項は、一つ目の矢印で示しているように、語彙概念構造から項構造へと受け継がれることになる。その際、大事な仮定として、語彙概念構造上での項の階層性は項構造でも統語構造でも保持されるということがある。語彙概念構造でより高い位置にある項は項構造でも統語構造でもより高い位置に生成されるのである。

もう一つ、語彙意味論を考える上で大事になるのは、レキシコン (心的辞書) の捉え方である。ひとえにレキシコンといっても理論的立場によってさまざまな見解がある。たとえば、レキシコンは、単に単語あるいはイディオムや慣用句などを記憶する場所にすぎないとも考えることもできる。あるいは、そもそもレキシコンなどないとも考えることもできる。しかし、本論文を含め、語彙意味論ではこれらのような見解はとらず、レキシコンは単語などを記憶する機能があることに加えて、(統語構造と関連して) さまざまな (語彙) 操作が行われる部門を形成すると考える。レキシコンはダイナミックな側面を持つのである (cf. Pustejovsky 1995, 由本 2011)。

以上が本論文で必要となる理論の大枠である。この他の必要な概念や道具立てについては、各章で適時導入していくことになる。

0.2. 本論文の構成と概要

本論文は序章、第一章、第二章、第三章、第四章、そして第五章の結びから構成され、ここでは第一章以降の各章でどのような考察を行うかについて概略を述べる。

第一章では、項の具現化研究でしばしば議論される意味役割の階層性についてまず検討した上で、中国語の非動作主卓越構文 (結果複合動詞構文, 存現文, 双数量詞構文) では意味役割の階層性に反する形で項の具現化が行われることを確認する。より具体的には、結果複合動詞構文と双数量詞構文 (“供用句”) で動作主が目的語に具現化され得ること、存現文で場所項が対象項よりも高い位置に具現化されることを見る。この章では、それぞれの構文でどのような研究が行われてきたかを示し、先行研究の問題点を指摘していく。その後、本論文が依拠する語彙概念構造の概略を示す。

第二章では、中国語非動作主卓越構文のうちの結果複合動詞構文 (VV 複合動詞) について考察する。V1 と V2 が合成し、結果複合動詞が形成されると、論理的に可能な解釈が四つ生まれることになるが、このうち、実際に可能な解釈は三つのみである。この三つの解釈の中の一つに目的語が動作主として解釈される読みがある。本章では、この解釈が得られる場合でも、実際に動作主が目的語として機能していることを再帰代名詞束縛 (reflexive binding) と所有者関係節化 (possessor relativizing) から確かめた上で、当該構文のリンキングパラダイムは「項 α が対象 (theme) と解釈されるときに限り、項 α は目的語 (内項として項構造に) にリンクされる (ただし、主語 (外項) がなければならない)」という単純なルールにより説明されることを示す。また、動作主が目的語に具現化できるのは、V1 の動作主と V2 の対象が意味的に同定される場合に限られることも示す。さらに、V1 が他動詞、自動詞、そして三項動詞のいずれの場合でも同じメカニズムにより可能な解釈が成り立つことを経験的なデータから検討し、先行研究よりも多くのデータを説明できること

を示す。

第三章では、非動作主卓越構文のうちの存現文について考察する。より具体的には、存現文がなぜ「場所＋動詞＋対象」という語順をとるのか、そして、なぜ非対格自動詞だけでなく、非能格自動詞さらには（受動形でない）他動詞も現れることができるのかについて検討する。本章では、まず、存現文が SVO 語順をなしていることを再帰代名詞束縛と所有者関係節化によって確認した上で、当該構文で倒置が起こるのは、動詞本来の語彙概念構造に含まれる存在スキーマが所有スキーマに書き換えられることによると示す。また、この書き換え規則は、語彙概念構造に場所を変項にとる AT 述語が含まれている動詞に限られることを示す。書き換えられた所有スキーマでは、場所項が対象項よりも高い位置に生成される項構造が形成されることになり、「場所＋動詞＋対象」という存現文の語順が生まれることになる。この分析をとると、存現文で動詞の行為連鎖に含まれる行為と変化を修飾できないことなど先行研究では捉えられない事実を説明することができるようになる。

第四章では、非動作主卓越構文のうち、中国語学で“供用句”（本論文では、双数量詞構文）と呼ばれる構文について考察する。これは中国語特有の構文で、‘两碗饭吃三个人。’（二杯のご飯で三人の人間が食べることができる）のように、対象“两碗饭”（二杯のご飯）が主語に、動作主“三个人”（三人）が目的語に現れる。この構文は、単にある行為が行われることを表すだけでなく、「二杯のご飯は三人の人間が食べるのに十分な量である」のような数量対比関係の意味も表している。本章では、なぜこのような意味が双数量詞構文に存在し、対象が動作主よりも高い位置に現れる語順が形成されるのかを検討する。ここでもまず、双数量詞構文が SVO 語順になっていることを再帰代名詞束縛と所有者関係節化によって示した上で、当該構文は進行形にできないこと、具体的な時間や場所を指定できないことなどの事実があることを提示する。さらに、双数量詞構文に現れる動詞は、「足りる」の意味を表す動詞“够”と複合動詞を形成することができ、動詞が単独で現れる当該構文と同じ文法的ふるまいを見せることを示す。複合動詞“够 V”と単独の動詞が同じ文法的特徴を示すことから、本章では、双数量詞構文は見かけ上は現れないものの、実質的に存在する“够”（足りる）と合成して、“够 V”という複合動詞を形成していることを提案する。この提案により、進行形にできないなどの事実を捉えることができるようになる。また、性質を表す文に対して「項 α が対象（内項）であるとき、かつ、そのときに限り、項 α は主語にリンクされる」というリンキングルールを提案し、本分析が双数量詞構文の語順も説明できることを示す。さらに、「対象＋動詞＋動作主」の語順をとるにもかかわらず、数量対比関係の意味がない“看”（診る）についても議論し、双数量詞構文と似てはいるものの、別の現象であることを示す。しかし、別の現象ではあるが、結局は、見かけ上現れない動詞が複合されているという双数量詞構文と同じようなメカニズムで説明することができる。

以上が本論文の構成である。もちろん、本論文で議論するデータは語彙意味論だけでなく、他の文法理論からアプローチすることもできるのであろう。ここでは、分析の一つの可能性として、一定のまとまった語彙意味論のメカニズムから説明できることを示していく。

第一章

先行研究

1.1. 問題提起

意味が統語構造を決定するという考えに基づき, Gruber (1965), Fillmore (1968), Jackendoff (1972)など 60 年代後半から 70 年代前半にかけて, 動詞が意味的にとる意味役割の理論が提案されて以来, 意味役割と実際に項が統語上現れる位置の関係(項の具現化)の問題がしばしば議論されている(Jackendoff 1972; Ostler 1979; Foley and Van Valin 1984; Carrier-Duncan 1985; Kiparsky 1985; Larson 1988; Bresnan and Kanerva 1989; Bresnan and Moshi 1990; Grimshaw 1990 など)。項の具現を説明する際にしばしば仮定されるものに「意味役割の階層性」(Thematic Hierarchy)がある。これは, 意味役割によって項が現れる統語的位置を相対的に規定するもので, 一定の階層に従って項の具現化が行なわれるとする仮説である。以下にその提案のいくつかの例を挙げる(なお, Fillmore (1968)では意味役割は“case”と呼ばれている)¹。

- | | |
|--|--------------------------------|
| (1) a. <i>ag > ben > recip/exp > inst > th/pt > loc</i> | Bresnan and Kanerva (1989: 23) |
| b. <i>ag > ben > go > ins > pt/th > loc</i> | Bresnan and Moshi (1990: 169) |
| c. <i>agent > Experiencer > Goal/Source/Location > Theme</i> | Grimshaw (1990:8) |
| d. <i>Agent > Source > Goal > Instrument > Theme > Locative></i> | Kiparsky (1985: 20) |
| e. <i>Agent > Theme > Goal > Obliques (manner, location, time, ...</i> | Larson (1988:382) |

(1)の意味役割の階層性は, 意味役割が左から右の順に高い階層にあることを示している²。また, より高い階層にある意味役割はそれよりも低い階層にある意味役割より統語上もより高い位置に現れることを示している。このことは次の例の対比から分かる。

- (2) a. 太郎がボールを投げた。
[動作主] [対象]
b. *ボールが太郎を投げた。
[対象] [動作主]

(2)の「太郎」と「ボール」はそれぞれ「投げる」の意味役割として動作主と対象を担っている。(1)の階層性から動作主は対象よりも高い位置にあるので, 動作主が主語にそして対象が目的語に具現されることが予想され, (2a)がその具体例に当たる。対照的に, (2b)では(1)の階層で動作主よりも低い位置にある対象が主語に具現され, そして対象よりも高い位置にある動作主が目的語に具現されているので非文となる。このように, 意味役割の階層性により, (2)の項の具現化のパターンが説明できることになる。

特に, ここで注目する点は, (1)の階層性は階層の最も高い位置に動作主(agent)があり, 受け身などの文法操作がかかわらない限り, 動作主は主語として具現化されるというもの

である。このことは、広く受け入れられている仮説であり、近年の研究でも同様の見方がとられている（たとえば、Levin and Rappaport 2005）。

多くの言語で意味役割の階層性が有効な分析になると同様に、中国語にも通常(1)のような階層が当てはまる（cf. 陈 1994）。たとえば、動作主と対象を例にとると、(3)のように、中国語でも動作主が対象よりも統語的に高い位置に具現される。また、対象と場所を例にとると、(4)のように、対象が場所よりも統語的に高い位置に具現される。

(3) 张三 打 了 李四。

張三 殴る ASP 李四

(i) ‘張三が李四を殴った。’

(ii) * ‘李四が張三を殴った。’

(4) a. 张三 到 家 了。

張三 着く 家 ASP

‘張三は家に着いた。’

b. *家 到 张三 了。

家 着く 張三 ASP

Lit. ‘家に張三が着いた。’

(3i)の日本語訳から分かるように、例(3)において、動詞“打”（殴る）の動作主（殴る人）“张三”は主語に、そして対象（殴られる人）“李四”は目的語に具現化されている。このことは、<動作主>と<対象>を比べた場合、中国語が(1)の階層性に従って、主語と目的語の意味役割が割り当てられていることを示している。したがって、目的語に動作主、主語に対象の解釈が割り当てられる(3ii)は容認されない。例(4a)では、動詞“到”（着く）の対象“张三”は主語に、そして場所“家”は目的語に具現されており、(4)も(1)の階層性に従って、主語と目的語に意味役割が割り当てられることを示している。もちろん、対象と場所が逆転して現れる(4b)は非文となる。

ところが、例(5)に示すように、中国語には一見、(1)の階層性に反する形で項が具現化されることがある。

(5) a. 衣服 洗累 了 妈妈。

服 洗う一疲れる ASP お母さん

‘お母さんが服を洗ってその結果お母さんが疲れた。’

b. 石头 上 刻 着 一个 字。

石 上 彫る ASP 一-CL 文字

‘石の上には文字が一つ彫ってある。’

c. 两碗饭 吃 三个 人。

二杯のご飯 食べる 三-CL 人

‘二杯のご飯で三人の人間が食べることができる。’

(5a)は、一般に、結果複合動詞構文と呼ばれる構文に相当し、例(3)で見た一般的な中国語

の事実反して、動作主が目的語となることが出来る。(5a)の意味からも分かるように、動詞“洗”(洗う)の動作主である“妈妈”(お母さん)は、(5a)では結果複合動詞“洗累”(洗う一疲れる)に後続し、目的語となっている³。(5b)は中国語学で存現文と呼ばれる文であるが、例(4)とは異なり、(5b)では、場所項“石头”(石)が対象項“字”(文字)よりも統語的に高い位置(すなわち、主語)に具現化されている。さらに、(5c)は中国語学で“供用句”と呼ばれる構文で、動詞“吃”(食べる)の動作主“三个人”(三人)も(1)の階層性に反して主語ではなく目的語に具現化されているように見える。(5a,b,c)はどれも動作主の現れ方に関して特異である。(5a)の結果複合動詞構文と(5c)の“供用句”では通常主語に現れる動作主は目的語に現れている。(5b)の存現文では、本来“刻”(彫る)の意味構造に含まれる動作主(彫る人)は取り除かれている。(5a,b,c)では動作主は卓越の項になっていないのである。このことから、今後、これらの構文を総称して、「非動作主卓越構文」と呼ぶ。

このように、中国語の非動作主卓越構文では(1)の階層性に反した形で項の具現化が行なわれることが確認される。本研究の目的は、これらの構文がなぜ一般的な仮説に反して、項が逆転した形で具現化されるのかを明らかにすることである。本論文は全体を通して、(1)の意味役割の階層性は基本的に維持されるが、(5)の非動作主卓越構文で意味役割の階層性に反して項の具現化が行なわれるのは、それぞれの構文で「動詞+動詞」や「動詞+アスペクト助詞」のように、単独の動詞ではなく、動詞と別の要素が合成される場合に起こる現象であることを示していく。特に、第四章で議論するように、見かけ上は現れない動詞と合成して、複合動詞を形成することは、本論の分析が正しいことを如実に物語っている。以下では、本論が扱う構文の記述的・理論的先行研究をまとめていく。

1.2. 結果複合動詞構文の項の文法関係

1.2.1. 呂 (1946)

例(5a)で見たように、中国語非動作主卓越構文のうちの結果複合動詞構文では動作主が目的語になることができる。この非典型的な項の具現化に関する理論的研究は1990年代になって初めて現れるが(Li 1995; 1999), 事実の観察はすでに呂 (1946)でされており、1940年代にまでさかのぼることができる。呂 (1946)は、原則、動作主であれば主語であり、対象であれば目的語であると仮定した上で、(5a)のような文には二通りの分析が可能であると述べている。一つは、もし(5a)における複合動詞を自動詞的用法とすれば、(5a)における動作主“妈妈”(お母さん)は倒置された主語となり、(5a)は主語倒置型の構文になるという分析である。もう一つは、もし複合動詞を使役の意味・用法とすれば、(5a)タイプの文は主動詞のない文になるという分析である。呂 (1946)によれば、後者の分析が可能となるのは、使役においては何が動作主であるかが不明瞭であるからである。ここで注意したいのは、呂 (1946)では動作主であれば主語であるという絶対的關係を前提としているため、主語が倒置されているという分析を行なっていることである。第二章で詳しく議論するように、(5a)の動作主は統語的なふるまいを見る限り、主語ではなく、紛れもない目的語であることが分かる。

呂 (1946)の二通りの分析のうち、任 (2005)は後者の分析を採用し、(5a)タイプの文を使役文として分析している。任 (2005)は(5a)の“妈妈”(母)を使役の対象であると分析し、

一般的な動作主とは異なるとしている。

このように、中国語学では(5a)の“妈妈”(母)を動作主とすべきか使役の対象とすべきかで分析が異なる。一方、以下で見るように、理論言語学では(5a)の“妈妈”(母)のような名詞句は、動作主かつ使役の対象であると見なされている。

(5a)タイプの項の具現化を明らかにするためには、結果複合動詞における項構造のとらえ方を示しておく必要がある。一般に、結果複合動詞の項構造はそれぞれの動詞を組み合わせで作られると考えられている。なお、ここで結果複合動詞というのは「動詞+動詞」型の複合動詞において、前項動詞(V1)が動作を表し、後項動詞(V2)が前項動詞の動作によって引き起こされた結果を表すものを指す(cf. Li and Thompson 1981)⁴。たとえば、“追累”(追う一疲れる)において、“追”が追うという行為を表し、“累”が疲れたという結果状態を表すといったタイプの複合動詞がこれにあたる。

“追累”(追う一疲れる)を例にとると、その項構造は、(6)に示すように“追”(追う)の項構造<動作主, 対象>と“累”(疲れる)の項構造<対象>が複合される形となる。Li (1990; 1993)によれば、結果複合動詞の項は形態的にもアスペクト的にも主要部である V1 の意味役割内の階層性を保持したまま具現化される。なお、便宜上、結果複合動詞がとる意味役割関係を本論では次のように表す。前項動詞(V1)の項構造は<動作主, 対象>のように、後項動詞(V2)はイタリックで<対象>のように表す。すなわち、(6)では“追”(追う)の項構造は<動作主, 対象>であり、“累”(疲れる)の項構造は<対象>である。

- (6) a. “追”(追う): <動作主, 対象>
b. “累”(疲れる): <対象>
c. “追累”(追う一疲れる): <<動作主-対象>, 対象> or <動作主, <対象-対象>>

Li (1990;1993)では、(1)の階層性でも見たように、動作主は対象よりも高い階層にあり、統語上もより高い位置に具現化されると仮定し、(6a)は動作主が対象よりも高い階層にある項構造を表している。さらに、Activity (活動)は State (状態)よりもアスペクト上優位であるという Grimshaw (1990)の研究を踏まえ、結果複合動詞におけるアスペクトの主要部は活動を表す V1 であると主張している。以上のことを前提とし、Li (1993)は結果複合動詞の項構造は主要部の情報、すなわち V1 内の意味役割の階層性を保持する必要があると主張し、この階層が保持されるために、“追累”(追う一疲れる)の項構造は、動作主が対象よりも高い階層にある(6c)のいずれかになるとする。結果複合動詞構文は二項述語であるため、(6a)と(6b)が合成すると、“累”(疲れる)の項は“追”(追う)のどちらかの項と同定される必要がある。ゆえに、(6c)の二つの項構造が作られるのである。

(6)が結果複合動詞の基本的な項構造であるが、Li (1993)は Bao Zhiming (個人談話, 1989)からの指摘を受け、“追累”(追う一疲れる)には三つ目の解釈、すなわち第三の項の文法関係が可能であるという事実に触れ、Li (1990; 1993)とは別の分析が必要になると述べている。この三つ目の解釈とは、まさに、例(5a)で見たような目的語が動作主として解釈されるパターンを指している。以下では、この第三の解釈を含めた結果複合動詞における項の具現化がどのように先行研究で説明されてきたかを見る。

1.2.2. Li (1995; 1999)

結果複合動詞における項の具現化を整理すると，“追累”（追う一疲れる）では，例(7)に示すように，論理的に可能なはずの四つの解釈が三つに絞られる。

- (7) 淘淘 追累 了 悠悠。
 淘淘 追う一疲れる ASP 悠悠
- (i) ‘淘淘が悠悠を追ってその結果悠悠が疲れた。’
 (ii) ‘淘淘が悠悠を追ってその結果淘淘が疲れた。’
 (iii) * ‘悠悠が淘淘を追ってその結果淘淘が疲れた。’
 (iv) ‘悠悠が淘淘を追ってその結果悠悠が疲れた。’

Li (1995: 265 (訳は筆者による))

例(7)は“追累”（追う一疲れる）の可能なすべての解釈を示している。一つ目の解釈は，主語の“淘淘”が目的語の“悠悠”を追ってその結果目的語の“悠悠”が疲れるという解釈である(7i)。二つ目の解釈は主語の“淘淘”が目的語の“悠悠”を追ってその結果主語の“淘淘”が疲れるという解釈である(7ii)。そして，三つ目の解釈は目的語の“悠悠”が主語の“淘淘”を追ってその結果目的語の“悠悠”が疲れるという解釈である(7iv)。

ここで重要なのは三つ目の解釈である。通常，動作主は意図的な行為を表すとされているが，例(7)の結果複合動詞“追累”（追う一疲れる）の三番目の解釈(7iv)では，目的語の“悠悠”が追うという行為の動作主を表す。これは動作主がいつも主語になるという通説に反する現象を示していることになる。動作主が目的語に具現化されていることを図示すると(8)のようになる。(8)では，目的語の“悠悠”に動作主の解釈が与えられており，全体として，V1の動作主（追う人）とV2の対象（疲れる人）が“悠悠”であること，そしてV1の対象（追われる人）が“淘淘”であることを示している。

- (8) 淘淘 追累了 悠悠。
 | |
 <対象> <動作主/対象>

このような結果複合動詞構文において動作主と対象が逆転した形で具現化される問題を解決するため，Li (1995; 1999)は意味役割の階層性とは別に使役の階層性を仮定し，使役の階層性が成り立つ場合にのみ動作主と対象の逆転が可能になるという分析を提案している。ここでの使役の階層はCauseとAffecteeの使役役割から構成され，c-rolesと呼ばれている。より具体的には，Li (1995; 1999)はこれらの使役役割が以下の条件のもとで結果複合動詞に割り当てられると，動作主が目的語となり得ると論じている。以下がその条件である。

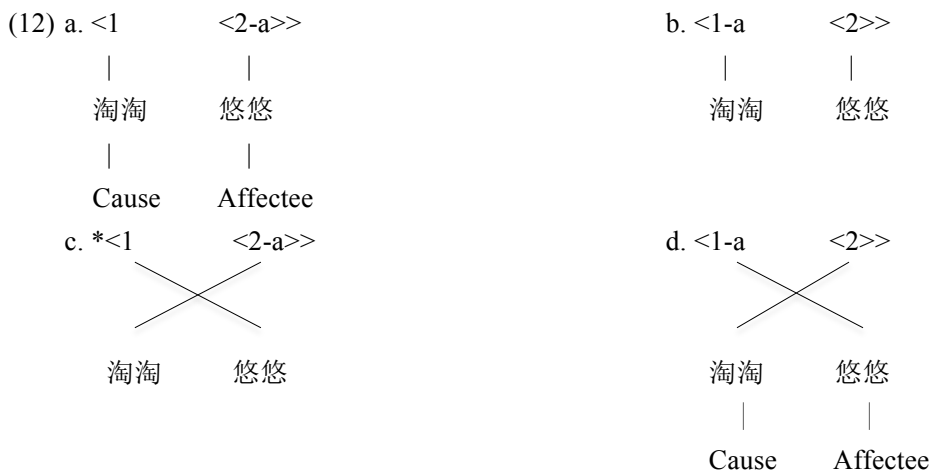
- (9) C-roles (causative roles) are assigned according to the algorithms below.
- a. the argument in the subject position receives the c-role Cause from a resultative compound if it receives a theta role only from $V_{\text{caus-}}$.
 - b. the argument in the object position receives the c-role Affectee from a resultative

compound if it receives a theta role at least from X_{res-} .

- (10) Theta role assignment may violate the thematic hierarchy when the NP arguments involved also receive c-roles as specified in (9).
- (11) The mapping from the argument structure of a lexical item to syntax contains at least the following steps:
- Step 1: Randomly assign theta roles to syntactic argument positions.
- Step 2: Where possible, assign c-roles to these positions according to (9).
- Step 3: Check the result of theta role assignment according to (10).

Li (1999: 453)

(9-11)からも分かるように、Li (1999)では結果複合動詞に特化した複雑なルールが仮定されている。そのうち、(9)は前項動詞と後項動詞がとる意味役割と照らし合わせて、c-roles が適応される条件を表している（なお、 V_{caus-} は結果複合動詞の前項動詞(V1)を X_{res-} は後項動詞(V2)をそれぞれ表している）。より具体的には、(9a)は主語名詞が V_{caus-} (V1)からのみ意味役割を与えられているときは Cause が付与されることを示している。また、(9b)は目的語名詞が少なくとも X_{res-} (V2)から意味役割を与えられているときに Affectee が付与されることを示している。(10)は c-roles が与えられたときのみ、意味役割の階層性の違反が可能になること、つまりここでは動作主が目的語になることができることを示している。そして、(11)は結果複合動詞の項の具現化に関するルールの順序を規定するものである。すなわち、VV 複合動詞があると、まず、それぞれの意味役割を統語上に具現し、次に、(9)に従って c-roles が与えられ、最後に得られた結果が意味役割の階層性に違反してもよいかどうかを(10)と照らし合わせるのである。(9-11)の前提のもとで、(7)の論理的に可能なはずの四つの解釈が三つに絞られるという事実は(12)により説明されることになる。



Li (1995: 270)

(12)の<1, 2>と<a>はそれぞれ V1 と V2 の項構造を表している。本論の表記に直すと、それぞれ<動作主, 対象>と<対象>に対応している。(12a)の<2-a>のような表記は V1 の対象と V2 の対象が同定され、一つの意味役割をなすことを示している。このように項の同定が行

なわれるのは、Li (1990)によれば、Chomsky (1981)の Theta-criterion の違反を免れるためである。

項の同定が行なわれると、(12a,b,c,d)の一行目にあたるような<1 <2-a>>と<1-a <2>>の二つの項構造が作られる。ここで、(11)の STEP1 から、意味役割の主語と目的語へのリンクが形成される。結果として、(12)の四パターンのリンキングが作られる。これは結果複合動詞の項の具現化の最大のパターンであるが、c-roles が(9)のルールに従って与えられるのは、(12)の四パターンのうち、(12a)と(12d)の二つに限られる。

(9a)によれば、主語位置の名詞句に使役役割 Cause が与えられるのはその名詞句が V1 からのみ意味役割が与えられている場合である。(12a)では、主語名詞の“淘淘”は V1 から動作主の意味役割しか与えられていない。したがって、“淘淘”には使役役割 Cause が付与され、また、(9b)から目的語位置の名詞句に使役役割 Affectee が与えられるのはその名詞句が V2 から意味役割を与えさえされていけばよいので、V2 から対象を付与されている目的語名詞の“悠悠”に使役役割 Affectee が付与される。以上の意味役割関係から、(12a)は“淘淘”が“悠悠”を追ってその結果“悠悠”が疲れたという(7i)の解釈となり、さらに使役役割が付与されているので、“淘淘”には原因(Cause)の意味が“悠悠”には被影響者(Affectee)の意味が付加されている。

次に、(12b)の主語名詞“淘淘”には V1 と V2 の両方から意味役割が与えられており、「主語位置の名詞句に使役役割 Cause が与えられるのはその名詞句が V1 からのみ意味役割が与えられている場合である」という(9a)に違反するので、使役役割 Cause を与えることはできない。同様に、目的語名詞の“悠悠”は V2 から意味役割を与えられていないので、(9b)により使役役割 Affectee を付与することもできない。したがって、(12b)では意味役割関係から“淘淘”が“悠悠”を追ってその結果“淘淘”が疲れたという(7ii)の解釈が得られる。

(12)の四パターンのうち、(12c)は不可能な解釈となる。(12c)の主語名詞“淘淘”には V1 と V2 の両方の意味役割が付与されている。(9a)により“淘淘”には Cause を付与することができない。また、目的語名詞の“悠悠”には V1 からのみ意味役割が与えられているので、(9b)により“悠悠”に Affectee を付与することもできない。(10)によれば、項の逆転が可能となるのは、使役役割が与えられているときのみであるので、(12c)が図示しているような項の逆転は不可能となる。実際、(12c)の解釈に当たる“悠悠”が“淘淘”を追ってその結果“淘淘”が疲れたという意味は(7iii)からも分かるように不可能である。

最後に、(12d)では主語名詞の“淘淘”に使役役割 Cause が与えられ、目的語名詞の“悠悠”に Affectee が与えられる。(9)から“淘淘”に Cause が与えられるのは V1 からのみ意味役割(対象)を付与されているためであり、“悠悠”に Affectee が与えられるのは V2 から意味役割(対象)を付与されているためであることが分かる。そうすると、(10)によれば、使役役割が付与されている場合は逆転した項の具現化が許されるので、(12d)で図示されているように、逆転したリンキングが可能となる。したがって、意味役割関係から(12d)の解釈は目的語の“悠悠”が主語の“淘淘”を追って“悠悠”が疲れるとなり、(7iv)の目的語が動作主として解釈される読みが得られる。なお、便宜上、以後、目的語が動作主として解釈されることを「動作主目的語」と呼ぶ。

Li (1995; 1999)の提案では動作主目的語が可能となるには通常の意味役割の階層性に加

えて使役役割の階層性を仮定する必要がある。しかし、Li (1995; 1999)の分析には経験的・理論的問題点がいくつかある。Li (1995; 1999)の使役役割は基本的に Grimshaw (1990)の英語の心理動詞の分析を援用しているが、英語の *frighten* のような心理動詞に見られる使役関係とは異なり、中国語の結果複合動詞では動詞が複合した時点で必然的に使役関係の意味が生まれる。Li and Thompson (1981)の結果複合動詞の定義からも分かるように、V2 は V1 の行為の結果生じる状態を示すため、V1 と V2 の間には因果関係があると言える。言い換えれば、(12)のどの解釈においても V1 と V2 の間には定義上、使役関係の意味があるということである。したがって、(12b,c)のように V1 と V2 の間に使役関係が示されないのは定義からも事実からも逸脱すると言える。また、Li (1995; 1999)の分析は、結果複合動詞“追累”(追うー疲れる)の議論が主であり、記述面においても不備がある。さらに、Li (1995; 1999)が仮定するリンキングルールが複雑であるという点も理論的に改善する余地がある。本論では、第二章において語彙概念構造を用いた分析を提案し、リンキングルールを一つに簡略できること、より多くのデータを説明できることを示し、先行研究よりも本分析が妥当であることを示す。

1.2.3. Her (2007)

Li (1995; 1999)の分析を批判したものとして、Her (2007)の研究がある。Her (2007)は Li (1995; 1999)の分析に対して三つの問題点を指摘している。一点目は *theta-criterion* (Chomsky 1981)を緩和する必要性があるということ、二点目は *c-roles* が結果複合動詞にのみ適応されるため、独立した根拠がないこと、そして三点目は、使役性は Dowty (1991)の *proto-agent* と *proto-patient* を区別する上でも重要な概念であるので、通常の意味役割の階層と切り離して仮定するのは、理論上好ましくないということの三つである。

これらの指摘を踏まえた上で、Li (1995; 1999)とは異なり、Her (2007)は LFG の枠組みを用いて結果複合動詞における動作主目的語の問題を、以下のようなメカニズムによって捉えることを提案している。

(13) Causativity Assignment in Resultative Compounding:

An unsuppressed role from V_{res} receives [af] iff an unsuppressed role from V_{caus} exists to receive [caus].

(14) Resultative Compounding

$V_{caus} <x y> + V_{res} <z> \rightarrow$

- $V_{caus} V_{res} <\alpha \beta>$, where $<\alpha \beta> =$ (i) $<x y-z>$
(ii) $<x[caus] y-z[af]>$
(iii) $<x-z y>$
(iv) $<\cancel{x}-z[af] y[caus]>$

Her (2007: 234)

Her (2007)の分析でも重要となる概念はやはり使役役割である。(13)はその使役役割の付与の条件を示したものである。また、(14)は結果複合動詞が持ちうる項構造のパターンを示したものである。(14)からも分かるように、意味役割に加えて *caus(e)*と *af(fectee)*の使役役

割が項構造に組み込まれている。なお、(14)の打ち消し線（たとえば， $y-\bar{z}$ ）はその項が“Suppression”（抑制）されたことを意味し，抑制された項は意味的には存在するが，リンクングには関わらない。この分析では，意味役割と名詞句を厳密な一対一のリンクング関係に保て，theta-criterion (Chomsky 1981)を緩和する必要がなくなるという利点がある(Her 2007)。(13)と(14)から Her (2007)は，結果複合動詞が持ち得る解釈を以下のように説明する。

(15) Zhangsan zhui-lei le Lisi.

John chase-tired-ASP Lee

a. ‘Zhangsan chased Lee to the extent of making him (Lee) tired.’

$\langle x \quad y-\bar{z} \rangle$ (non-causative)

S O

John Lee

$\langle x[\text{caus}] \quad \bar{y}-z[\text{af}] \rangle$ (causative)

S O

John Lee

b. *‘Lisi chased Zhangsan and Zhangsan got tired.’ (non-existent)

$\langle x \quad y-z \rangle$

*O *S

Lee John

c. ‘Zhangsan chased Lisi and Zhangsan got tired.’

$\langle x-\bar{z} \quad y \rangle$ (non-causative)

S O

John Lee

d. ‘Lisi chased Zhangsan and was made tired (by Zhangsan).’

$\langle \bar{x}-z[\text{af}] \quad y[\text{caus}] \rangle$ (causative)

O S

Lee John

Her (2007:234-235)

(15)は結果複合動詞“追累”（追う一疲れる）が持ちうる可能な解釈を示したものであるが（例(7)も参照），具体的なリンクングは以下ようになる。

(16) The Unified Mapping Principle (UMP):

Map each argument role, from the most prominent to the least, onto the highest compatible function available.

(*A function is *available* iff it is not linked to a role.)

Her (2007:229)

(16)は概ね意味役割がより優位であるものが統語上より高い位置にリンクされることを表している。本論の議論で重要なのは，なぜ動作主目的語が可能かという問題なので，ここ

では(15d)がなぜ動作主目的語となることができるのかについてのみ述べることにする。(15d)の項構造<⌘-z[af] y[caus]>は、(12)の使役役割の付与に従い $V_{res}(V2)$ の意味役割<z>に af(fectee)が、 $V_{caus}(V1)$ の意味役割<y>に caus(e)が付与されている。ここで重要なのは、動作主<x>が抑制されているため、リンキングに関与しないことである。そうすると、意味役割<z[af]>と<y[caus]>においてどちらが優位(prominent)であるかが語順を決定する上で重要となる。Her (2007)は、Dowty (1991)でも主張されているように、[caus]は動作主に関わる典型的な要素であり、[af]は対象（または受動者）に関わる典型的な要素であるため、[caus]が[af]よりも優位であると仮定し、そのため、<y[caus]>が主語 John に<z[af]>が目的語 Lee にリンクされ、動作主目的語が可能になると分析している。

しかしながら、Her (2007)の分析も結局は使役役割が意味役割の階層性を書き換えるという Li (1995; 1999)の分析と同じものであると言える。また、もし[caus]が動作主に関わる典型的な要素であるとすれば、そもそもなぜ(14d)において動作主<x>と融合されていないのか疑問が残る。さらに、Li (1995; 1999)の分析でも指摘したように、なぜ結果複合動詞に使役の解釈とそうでない解釈の区別があるのかも疑問である（(15)の“causative”と“non-causative”の区別）。また、Li (1995; 1999)の分析と同様、経験的な問題もある。たとえば、Her (2007)の分析では、“冻死”（凍らせる一死ぬ）などの結果複合動詞になぜ動作主目的語ができないのかについて説明ができない。“冻死”（凍らせる一死ぬ）は“追累”（追う一疲れる）と同じ意味役割関係をもつので、Her (2007)の分析では動作主目的語解釈が可能であることが予想されるが、事実はそうではない。つまり、Her (2007)の分析もまた Li (1995; 1999)の分析と同様に経験的・理論的問題が残るということである。

1.3. 存現文の項の文法関係

次に、中国語非動作主卓越構文のうちの存現文における項の文法関係について見ていくことにする。存現文は英語などの Locative Inversion に相当すると思われる構文で、対象項と場所項が倒置されて現れる。1.3.1 節で存現文の基本的な語順を確認した上で、その後、Locative Inversion と中国語の存現文における先行研究を検討する。

1.3.1. 語順

意味役割の階層性に反して項が現れるものとして、動作主目的語以外に場所項と対象項の逆転現象が中国語の存現文という構文に見られる。存現文は中国語学で盛んに論じられている構文の一つであり、「場所+動詞+対象」の語順をとり、「ある場所にあるものが存在する」という意味を持つことが先行研究により明らかにされている（宋 1982a,b ; 李 1986 ; 任 2005; 2007 など）。次の例を観察されたい。

(17) 衣服 上 绣 着 一朵 花儿。
服 上 縫う ASP 一-CL 花
‘服の上には花模様がひとつ縫ってある。’

李 (1986:78)

例(17)は服に花模様が縫ってあることを意味する。項の具現化と関連して注目されたいの

は、動詞“绣”（縫う）がとる意味役割である。“绣”（縫う）が項に与える意味役割は、動作主（縫う人）と対象（縫われるもの）である。また、場所の意味役割ももっていると考えられる。ただし、場所は通常付加詞として具現化される。すなわち、“绣”（縫う）は本来 (18)のような文を作ると考えられる。

(18) 张三 在 衣服 上 绣 了 一朵 花儿。

張三 で 服 上 縫う ASP 一-CL 花

‘張三は服の上で花模様をひとつ縫った。’

(18)の下線部は場所が前置詞“在”（で）を伴って付加詞として現れることを示している。また、動作主の“张三”は主語位置に、そして対象の“一朵花儿”（ひとつの花）は目的語位置に現れている。ところが、同じ“绣”（縫う）という動詞が使われている例(16)のような存現文では動作主が現れず、付加詞である場所が主語にそして対象が目的語になっている。これは(17)と(18)では対象項と場所項が逆転した形で現れていることを示している。

場所項が対象項に先行する構文は英語にも存在し、存現文はいわゆる *Locative Inversion* と呼ばれる構文と呼応している。しかし、中国語の存現文は全く *Locative Inversion* と同じふるまいをするというわけではない。特に、存現文では *Locative Inversion* とは異なり、受動形でない他動詞も現れることができる。以下では、中国語の存現文の先行研究をまとめる前に、まず *Locative Inversion* の先行研究をまとめることで、両者の相違点を浮き彫りにする。

1.3.2. Locative Inversion

1.3.2.1. 語彙論的分析

存現文に対応すると考えられる *Locative Inversion* とは(17)のような文である。

(19) *Onto the ground had fallen a few leaves.*

Bresnan (1994: 78)

例(19)から分かるように、*Locative Inversion* では場所(ground)が対象(leaves)に先行している。当該構文に関して、Bresnan (1994)と Bresnan and Kanerva (1989)は英語とチェワの分析から以下のような一般化を導き出している。

(20) a. *Locative Inversion* に現れる動詞は<theme location>の項構造を持つ非対格自動詞であるか、または動詞の受動形である。

b. 他動詞は現れない(*Transitivity Restriction*)。

(20)は *Locative Inversion* に関する一般的な制約を示したものである。*Locative Inversion* は談話機能上、提示機能を持つとされており(Bresnan 1994)、存在・出現を表す非対格自動詞が生起しやすい。ここで重要なのは *Locative Inversion* に現れる動詞が自動詞に限られ、他動詞は現れないということである。これは *Locative Inversion* の意味的な特徴のひとつである状態性に起因すると考えられる。したがって、他動詞でも結果・状態性が焦点化された(21)

の受動形は Locative Inversion に現れることができる。

(21) Among the guests of honor was seated my mother.

Bresnan (1994: 78)

Bresnan (1994)は、Locative Inversion が特異な語順となるのは、談話構造上の要請を満たすためであるとして、次のような分析を提案している。

(22) < th loc >

 | |
 O S
 focus

Bresnan (1994:90)

通常、<th(eme)>と<loc(ative)>の意味役割があった場合、対象項は主語として、場所項は斜格として現れる。しかし、Bresnan (1994)によれば、(19)のように、倒置がおこるのは、(22)の項構造に含まれる<th>に“presentational focus”（指示的焦点）がかかるためであると主張している。Bresnan (1994)は、通言語的に見て主語は無標の談話トピックであるという前提のもとで(cf. Andrews 1985), もし、焦点が当たっている<th>が主語として具現化されると、情報構造的に矛盾が起こるので、その矛盾を回避するため、Locative Inversion では焦点のあたっていない場所が主語として具現されるという分析を提案している。

しかし、Bresnan (1994)の分析には経験的な問題がある。Bresnan (1994)自身でも取り上げられているが、非対格自動詞以外にも活動動詞が Locative Inversion に現れることができる。活動動詞は典型的に<ag(ent)>を項にとる動詞であるため、(20a)の一般化に合わない。(23a)において動詞 shoot に後続する名詞 sniper は対象ではなく動作主であり、(23b)の動詞 work も通常動作主をとる動詞であるが、ともに Locative Inversion が可能である。

(23) a. Through the window on the second story was shooting a sniper.

Bresnan (1994: 84)

b. On the third floor WORKED two young women ...

Levin and Rappaport Hovav (1995: 224)

Bresnan (1994)は(23)のような文が可能となるのは、(24)で示すような“presentational overlay”という規則があるためであると主張している。

(24) lexical a-structure:

 < ag >
 |
presentational overlay: < th loc >
 | |
 O S
 focus

Bresnan (1994:91)

(24)では動作主と対象のリンクが形成されており、元の動詞の項構造に(22)の構造を重複させた形となっている。(22)で見たように、<th>に指示的焦点がかかると、Locative Inversionが可能となるので、例(23)のような動作主と考えられる名詞でも、(24)のように、それが<th>とリンクしている場合は倒置が可能になる。しかしながら、小野 (2005)が指摘するように、談話情報がレキシコン内の語彙情報を書き換えるということが理論上許されるかどうかという問題が残る。

非能格自動詞でも Locative Inversion に現れることから、Levin and Rappaport Hovav (1995)は語彙論の説明を放棄し、Locative Inversion に生起する動詞は“informationally light”（情報上の軽さ）であるという機能的な分析を試みている(cf. Birner 1995)。すなわち、(22b)において動詞 work が生起可能なのは Locative Inversion では動詞「働く」本来の活動の意味は希薄し、働いている状態であるという<存在>の意味が前面に出ているからだという説明である。しかしながら、「情報の軽さ」という概念は曖昧であり、Locative Inversion の本質的な問題である語順を解決する手段とはなっていない。

1.3.2.2. 統語論的分析

Bresnan (1994) や Bresnan and Kanerva (1989)などの語彙論的分析に対して、Coopmans (1989)は統語論的分析を提案している。Coopmans (1989)は英語に pro が許されないという絶対的な制限をやや緩和し、ある環境下では pro-drop が可能であると想定した上で、以下のような主張をしている。

(25) pro-drop in English manifests itself roughly in the environment ... where no external θ -role is assigned in the syntax.

Coopmans (1989:734)

(25)は外項が与えられていなければ pro-drop が可能であることを示している。Coopmans (1989)は、英語の Locative Inversion は“semi-pro-drop”構造をなしているとし、COMP（補文標識）にある前置詞句が（随意的に）pro-drop を引き起こすため、Locative Inversion では動詞の受動形か、あるいは非対格自動詞しか許されないと主張している。なお、ここでの前置詞句は動詞に下位範疇化されているもののみを指す(Coopmans 1989:735)。すなわち、方向や位置を表す前置詞句は pro-drop を引き起こすことができるが、一方、様態、道具、理由や時間などを表す前置詞句は引き起こすことができないということである。以上のことを形式化すると次のようになる。

(26) Indexed_{COMP} identifies ‘pro’: [_i PP]_{COMP} pro_i

Coopmans (1989:736)

(26)は補文標識に主題化された前置詞句が、それが統御する位置において pro-drop を引き起こすことができることを示している。(25)と(26)を前提として、Coopmans (1989)は、英語の Locative Inversion は次のような構造をなしていると提案している。

(27) [_{COMP} PP_i] [_e_i INFL [V NP t_i]]_s

Coopmans (1989:737)

(27)では、(26)により補文標識にあるインデックス“i”が空主語(e)と同定されている。また、この補文標識は主語位置を下位範疇に持つ語彙的主要部として働くことができるとしている(Coopmans 1989)。そうすると、補文標識が空主語を含んでいるとすることができ(Coopmans (1989)では‘cover’と呼んでいる)、INFL が主格を付与することによって、主語を動詞句内にとどめることが可能となる。従って、動詞に後続する名詞は(格を与えられるために)移動することなくとどまることができ、(27)の構造が示しているように、Locative Inversion の語順となるわけである。

(27)の分析は、外項のない非対格自動詞と動詞の受動形が Locative Inversion に現れることができることを予測できるという利点がある。また、pro-drop が適用できない外項を持つ他動詞が Locative Inversion に現れることができないことも予測することが可能である。Coopmans (1989)の分析は Locative Inversion に現れる動詞制約を理論的に予測することができるという点において説明力のあるものと言えるが、この分析を中国語の存現文に応用することはできない。なぜなら、例(17)でも見たように、存現文では受動形でない他動詞(“绣”(縫う))が現れることができるからである。他動詞は外項を持っているため、Coopmans (1989)の分析では当該構文に現れないことを予測する。そうすると、中国語の事実は説明できないことになる。これと同じことは、Bresnan (1994)などの語彙的分析にも言えることである。中国語で他動詞が生起できるということは、Bresnan and Kanerva (1989), Coopmans (1989), Bresnan (1994)で分析された英語やチェワ語とは大きく異なるので、存現文には異なる説明が必要になる。

1.3.3. Pan (1996)

前述したように、存現文では他動詞が現れることが可能である。この事実に加えて、存現文では動詞の直後にアスペクト助詞(“着”と“了”)が現れることもよく知られている。

- (28) a. 紙 上 画 着 一只 鸟。
 紙 上 描く ASP 一-CL 鳥
 ‘紙の上には鳥が一匹描かれている。’
 b. 路 上 倒 了 一棵 树。
 道 上 倒れる ASP 一-CL 木
 ‘道の上には木が一本倒れている。’

(28)はどちらも存現文の例であるが、(28a)では一般に継続を表すアスペクト助詞“着”が現れており、(28b)では完了を表す“了”が現れている。Pan (1996)はこれらのアスペクト助詞に着目し、存現文で他動詞が生起できるのはアスペクト助詞“着”によって動作主が取り除かれるからであるという分析を提案している。Pan (1996)は、動作主を消すという操作を“zhe operation”と呼び、(29)のように規定している(ただし、アスペクト助詞“了”にはこの操作がないとしている)。

(29) zhe operation: <agent, theme, location,> → <theme, location>

The zhe operation applies if

- a. the verb in question is an accomplishment verb with the argument structure: <agent, theme, location>;
- b. the location is predicated of the theme; and
- c. the sentence in question is [-stative]

Pan (1996:428)

(29)は“*zhe operation*”によって、動詞の項構造が<agent, theme, location>から動作主が削除され、<theme, location>になることを示している。(29a)は“*zhe operation*”が<agent, theme, location>の項構造をもつ達成動詞に適用されることを示している。(29b)は<location>が<theme>を述語にとることが示されている。さらに、(29c)は、“*zhe operation*”が適用される文は[-stative]、つまり非状態的であることが条件であることを示している。

以上のことを(28a)に当てはめると、本来は<動作主> (描く人)、<対象> (描かれるもの)、そして付加詞として<場所> (描く場所) を項にとる(28a)の他動詞 “画” (描く) は、“*zhe operation*”により<対象>と<場所>を項にとる述語に変換されるということになる。この分析はLocative Inversionに現れるのは<theme, location>の項構造をとる動詞であるというBresnan and Kanerva (1989)とBresnan (1994)の分析と基本的に同じタイプの分析であると言えるであろう。

Pan (1996)の分析には経験的・理論的問題がある。第一に、動作主を取り除くという操作だけでは<場所>が<対象>よりも高い位置に具現化されることを保証できない。そのため、(29b)のように場所項が対象項よりも高い位置に生成されることを条件として記述する必要がある、メカニズムを簡略化できるという点において議論の余地がある。第二に、なぜ自動詞でも他動詞と同じ語順になるのかを説明できない。第三章で詳しく議論するように、非対格自動詞と非能格自動詞でもアスペクト助詞は存現文では必須の要素である。そうすると、経験的側面から非対格自動詞と非能格自動詞でもアスペクト助詞による働きかけがあることが示唆されるが、Pan (1996)の分析ではアスペクト助詞による働きかけは他動詞に限られているので、不明瞭となる。第三に、他動詞、非能格自動詞そして非対格自動詞が、一貫してそれらの動詞がもつ行為連鎖における行為や変化を修飾できないという事実を捉えることができない(「行為連鎖」については、影山 (1996)を参照されたい)。特に、動作主を消すという分析では、動作主を持たないとされている非対格自動詞が他動詞や非能格自動詞と同じ行為連鎖上の現象を示すことに対して、説明を与えるのは困難である(詳しくは第三章を参照)。

1.4. 双数量詞構文の項の文法関係

1.2 節において、中国語の結果複合動詞構文では動作主が目的語となることができるということを見たが、結果複合動詞構文以外にも動作主が目的語になっていると思われる非動作主卓越構文がある。(30)のような文がこれに相当する。

(30) 一锅 饭 吃 十个 人。

一-CL ごはん 食べる 十-CL 人

‘ひと鍋のごはんで十人の人間が食べることができる。’

任 (2005: 15)

(30)の動詞“吃”は食べるという意味である。言うまでもなく、ご飯を食べる行為をするのは人間であり物ではない。ところが、(30)では食べる行為をする人“十个人”(十人(動作主))は、一般的な見解に反して主語位置ではなく、目的語位置に現れている。(30)タイプの構文はあまり研究されていないが、先行研究により以下の特徴があることが明らかになっている(李・范 1960; 任 2005 など)。

(31) a. 双数量詞構文の主語名詞句と目的語名詞句は数量表現を伴わなければならない。

b. 双数量詞構文は主語名詞句と目的語名詞句の間に数量対比関係がある。

もちろん、(31)の二つの特徴は(30)に当てはまる。(30)の主語と目的語はそれぞれ「一」と「十」という数が指定されている。また、(30)の主語“一锅饭”(ひと鍋のご飯)と目的語“十个人”(十人)の間には、ひと鍋のご飯は十人の人間が食べるのに十分であるという数量対比関係がある。なお、当該構文の主語名詞句と目的語名詞句に数量詞が必須であることから、以後、本論では(30)のようなタイプの文を双数量詞構文と呼ぶ。

(30)の解釈からも分かるように、双数量詞構文は、基本的に主語が目的語の V できる量を表している。このため、任(2005)は、「与える」という概念が当該構文の生起条件であると述べ、双数量詞構文は動詞“给”(与える)を伴ったパラフレーズができると分析している。

(32) 一锅 饭 给 十个人 吃。

一-CL ごはん 与える 十-CL 人 食べる

Lit. ‘ひと鍋のご飯は十人の人間が食べるために与える。’

任 (2005:22)

たしかに、「与える」という概念は当該構文の数量対比関係をうまく捉えることができる。しかしながら、任(2005)の分析はそもそもなぜ双数量詞構文が(30)のような語順をとるのかについての説明がされていない。

任(2005)の記述的研究を踏まえた上で、Her (2009)は LFG の枠組みに基づき、項構造の動作主に ext(ent)という意味役割が付加することで、動作主の抑制が行なわれ、<動作主>と<対象>が逆転するという分析を提案している。

(33)

	chi	< x -z	y>
IC:	[+o]		[-r]
DC:	[+r]		

	OBJ	θ	S/O
UMP:	OBJ	θ	S

Her (2009:29)

(33)は“吃(chi)”(食べる)を代表例とした双数量詞構文のメカニズムを示している。“吃(chi)”

(食べる)の項構造 <~~x~~-z, y>に含まれる<z>は ext (程度)を表し、この<z>が付加すると、動作主(x)は抑制される。このことは、<~~x~~-z>のように表記されている。Her (2009)によれば、(34)に示す Huang (1993)の“revised thematic hierarchy”があるために、(33)の“吃(chi)”(食べる)の項構造<x, y>に含まれる動作主(x)に<z>が付加されると、(30)のような項の逆転現象が起きる。

(34) ag>ben>go/exp>inst>pt/th>loc/ext

(34)の階層性において、<ext>は<theme>より低い階層にある。この階層性に従うと、(33)の項構造<~~x~~-z, y>からは y (対象)が主語に、抑制された動作主(x)を含む z(ext)が目的語に具現化される(30)の語順しか許されないことになる。(33)の動作主(x)に付加する z 項に当たる“ext”(程度)は(34)の階層性において一番低い位置にある。このため、(33)の項構造から統語構造へ項がリンクされると、(34)の階層性で<th>よりも低い位置にある<ext>は目的語に具現化されることになる。すなわち、z 項を含む動作主(x)は目的語にしか具現化できないのである。なお、1.2.4 節でも述べたように、抑制された項は統語構造へのリンクに関与しない。

双数量詞構文に数量対比の意味関係があることから、量・程度を表す“ext”という意味役割を立てる必要性を認めてもよいかもしれない。しかしながら、“ext”がつくとなぜ動作主が抑制されなければならないのか不明である。また、Her (2009)の分析で問題となるのは、(35)に示すように、双数量詞構文で進行形にできないことや副詞“刚才”(さきほど)と共に起できないことなどのいくつかの事実を予測することができないということである。

- (35) a. *两碗饭 在 吃 三个 人。
 二杯のご飯 PROG 食べる 三-CL 人
 Lit. ‘二杯のご飯で三人の人間が食べている。’
 b. *两碗饭 刚才 吃 了 三个 人。
 二杯のご飯 さきほど 食べる ASP 三-CL 人
 Lit. ‘二杯のご飯で三人の人間がさきほど食べた。’

Her (2009)の分析は正しい語順と数量対比関係を捉えることはできるが、(35)のように当該構文が予測としては表し得る意味をなぜ表現することができないのかを説明することができない。(33)のメカニズムからはアスペクトに関する制限が見られないので、(35)の非文性を予測することはできないのである。

以上、中国語非動作主卓越構文における項の倒置現象および先行研究の分析をいくつか見た。次章以降では、全体を通して語彙概念構造による分析を提案していくことになる。具体的な議論に入る前に、次節で本論が依拠する語彙概念構造の概略を示しておく。

1.5. 語彙概念構造と項の具現化

序章でも少し触れてはいるが、本節では、これ以降の章で本論文が依拠する語彙概念構造の基本的な概念について、もう少し具体的に導入しておく。語彙概念構造(LCS)とは、動

詞の意味は語彙分解することによって形成されると考える理論体系である。この方法論は、60年代後半に盛んに議論された生成意味論や Dowty (1979)の影響を受けており、Jackendoff (1983; 1990), Rappaport & Levin (1988; 1998), 影山 (1996), Randall (2010)などで提唱されている考え方である。たとえば、kill という動詞を例にとると、その LCS は(36)のように記述できる。

(36) [EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE DEAD]]]
(x=agent, y=theme)

(36)は kill の（概念的な）意味が意味述語（あるいは、概念）DO, CAUSE, BECOME, BE を組み合わせることにより表されることを示している。DO (ON)は行為あるいは働きかけ、BECOME は変化、BE は状態を意味しており、CAUSE は使役の意味を表す関数である。これらの意味述語はそれぞれ x や y で表される変項を項にとる。たとえば、(36)では、DO は x を項に、BECOME と BE は y を項にとっている。これらの項は単に事象の参加者の数を表すのではなく、(1)で見たような意味役割の意味内容も示している。たとえば、通常、DO がとる x 項は（意味役割で言う）動作主、BECOME や BE がとる y 項は対象に当たる。このように、LCS では意味役割は原理として仮定されておらず、意味述語から派生されるものとして考えられているのである (Jackendoff 1987; Rappaport and Levin 1988; Ravin 1990)。また、(36)の DEAD に当たる述語は具体的な（結果）状態を表し、一般に定項と呼ばれる（影山 1999）。以上から、(36)は誰か(x)が誰か(y)に働きかけて y が死ぬという状態になるという意味を表していることになる。

Levin (1985: 1-4)が述べているように、語彙意味論が明らかにしようとしているのは項の具現化の問題である。一般に、語彙概念構造を用いる枠組みでは、項の具現化は項構造を介して語彙概念構造(LCS)から統語構造へ行なわれるものとして考えられている (cf. 影山 1996; Randall 2010 など)。このことを図示すると(37)のようになる。

(37) 語彙概念構造 → 項構造 → 統語構造

(37)の図式では、まず、LCS から最終的に統語構造に具現化される項が項構造へ受け継がれる。次に、LCS が表す意味役割情報を継承した項が項構造から統語構造へとリンクされる（項のリンキング）。このことを(36)の例で表すと(38)のようになる。

(38) [EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE DEAD]]]
→ <x, y>
| |
SUB OBJ
(x=agent, y=theme)

(38)では、LCS の変項 x と y が項構造へと継承され、それぞれ主語と目的語にリンクされている。(38)から分かるように、LCS にある変項が具現化される際は構造上の制約がある。

それは項の順位である。LCS 上でより高い位置にある項は項構造でも統語構造でもより高い位置となる。(38)の LCS において、x は y よりも高い位置にあるので、x は主語に y は目的語に具現化されるのである。

語彙概念構造はしばしば(39)の四つの雛形に大別される。この四つの雛形は Vendler (1967)のAspect分類を反映しており、(39)は順に Vendler (1967)の状態(stative)、活動または行為(action)、到達(achievement)、達成(accomplishment)にそれぞれ相当する。

(39) a. stative

[STATE y BE AT z] (y=theme, z=location)

b. action

[EVENT x DO (ON y)] (x=agent, y=theme)

c. achievement

[EVENT (y) BECOME [STATE y BE AT z]] (y=theme, z=location)

d. accomplishment

[EVENT [EVENT x DO] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE STATE]]]
(x=agent, y=theme)

LCS の記述方法は研究者によって多少の差異があるが、基本的に上の四つのAspectに基づくものであることには変わらない。(39)の LCS はそれぞれ以下のことを表している。(39a)の状態を表す LCS は何か(y)がある状態(STATE)にあるという意味を表している。(39b)の活動を表す LCS は誰か(x)がある行為をするという意味を表している。活動を表す動詞には、「跳ぶ」のような自動詞も「殴る」のような他動詞も現れる。自動詞の場合は項が一つしかないので、[EVENT x DO]と表され、他動詞の場合は働きかける人と働きかけられるものがあるので、[EVENT x DO ON y]と表される。(39b)は活動動詞に自動詞も他動詞も現れることを[EVENT x DO (ON y)]のように表記している。(39c)の到達を表す LCS は何か(y)がある状態になり（変化し）、ある場所に存在するという意味を表している。(39d)の達成を表す LCS は誰か(x)が何か(y)に働きかけ、y がある（結果）状態になるという意味を表している。このように、LCS は動詞が表す分解された概念的意味によって記述される。実際に動詞はその意味（分類）に合う形で(39)の四つのどれかの雛形に集約されることになる。たとえば、「いる・ある」などの存在動詞はあるもの/人がある場所に存在することを表すので、その意味構造は(39a)になる。「殴る」などの接触・打撃動詞は誰かがある行為を働きかけることを表すので、その意味構造は(39b)になる。「現れる」などの出現動詞はない状態からある状態へと変化し、ある場所に現れることを表すので、その意味構造は(39c)になる。「壊す」などの状態変化動詞は誰かがある行為をしてその結果何らかの（結果）状態が出来上がることを表すので、その意味構造は(39d)になる。以下、本論文の議論で重要となるものを中心に、異なる意味タイプを表す動詞がそれぞれ(39)のどの雛形に振り分けられるかを代表例とともに上げておく。

(40) a. stative

存在動詞（「いる」、「ある」）など

- [STATE [y BE AT z]] (y=theme, z=location)
- b. action
 接触・打撃動詞（「殴る」, 「蹴る」）など
 [EVENT x DO (ON y)] (x=agent, y=theme)
- c. achievement
 出現動詞（「現れる」, 「起こる」）など
 [EVENT (y) BECOME [STATE y BE AT z]] (y=theme, z=location)
- d. accomplishment
 状態変化動詞（「殺す」, 「壊す」）など
 [EVENT [EVENT x DO] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE STATE]]] (x=agent, y=theme)

もちろん、(40)の他にも動詞にはさまざまな意味分類があるが、詳しいことはそれぞれの章で導入していく。

以上、語彙概念構造の概要を述べてきた。次章以降では、これらの概念を念頭に置いた上で議論が進んでいくことになる。

1.6. まとめ

項の具現化でしばしば議論される意味役割の階層性に関して、中国語も基本的にはこれに従った形で項の具現化が行われる。その一方で、中国語非動作主卓越構文では、意味役割の階層性に反する形で項の具現化が行われる。具体的には結果複合動詞構文、存現文、双数量詞構文である。本章では、これらの構文における記述的・理論的な先行研究を概観し、それぞれ記述面においても理論面においても問題点があることを指摘した。以降、第二章、第三章、そして第四章では、中国語非動作主卓越構文のうち、結果複合動詞構文、存現文、双数量詞構文の順に議論し、各章で提案する分析が先行研究では捉えられない事実を無理なく説明できることを論じる。

注

1. Kiparsky and Staal (1969)によれば、意味が統語構造を決定するという考えは、はるか昔すでに Pāṇini 文法に存在していたと言われている。
2. 意味役割の階層性は、Grimshaw (1990)では (Agent (Experiencer (Goal/Source/Location (Theme))))のように、Kiparsky (1985)では Agent < Source < Goal < Instrument < Theme < Locative Verb >>>>のように表記されている。便宜上、筆者によりここでは表記を統一している。
3. 動作主がいつも主語になるという通説に対する反例としてもっとも研究されているのはジルバル語、オーストラリアのアボリジニ語、中央北極エスキモー語やタガログ語などの能格言語である (cf. Anderson 1976; Dixon 1972; 1979; 1994; Keenan 1976; Keenan and Comrie 1977; Marantz 1981; 1984)。次のタガログ語の例を観察されたい。

- (i) B-in-ili-φ ng=lalake ang=isda sa=tindahan.
PERF-buy-OV GEN=man NOM=fish DAT=store
‘The man bought the fish at the store.’

Kroeger (1993:13)

この場合、動作主は属格の *man* であり、対象は主格の *fish* である（これは動詞 *buy* が “Objective Voice” であることから分かる）。Kroeger (1993)はタガログ語で関係節を作ることができるのは主格名詞だけであることを明らかにし、Keenan and Comrie (1977)に従うと、タガログ語では主格名詞が主語となる。すなわち、上記の例における主語は *fish* であり、以下に示す通り、関係節を作ることができる。

- (ii) isda=ng i-b-in-igay ng=lalake sa=bata
fish=LNK IV-PERF-give GEN=man DAT=child
‘the fish which was given to the child by the man.’

Kroeger (1993:23-24)

この事実から(i)では動作主が主語でないことがわかり、意味役割の階層性に違反する形になることを示している。

これに対し、本論で扱う中国語は対格言語である。対格言語と能格言語にさまざま違いが見られることは自明であり、一概に同じように考えることはできない。ゆえに、ここでは能格言語について深く議論しないことにする。

4. 結果複合動詞における後項動詞が動詞であるか形容詞であるかについては論争があるが、ここでは特に重要ではないので、動詞としておく。

第二章

結果複合動詞構文

2.1. はじめに

第一章で議論したように、中国語非動作主卓越構文のうちの結果複合動詞構文では三通りの解釈が存在し、そのうちのひとつで動作主が目的語になることができる（以下、動作主目的語と呼ぶ）。例(1)に示すように、“追累”（追う一疲れる）のような結果複合動詞がこれに当たる。

- (1) 淘淘 追累 了 悠悠。
淘淘 追う一疲れる ASP 悠悠
- (i) ‘淘淘が悠悠を追ってその結果悠悠が疲れた。’
(ii) ‘淘淘が悠悠を追ってその結果淘淘が疲れた。’
(iii) * ‘悠悠が淘淘を追ってその結果淘淘が疲れた。’
(iv) ‘悠悠が淘淘を追ってその結果悠悠が疲れた。’

例(1)は“追累”（追う一疲れる）に三通りの解釈があり、そのうち(iv)では目的語に動作主の解釈があることを示している。(iv)では、本来主語に具現されるはずの動作主は目的語名詞である“悠悠”に具現されていることになる。このことは、動作主であればいつも主語になるという一般的な見解に反する。

本章の目的は(1)のパラダイムを説明し、結果複合動詞構文に動作主目的語が可能となるメカニズムを明らかにすることである。本論では、(1)は「項 α が対象(theme)と解釈されるときに限り、項 α は目的語にリンクされる(ただし、主語はなければならない)」という本章で提案する原理から説明されることを示す。この原理により(iii)が許容されない解釈となるのは目的語に動作主（追う人）の解釈しか与えられていないからと説明できる。一方、(i,ii,iv)ではそれぞれ目的語に対象（追われる人/疲れる人）が与えられているので許容される解釈となる。

本章では議論を以下のように進める。まず、2.2 節で先行研究の具体的な問題点を指摘する。2.3 節では(1)のような構文で実際に動作主が目的語に具現されていることを統語的に確かめた上で、語彙概念構造(LCS)による分析を提案し、本分析が先行研究の問題点を解決できることを示す。さらに、本章で提案する分析が(1)の“追累”（追う一疲れる）タイプだけでなく、自動詞+自動詞そして三項動詞+自動詞タイプの結果複合動詞でも有効に働くことを示していく。2.4 節はまとめである。

2.2. 先行研究

第一章で議論したように、Li (1995; 1999)と Her (2007)は使役役割（階層性）を仮定することで動作主目的語が可能になると分析している。Li (1995: 1999)では意味役割の階層性に加えて、cause と affectee で構成される使役役割構造を仮定し、動作主目的語が可能となる

のは、この使役役割構造が意味役割の階層性に優先するからであるとしている。第一章の 1.1.2 節でも議論したように、(1)で cause と affectee の使役役割関係が割り当てられるのは (1i)と(1iv)に限られる（詳しくは第一章の 1.1.2 節を参照）。したがって、cause と affectee の使役役割関係がない(1iii)の目的語に動作主の解釈を与えることはできないことになる。一方、(1iv)では使役役割関係があるので、目的語に動作主の解釈が割り当てられてもよい。もちろん、動作主と対象の逆転のない(1i)と(1ii)は可能な解釈となる。

しかし、彼らの分析では以下に示す例を説明できない。結果複合動詞には“追累”（追う一疲れる）のような他動詞＋自動詞タイプ以外に自動詞＋自動詞タイプもある。その場合でも(2)に示すように、動作主目的語が可能である。

- (2) 这双鞋 走累 了 妈妈。
 この靴 歩く一疲れる ASP お母さん
 Lit. ‘この靴がお母さんを歩き疲れた。’（この靴のせいで、お母さんが歩き疲れた。）

(2)の“走累”（歩く一疲れる）は自動詞＋自動詞の構造を持つ結果複合動詞である。この場合も目的語の“妈妈”（お母さん）に“走”（歩く）の動作主としての読みが可能であることから、(2)もまた動作主目的語構文とみなすことができる。Li (1995; 1999)の分析では(2)のような文は説明できない。なぜなら、(2)の主語名詞“这双鞋”（この靴）は V1（“走”）の項でも V2（“累”）の項でもないため、V1 と V2 がとる意味役割を組み合わせるだけでは説明できないからである。

さらに、Li (1995; 1999)と Her (2007)の分析は“追累”（追う一疲れる）と同じ他動詞＋自動詞タイプの結果複合動詞(3)の説明に対しても問題が生じる。

- (3) 张三 冻死 了 李四。
 张三 凍らせる一死ぬ ASP 李四
 (i) ‘张三が李四を凍らせてその結果李四が死んだ。’
 (ii) * ‘张三が李四を凍らせてその結果张三が死んだ。’
 (iii) * ‘李四が张三を凍らせてその結果张三が死んだ。’
 (iv) * ‘李四が张三を凍らせてその結果李四が死んだ。’

(3)の“冻死”（凍らせる一死ぬ）は“追累”（追う一疲れる）と同じく他動詞＋自動詞を内部構造に持つ結果複合動詞である。Li (1995; 1999)や Her (2007)の分析が正しいとすると、(3)においても“追累”と同様、動作主目的語解釈ができると予想されるが、事実は異なる。(3)で可能な解釈は、主語の张三が目的語の李四を凍らせてその結果李四が死んだというもののだけである。(3ii,iii,iv)の悪さが語用論など別の理由によるものとも考えることもできるが、Li (1995; 1999)と Her (2007)の分析では説明できない。

以下では LCS を用いた代案を提示し、この代案が Li (1995; 1999)や Her (2007)の問題を無理なく解決できることを示す (Yu 2012 も参照)。より具体的には、(2)のような自動詞＋自動詞型の結果複合動詞構文に動作主目的語ができ、(3)のような文に動作主目的語ができないのは、(2)と(3)タイプの構文が異なる LCS を持つことに生じると論じる。

2.3. 提案

2.3.1. 語順

具体的な議論に入る前に、まず(1)のような結果複合動詞構文において実際に動作主が目的語になっていることを確かめておきたい。

項の文法関係を決めるテストには再帰代名詞束縛などがあり、Tan (1991)や Huang et al. (2009)などでも主張されているように、一般に、再帰代名詞の“自己”(自分)を束縛できるのは主語のみである。

- (4) 小王_i 告诉 田中_j 小李_k 喜欢 自己_{i/*j/k}。
王さん 知らせる 田中さん 李さん 好き 自分
‘王さんは田中さんに李さんは自分のことが好きだと言った。’

例(4)が示す通り、“自己”(自分)の先行詞は主節の主語“小王”(王さん)と埋め込み節の主語“小李”(李さん)に限られ、目的語の“田中”(田中さん)は先行詞になれない。もし、動作主目的語構文において動作主が単に倒置された主語であるならば、“自己”(自分)の先行詞になれると予測されるが、実際は可能ではない。

- (5) 淘淘_i 在自己_{i/*j}的院子里 追累 了 悠悠_{jo}。
淘淘 自分の庭で 追う一疲れる ASP 悠悠
(i) ‘淘淘が淘淘の庭で悠悠を追ってその結果悠悠が疲れた。’
(ii) ‘淘淘が淘淘の庭で悠悠を追ってその結果淘淘が疲れた。’
(iii) ‘悠悠が淘淘の庭で淘淘を追ってその結果悠悠が疲れた。’

(5i,ii,iii)は結果複合動詞の可能な三つの解釈のうちのどの解釈でも“自己”(自分)の先行詞になるのは“淘淘”だけであることを示している。特に、(5iii)の動作主目的語の解釈で、動作主として解釈される“悠悠”が再帰代名詞“自己”(自分)の先行詞になれないということは、動作主“悠悠”が主語でないことを示している。すなわち、再帰代名詞束縛による主語テストから(5)の結果複合動詞構文では、動作主と解釈される“悠悠”が主語として機能してないことが分かる。

さらに、(1)の結果複合動詞構文で動作主として解釈される“悠悠”が主語として機能していないことは possessor relativizing (所有者関係節化)からも分かる(cf. Keenan 1976)。例(6)と(7)に示すように、中国語では所有者関係節化ができるのは主語のみである(Tan 1991)。(7b)のように目的語名詞句内から所有者名詞句を関係節化することはできない。

- (6) a. 这些人 的 子女 在 Stanford 上 学。
这些人 GEN 子女 で Stanford 通う 学校
‘これらの人の子女は Stanford に通っている。’
b. Stanford 录取 了 这些人 的 子女。
Stanford 採用する ASP 这些人 GEN 子女
‘Stanford はこれらの人の子女を受け入れた。’

- (7) a. [ϕ_i 子女 在 Stanford 上 学 的] 人_i
 子女 で Stanford 通う 学校 GEN 人
 ‘子女が Stanford に通っている人。’
 b. *[Stanford 录取 了 ϕ_i 子女 的] 人_i
 Stanford 採用する ASP 子女 GEN 人
 Lit. ‘Stanford が受け入れた子女の人。’

Tan (1991: 32)

例(6)にある所有者名詞句“这些人的子女”（これらの人の子女）は(6a)では主語，(6b)では目的語である。例(7)の対比から，このうち，所有者を関係節化できるのは所有者名詞句を含む名詞句が主語にある(6a)に限られることが分かる。

これと同じことは結果複合動詞構文でも観察される。もし，(8b)の結果複合動詞構文で動作主の解釈がある“悠悠的妹妹”（悠悠の妹）が主語として機能しているならば，所有者関係節化ができることが予測されるが，(9b)に示す通り，実際にはできない。

- (8) a. 淘淘的弟弟 追累 了 悠悠。
 淘淘の弟 追う一疲れる ASP 悠悠
 (i) ‘淘淘の弟が悠悠を追ってその結果悠悠が疲れた。’
 (ii) ‘淘淘の弟が悠悠を追ってその結果淘淘の弟が疲れた。’
 (iii) * ‘悠悠が淘淘の弟を追ってその結果淘淘の弟が疲れた。’
 (iv) ‘悠悠が淘淘の弟を追ってその結果悠悠が疲れた。’
 b. 淘淘 追累 了 悠悠的妹妹。
 淘淘 追う一疲れる ASP 悠悠の妹
 (i) ‘淘淘が悠悠の妹を追ってその結果悠悠の妹が疲れた。’
 (ii) ‘淘淘が悠悠の妹を追ってその結果淘淘が疲れた。’
 (iii) * ‘悠悠の妹が淘淘を追ってその結果淘淘が疲れた。’
 (iv) ‘悠悠の妹が淘淘を追ってその結果悠悠の妹が疲れた。’
 (9) a. [ϕ_i 弟弟 追累 了 悠悠 的] 淘淘_{io}
 弟 追う一疲れる ASP 悠悠 GEN 淘淘
 (i) ‘弟が悠悠を追って悠悠が疲れた淘淘。’
 (ii) ‘弟が悠悠を追って弟が疲れた淘淘。’
 (iii) ‘悠悠が弟を追って悠悠が疲れた淘淘。’
 b. *[淘淘 追累 了 ϕ_i 妹妹 的] 悠悠_{io}
 淘淘 追う一疲れる ASP 妹 GEN 悠悠
 Lit. (i) ‘淘淘が妹を追って妹が疲れた悠悠。’
 Lit. (ii) ‘淘淘が妹を追って淘淘が疲れた悠悠。’
 Lit. (iii) ‘妹が淘淘を追って妹が疲れた悠悠。’

例(8a)と(9a)は所有者名詞句“淘淘的弟弟”（淘淘の弟）から所有者“淘淘”を関係節化できることを示している。一方，例(8b)と(9b)は所有者名詞句“悠悠的妹妹”（悠悠の妹）か

ら所有者“悠悠”を関係節化できないことを示している。また、このことは(8)と(9)から結果複合動詞“追累”(追う一疲れる)に可能なすべての解釈で成り立つことが分かる。ゆえに、(8aiv)と(8biv)で動作主の解釈がある“悠悠”と“悠悠的妹妹”(悠悠の妹)はどちらも主語として機能していないことになる。すなわち、(8)と(9)の所有者関係節化からも通常主語に具現化される動作主がここでは主語になっていないことが分かる。

さらに、例(1)の“悠悠”が統語的に目的語であることは“把”構文を見ることにより確かめることができる¹。Huang et al. (2009)で主張されているように、“把”構文に後続する名詞は目的語に限られるからである。たとえば、(10)の“杯子”(グラス)は目的語なので“把”に後続できる。

- (10) 张三 把 杯子 打坏 了。
 张三 BA グラス 打つ一壊れる ASP
 ‘張三はグラスを壊した。’

結果複合動詞構文も同様に“把”構文を作ることができる。

- (11) 淘淘 把 悠悠 追累 了。
 淘淘 BA 悠悠 追う一疲れる ASP
 (i) ‘淘淘が悠悠を追ってその結果悠悠が疲れた。’
 (ii) ‘悠悠が淘淘を追ってその結果悠悠が疲れた。’

通常、“把”に後続する名詞は“Affected”(影響を受けるもの)とされているため(王 1954; Chao 1968 などでは“disposal”と呼ばれている)、結果複合動詞で可能な三つの解釈のうち、主語の“淘淘”が疲れる(すなわち、淘淘が疲れるという影響を受ける)という解釈は(11)の“把”構文にはない。そのため、結果複合動詞の“把”構文では(11i)と(11ii)の二つの解釈のみが可能である。このうち、(11ii)の解釈では“把”に後続する“悠悠”が動作主となり、“把”に後続する“悠悠”が目的語として機能していることを示している。

例(5,8,9)と(11)の事実から、結果複合動詞構文で実際に動作主が目的語に具現されていることが確かめられた。また、中国語が厳格な SVO 語順であることから(1)の結果複合動詞構文がいずれの解釈においても、SVO 語順になることが推察される(なお、管 (1953)によれば、現代中国語の語順は甲骨文で見られる文法と基本的に同じである)。上で見た事実を念頭に置いた上で、以下では語彙概念構造(LCS)による分析を提案する。

2.3.2. LCS 分析

結果複合動詞構文はある行為をした結果何らかの(結果)状態が生じるという点において、結果構文の一種とみなすことができる。Washio (1997)で議論されているように、一般に結果構文には二つのタイプがあることが知られている。一つは、“strong resultative”であり、もう一つは“weak resultative”である。

- (12) Resultatives in which the meaning of the verb and the meaning of the adjective are completely

independent of each other will be referred to as STRONG resultatives. (...) Let us call resultatives that are not “strong” in the above sense WEAK resultatives.

Washio (1997: 7-8)

結果を表す文における動詞と形容詞（結果複合動詞構文では V2）の意味関係を比べたときに、動詞と形容詞がそれぞれ意味的に独立している場合は strong resultative となり、そうでない場合は weak resultative となる。(12a)は strong resultative の例であり、(12b)は weak resultative の例である。

(13) a. The joggers ran the pavement thin.

Washio (1997: 8)

b. I froze the ice cream hard.

Washio (1997: 5)

走るという行為からだけでは舗道がうすくなるという結果状態を予測することはできないため、(13a)は strong resultative に分類され、これに対して、アイスクリームを凍らせると硬くなることは容易に予測することができるので、(13b)は weak resultative に分類されることになる。(13a)と(13b)の LCS はそれぞれ(14a,b)のように記述できる。

(14) a. strong resultative LCS

(i). run: [EVENT x DO]

(ii). thin: [EVENT y BECOME [STATE y BE THIN]]

(iii). [EVENT x DO] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE THIN]]

b. weak resultative LCS

(i). freeze: [EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE FROZEN]]]

(ii). hard: [STATE y BE HARD]]

(iii). [EVENT [EVENT x DO y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE FROZEN & y BE HARD]]]

(14a)は(13a)の strong resultative の LCS であり、(14b)は(13b)の weak resultative の LCS である。strong resultative では V1 と結果述語はそれぞれ独立した事象を表すため、(14a)では run と thin の LCS がそれぞれ独立して、run の LCS[EVENT x DO]と thin の LCS [EVENT y BECOME [STATE y BE THIN]]が CAUSE 関数で結ばれ走った結果舗道がうすくなることを表している。これに対して、weak resultative では、V1 と結果述語はそれぞれ独立した事象でないと考えられるので、(14b)では freeze と hard が全体としてひとつの事象に表される。より具体的には、weak resultative では、結果述語 hard が表す状態[y BE HARD]を freeze の LCS[EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE FROZEN]]]の一部とすることができる。結果述語が表す状態は V1 から必然的に引き起こされるものなので、ここでは(14b)のように、V1 と結果述語の状態を[STATE y BE FROZEN & y BE HARD]のように並列し、V1 と結果述語の状態がどちらも V1 の行為から必然的に引き起こされるものとして記述する。いわば、weak resultative では、結果述語は V1 の結果状態を修飾あるいは補足し

中国語の結果複合動詞にも strong resultative と weak resultative の区別があると考えられ、ここで、(1)の例を考えてみると、結果複合動詞“追累”(追う一疲れる)は strong resultative とみなすことができる。なぜなら、追うという行為をしたからといって必ず疲れるわけではないからである。そうすると、“追累”(追う一疲れる)の LCS は(14a)タイプをなすことになり、(15c)のように記述できる³。

- (15)から分かるように、“追累”(追う→疲れる)の LCS は“追”(追う)の LCS と“累”(疲れる)の LCS を組み合わせたものからなる。“追”(追う)と“累”(疲れる)のそれぞれの LCS(15a)と(15b)が合成されると、V1 と V2 の間に因果関係が生まれ(cf. Li and Thompson 1981), 使役を表す(15c)が形成され、追うという行為をした結果疲れるという状態になるという意味を表すことになる。結果複合動詞を形成すると(15c)のような LCS になることは時間副詞のふるまいから分かる。(15c)から分かるように、“追”(追う)の LCS は第一章で議論したところの活動アスペクトに、結果状態“累”(疲れる)を含む“追累”(追う→疲れる)の LCS は達成アスペクトに相当する。通常、活動アスペクトは未完結を表す“一个小时”(一時間)などの副詞句と共に起し、完結を表す“花了一个小时”(一時間で)などの副詞句とは共起しない(16)。

- もし、(15c)で“追累”(追う一疲れる)が達成アスペクトを表すようになるのであれば、完結を表す“花了一个小时”(一時間で)のような副詞句と共に起できるようになることが予測される。達成アスペクトは完結性があるからである。例(17)に示す通り、この予測はまさに正しい。

- 例(16)と(17)の事実から結果複合動詞では達成アスペクトを表す(15c)のような LCS が記述

されることが分かる。なお、通常(15c)の LCS に含まれる意味述語 DO がとる項 x は動作主、ON, BECOME,そして BE がとる項 y と y は対象を表すとされている(cf. Jackendoff 1987; Rappaport and Levin 1988; Ravin 1990)。すなわち、(15c)の x は追う人、 y は追われる人、そして y は疲れる人を示すことになる。便宜上、ここでは V1 の対象を y そして V2 の対象をイタリックの y で表記する。

例(1)でも示したように、“追累”(追う一疲れる)には論理的に四つの解釈があり、そのうちの三つが可能な解釈になる。Li (1995; 1999)と Her (2007)とは異なり、本論は(1)を以下のように説明する。(18)は(15c)の LCS から生成される論理的に可能なリンキングを示している。

(18) [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE TIRED]]

→ $\langle x_i, y_j \rangle, \langle y_{ij} \rangle$

→ $\langle x, y/y \rangle$ or $\langle x/y, y \rangle$

a. $\langle x, y/y \rangle$

b. $\langle x/y, y \rangle$

c. $\ast \langle x, y/y \rangle$

d. $\langle x/y, y \rangle$

| |

| |

| |

| |

SUB OBJ

SUB OBJ

SUB OBJ

SUB OBJ

| |

| |

| |

| |

淘淘 悠悠

淘淘 悠悠

淘淘 悠悠

淘淘 悠悠

(x =chaser, y =chasee, y =tired)

(18)の LCS から一つ目の矢印で示されている項構造 $\langle x_i, y_j \rangle, \langle y_{ij} \rangle$ が形成される。前者は V1, そして後者は V2 の項構造である。インデックス i と j により V2 の項 y が V1 のいずれかの項と同定され、二つ目の矢印で示されているように、二つの項構造が形成される（これは、結果複合動詞構文が最大で二項までしか許さないからである。詳しくは、2.3.5 節を参照）。一つは、V2 の対象（疲れる人）と V1 の対象（追われる人）が同定された項構造 $\langle x, y/y \rangle$ となり、もう一つは、V2 の対象（疲れる人）と V1 の動作主（追う人）が同定された項構造 $\langle x/y, y \rangle$ となる。Li (1995; 1999)でも議論されているように、結果複合動詞ではこの二つの項構造から論理的に可能なリンキングは(18a,b,c,d)のように四つある。この四つのリンキングから得られる解釈は、それぞれ順に例(1i,ii,iii,iv)に対応する。そのうち、(18c)は不可能なリンキングになる。

(18a)では、主語“淘淘”に動作主(x)（追う人）が、目的語“悠悠”に対象/対象(y/y)（追われる人かつ疲れる人）という意味があるので、“淘淘”が“悠悠”を追ってその結果“悠悠”が疲れるという解釈となる(1i)。(18b)では主語“淘淘”に動作主(x)（追う人）と対象(y)（疲れる人）が、そして目的語“悠悠”に対象(y)（追われる人）という意味が与えられているので、“淘淘”が“悠悠”を追ってその結果“淘淘”が疲れるという解釈となる(1ii)。(18c)では主語“淘淘”に対象/対象(y/y)（追われる人/疲れる人）、目的語“悠悠”に動作主(x)（追う人）の意味が与えられ、(1iii)の不可能な解釈となる。最後に、(18d)では主語“淘淘”に対象(y)（追われる人）、そして目的語“悠悠”に動作主/対象(x/y)（追う人/疲れる人）という意味があるので、“悠悠”が“淘淘”を追ってその結果“悠悠”が疲れるという(1iv)の解釈になる。

Li (1995; 1999) と Her (2007) は(18)から得られる(1i,ii,iii,iv)の解釈を説明するために、使役役割を含んだ複雑なリンキングルールを提案する(第一章 1.2.2 節と 1.2.3 節を参照)。これに対して、本論では複雑なリンキングルールを想定する必要はなく(19)のような単純な原理から事実を説明できることを示す。

(19) 項 α が対象(theme)と解釈されるときに限り、項 α は目的語(内項として項構造に)にリンクされる(ただし、主語(外項)がなければならない)。

(19)は、ある項が対象であることが、その項が目的語位置にリンクされるための必要条件であることを表している。したがって、(19)から排除されるリンキングパターンは、対象でない項が目的語位置へとリンクされる場合となる。これは、まさに(18c)の不可能なリンキングを表しており、(1iii)の解釈はありえないことを示している。(1iii)では目的語の“悠悠”に動作主の解釈しか与えられていないので、(19)に違反するわけである。

対照的に、(18a,b,d)のリンキングパターンはすべて(19)に従ったものになっている。(18a)と(18b)はそれぞれ目的語に対象項がリンクされている。また、(18d)においても、対象項(ここでは y) が目的語にリンクされているので、動作主目的語を許す(1iv)の解釈が可能となる。このように(19)のみですべての解釈のパターンが説明できるのである。

なお、第一章でも議論したように通常 LCS でより高い位置にある変項((18)では x,y,y)は項構造でも統語構造でもより高い位置にある。したがって、通常、動作主(x)と対象(y)があれば動作主が主語に対象が目的語に具現化されることになる。ところが、(18b,d)から分かるように結果複合動詞構文では動作主(x)と対象(y)が $\langle x/y \rangle$ のように同定されることがある。このように動作主と対象が同定されると、LCS 上の動作主(x)>対象(y)という関係性は曖昧となる。対象が動作主と同定される名詞句は動作主でも対象でもあるので、(18b)のように主語にも(18d)のように目的語にも具現化できる。対象は通常意味役割の階層性でも低い位置にあるので、(18d)のように動作主と同定される場合であっても目的語に具現化することができ、結果として動作主目的語が形成されることになる。このことは、結局通常の LCS 上の項の階層性はここでも保持されることを示している。なぜなら、動作主と対象が同定されると動作主の LCS における構造上の高さが不透明になるからである。

このように、(19)のルールを仮定すれば、(18)の可能な解釈を説明するのに Li (1995; 1999) が仮定するような複雑なルールは必要でないという点で LCS 分析のほうが Li (1995; 1999) の分析より理論的により望ましいと考えられる。また、LCS 分析では Li (1995; 1999) や Her (2007) のような使役役割を独立的に想定する必要がないという点においてもより優れた分析と言える。Li and Thompson (1981) の分析からも分かるように、結果複合動詞構文では、上位事象と下位事象の間で因果関係が認められる。この因果関係が意味構造に反映されるという点においても本論の LCS 分析はより優れていると言えるのである。

(19)からも示唆されるように、結果複合動詞構文において動作主が目的語となるには、V1 の動作主(x)が V2 では対象(y)として同定される必要がある。したがって、V1 の動作主(x)と V2 の対象(y)を同一に解釈できない場合、動作主目的語は現れないのである。この分析が正しいとすると、(20=(7))で示したような“凍死”(凍らせる一死ぬ)タイプに動作主目的語ができないことが自然に説明できる。

- (20) 张三 冻死 了 李四。
 张三 凍らせる一死ぬ ASP 李四
 (i) ‘张三が李四を凍らせてその結果李四が死んだ。’
 (ii) * ‘张三が李四を凍らせてその結果张三が死んだ。’
 (iii) * ‘李四が张三を凍らせてその結果张三が死んだ。’
 (iv) * ‘李四が张三を凍らせてその結果李四が死んだ。’

例(20)では、V2 の死ぬという状態を表す対象項は V1 の結果状態を表す対象項としかならない。

この事実は以下のように説明できる。人を凍らせると死に至ることは容易に予測できるので、(20)の結果複合動詞“冻死”(凍らせる一死ぬ)は **weak resultative** とすることができ、“冻死”(凍らせる一死ぬ)の LCS は(14b)タイプとなる。そうすると、(20)の事実は(21)のような LCS によって説明できることになる。

- (21) a. “冻” : [EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE FROZEN]]]
 b. “死” : [STATE y BE DEAD]
 c. “冻死” : [EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE FROZEN & y BE DEAD]]]

→ <x, y>
 | |
 SUB OBJ
 | |
 张三 李四

(x=freezer, y=deadee)

(21)から分かるように、“冻死”(凍らせる一死ぬ)の LCS は V1 “冻”(凍らせる)の LCS の結果状態に V2 “死”(死ぬ)の LCS が並列される形で組み込まれることによって形成される。“冻”(凍らせる)と“死”(死ぬ)の LCS(21a)と(21b)が組み合わせると、(21c)が形成され、誰か(y)を凍らせると y は凍った状態で死ぬという意味を表すことになる。したがって、(21)では V1 と V2 の対象は同じ変項 y を共有し、統語構造へとリンクされる項は<x, y>という項構造を形成することになる。(19)により、目的語は対象を含まなければならないので、(21)の項構造から x (動作主)は主語“张三”に y (対象)は目的語“李四”に具現されることになる。それ以外の具現化のパターンは(21)には存在しない。ゆえに“张三”が“李四”を凍らせてその結果“李四”が死ぬという意味が例(20)の唯一の意味となり、(20)の解釈の可能性が(21)により説明できることになる。このように、“追累”(追う一疲れる)タイプと“冻死”(凍らせる一死ぬ)における動作主目的語の生起条件は、**strong resultative** と **weak resultative** に動機づけられたそれぞれ異なる LCS に起因することが分かる⁴。

ここで、同じ V1 を共有する結果複合動詞でもそれ全体が“追累”(追う一疲れる)タイプであるか“冻死”(凍らせる一死ぬ)であるか(**strong resultative** であるか **weak resultative** であるか)によって動作主目的語の可能性が異なってくることを(22)の例を用いて示す。

(22) a. 这个墙 涂膩 了 李四。
 この壁 塗る一飽きる ASP 李四
 ‘李四がこの壁を塗ってその結果疲れた。’

b. *这个墙 涂黑 了 李四。
 この壁 塗る一黒い ASP 李四

Intened reading: ‘李四がこの壁を塗ってその結果黒くなった。’

例(22a,b)はどちらも前項動詞に“涂”(塗る)という動詞が使われているが、(22a)では動作主目的語が可能であり、(22b)では不可能である。これは以下のように説明できる。まず、塗るという行為をしたからと言って必ずしも飽きるわけではないので、(22a)は“追累”(追う一疲れる)タイプ(strong resultative)になる。一方、Washio (1997)でも議論されているように、塗るという行為は塗ったものに色がつくという状態を含意するので、塗って黒くなるという意味を表す(22b)は“凍死”(凍らせる一死ぬ)タイプ(weak resultative)になる。すなわち、(22a)の V2 “膩”(飽きる)の対象は動作主((22a)では“李四”)と意味的に同定することができる一方、(22b)の V2 “黒”(黒くなる)は V1 “涂”(塗る)の結果状態を修飾する構造となるので、“黒”(黒くなる)の対象は“墙”(壁)としかならない。そうすると、(22a)の“涂膩”では動作主目的語が可能であり、(22b)の“涂黒”では動作主目的語が不可能であることが予測されるが、例(22)はこの予測がまさに正しいことを示している。

本節の最後に、日本語の複合動詞について見ておくと、日本語でも中国語と同様、VV 複合動詞を生産的に作ることができ、(23)のような中国語の結果複合動詞に当たる文を作ることができる(詳しい議論は、影山 1993; 松本 1998; 由本 2005 などを参照)。

- (23) a. 太郎は彼の論文を読み飽きた。
 b. 花子は小説を書き飽きた。
 c. バイトたちは荷物を運び疲れた。
 d. 山田くんは靴を磨き疲れた。

(23)の複合動詞はどれも V1 と V2 の間に因果関係があり、それぞれの主語名詞は、V1 の動作主かつ V2 の対象を表している。たとえば、(23a)の主語名詞「太郎」は読む人であつ飽きる人であると解釈される。しかし、(23)では動作主目的語を作ることができない

- (24) a. *彼の論文は太郎を読み飽きた。
 b. *小説は花子を書き飽きた。
 c. *荷物はバイトたちを運び疲れた。
 d. *靴は山田くんを磨き疲れた。

V1 の動作主と V2 の対象を意味的に同定することができるのに、動作主目的語ができない(24)は一見前節で中国語の観察から得られた一般化が日本語には適用されないことを示している。しかし、日本語で動作主目的語構文ができないのは独立の理由による。先行研究によって明らかにされているように、日本語の複合動詞では V1 と V2 の間で主語が一致し

なければならないという原則がある（影山 1993; 松本 1998; 由本 2005）⁵。これは、言い換えれば、(23)では V1 の動作主と V2 の対象の間で強い意味上の結びつきがあるということで、(23a)の「読み飽きる」は(25)によって説明される。

(25) a. 読む: [EVENT x DO ON y]

b. 飽きる: [EVENT x BECOME [STATE BE BORED]]

c. 読み飽きる: [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT x BECOME [STATE BE BORED]]

→ <x, y>

| |

SUB OBJ

| |

太郎 彼の論文

(x=reader/boree, y=readee)

(25)から分かるように、「読み飽きる」の LCS は V1「読む」の LCS と V2「飽きる」の LCS を合成したものからなる。「読む」と「飽きる」のそれぞれの LCS(25a)と(25b)が合成されると、V1 と V2 の間に因果関係が生まれ、使役を表す(25c)が形成され、読んだ結果飽きるという状態になるという意味を表すことになる。さらに、「読み飽きる」の LCS(25c)は(14a)の **strong resultative** タイプの LCS に相当する。これは読むという行為をしたからと言って必ずしも飽きるわけではないからである。そうすると、中国語の“追累”（追う一疲れる）と同じタイプとすることができるので、動作主目的語の可能性が生まれるが、(24)の事実が示す通り、実際には可能ではない。これは日本語の複合動詞では V1 と V2 の主語が一致しなければならない原則があるためである。この原則が LCS レベルの制約であると考えると、(25)の LCS のように V1 の動作主と V2 の対象が同じひとつの項として認定されることになり、(25)の LCS から<x, y>という項構造が形成されることになる。(19)を適用すると、x は主語に、そして y は目的語に具現され、(23a)のような文ができることになる。もし、(24a)のように変項 x と y が逆転し、「彼の論文」が主語に、そして「太郎」が目的語に具現化されると、目的語に対象(y)が具現されないことになり、これは、目的語は対象を含まなければならないという(19)に違反するので、許容されない文となる。これと同じことは(24b,c,d)にも言え、日本語の複合動詞で動作主目的語ができないのは、主語一致の原則という独立した理由があるためであり、結局のところ、日本語の場合も(19)の原理に従った形で項の具現化は行われていることになる。

以上、本論の分析は先行研究と比べてリンキングルールを簡略化できること、そして、“冻死”（凍らせる一死ぬ）のようなタイプの結果複合動詞に動作主目的語が不可能であることを予測できることを示した。Li (1995; 1999)や Her (2007)の分析では、“追累”（追う一疲れる）と“冻死”（凍らせる一死ぬ）は同じタイプとなるので、上記の事実をとらえることはできない。

2.3.3. 前項動詞の動詞分類と動作主目的語

第一章でも議論したように、Li (1995; 1999)や Her (2007)の分析は、“追累”（追う一疲れ

る)に限られている。“追累”(追う→疲れる)の V1 “追”(追う)は、動作主を項にとる活動動詞であるが、動作主を項にとることができる V1 には作成動詞や位置変化動詞などもある。本節では、Li (1995;1999)や Her (2007)で取り上げられていないタイプの複合動詞を取り上げることで、(19)の原理の妥当性をさらに検証していく。

- (26) a. 那本书 写累 了 张三。
 あの本 書く一疲れる ASP 張三
 ‘張三があの本を書いてその結果疲れた。’
- b. 一大堆 海报 貼膩 了 张三。
 山積み ポスター 貼る一飽きる ASP 張三
 ‘張三が山積みのポスターを貼ってその結果飽きた。’

まず、作成動詞と位置変化動詞の LCS はそれぞれ(27a,b.)のように記述することができる。

[EVENT [EVENT x DO] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE AT z]]]
(x=agent, v=theme, z=location)

[_{EVENT} [_{EVENT} x DO ON y] CAUSE [_{EVENT} y MOVE [_{STATE} y BE AT z]]
(x=agent, v=theme, z=location)

- (28) a. “写” : [EVENT [EVENT x DO] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE WRITTEN AT z]]]
 b. “累” : [EVENT y BECOME [STATE y BE TIRED]]
 c. “写累” : [EVENT [EVENT x DO] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE WRITTENAT z]]]
 CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE TIRED]]
 → <x_i, y_j>, <y_{ij}>

→ <x, y/y> or <x/y, y>

d. *<x, y/y>

e. *<x/y, y>

f. *<x, y/y>

g. <x/y, y>

| |
SUB OBJ

| |
SUB OBJ

| |
SUB OBJ

| |
SUB OBJ

| |
张三 书

| |
张三 书

| |
张三 书

| |
张三 书

(x=writer, y=writee, y=tiree)

(29) a. “贴” : [EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y MOVE [STATE y BE PASTED AT z]]]

b. “腻” : [EVENT y BECOME [STATE y BE BORED]]

c. “贴腻” : [EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y MOVE [STATE y BE PASTED AT z]]]
CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE BORED]]

→ <x_i, y_j>, <y_{ij}>

→ <x, y/y> or <x/y, y>

d. *<x, y/y>

e. <x/y, y>

f. *<x, y/y>

g. <x/y, y>

| |
SUB OBJ

| |
SUB OBJ

| |
SUB OBJ

| |
SUB OBJ

| |
张三 海报

| |
张三 海报

| |
张三 海报

| |
张三 海报

(x=paster, y=pastee, y=booree)

(28)と(29)は(26a)の“写累”(書く一疲れる)と(26b)の“贴腻”(貼る一飽きる)が結局は, “追累”(追う一疲れる)と同じ具現化パターンになることを示している。2.3.5 節でも議論するように, 結果複合動詞構文は, 名詞句は二つまでしかとらない(詳しくは 2.3.5 節を参照)。このために, (28c)と(29c)の LCS からはそれぞれ<x_i, y_j>, <y_{ij}>の項構造が形成されることになる。(28c)と(29c)の LCS に含まれる AT 述語がとる場所項は, 第三章でも議論するように, 通常付加詞として現れるので, 統語構造に必要な必須項ではない。そのため, 場所項(z)は項構造に必ずしも受け継がれる必要はないのである。(28)と(29)は結局, “追累”(追う一疲れる)と同じ項構造の形成パターンを示しているので, 論理的に可能な解釈が四つ生まれる。(19)により, 目的語に動作主の解釈が割り当てられる(28g)と(29g)のリンクが成立し, (26a,b)の動作主目的語が作られることになる(なお, V1 の対象(y)と V2 の対象(y)が同定される(28d)と(29d)が容認されないのは, 「本が疲れる」, 「ポスターが飽きる」は意味的に齟齬をきたすからである。また, (28e)が不可能となる理由については, (33)の例文以降の議論を参照されたい)。

作成動詞や位置変化動詞に加えて, V1 が心理動詞の場合も動作主目的語が可能である。一般に, 心理動詞は, ‘The ghost frightened John.’のような経験者を目的語にとる EO 動詞タイプと ‘Mary fears the ghost.’のような経験者を主語にとる ES 動詞タイプに大別される(cf. Grimshaw 1990)。これに加えて, 動作主を項にとることのできる心理動詞で, 中国語では“气”(怒る)のようなものがある。“气”(怒る)もまた“气死”(怒る一死ぬ)のような結果複合動詞を作ることができる。

(30) 张三 气死 了 李四。

張三 怒る一死ぬ ASP 李四

(i) ‘張三が李四を怒ってその結果張三が死ぬほどいらした。’

(ii) ‘張三が李四を怒ってその結果李四が死ぬほどいらした。’

(iii) * ‘李四が張三を怒ってその結果張三が死ぬほどいらした。’

(iv) ‘李四が張三を怒ってその結果李四が死ぬほどいらした。’

(30)では、“气死”（怒る一死ぬ）が“追累”（追う一疲れる）タイプと同じく三通りの解釈ができる。なお，“气死”（怒る一死ぬ）では実際に人間が死ぬのではなく、その程度にまで怒るあるいはいらするという比喩的な意味で使われる。この文でもやはり、動作主目的語が成立するための重要な要因は、V2の対象とV1の動作主が同定できるかどうかである。(30)の日本語訳からも分かるように、動作主目的語が可能となるのは、死ぬほどいらする人と怒る人が同一人物として解釈されている場合であり(30iv), その解釈が得られない場合は、動作主目的語は不可能になるからである(30iii)。

(19)の原理は“追”（追う）以外の活動動詞がV1に現れている場合でも有効に働く。例(31)のいずれの例も目的語は動作主の解釈が可能である。

(31) a. 一大堆 衣服 洗累 了 妈妈。

山積み 服 洗う一疲れる ASP お母さん

‘お母さんが山積みの服を洗ってその結果疲れた。’

b. 剩菜 吃膩 了 大家。

残飯 食べる一飽きる ASP みんな

‘みんなが残飯を食べ飽きた。’

任 (2005: 50)

c. 课 讲烦 了 老师。

授業 教える一いらする ASP 先生

‘先生が講義をしてその結果いらした。’

任 (2005: 50)

d. 那杯酒 喝醉 了 张三。

あのお酒 飲む一酔う ASP 張三

‘張三があのお酒を飲んでその結果酔っぱらった。’ Cheng and Huang (1994:201)

例(31)で動作主目的語の解釈が得られる場合はやはり、V2の対象とV1の動作主は意味的に同定されることになる。(31a)では、動作主（洗う人）とV2の対象（疲れる人）は目的語の“妈妈”（お母さん）になり、(31b,c,d)についても目的語名詞は動作主であるときには同時に対象でもある。

以上のように、さまざまなV1とV2の組み合わせにおいて、動作主目的語構文が可能であるが、いずれの組み合わせにおいてもV1の動作主とV2の対象が同一人物でなければならないことが分かる⁶。

ここで、本分析に対して一見問題になると思われる事実について見ておく。本分析では、（意味的に、齟齬をきたすことがない限り）“追累”（追う一疲れる）タイプは、(19)から論理的に三通りの項の具現化が可能なのはである。ところが、実際には(32)のような具現

化パターンは存在しない。

- (32) a. *张三 写累 了 那本书。
張三 書く一疲れる ASP あの本
‘張三があの本を書いてその結果疲れた。’
b. *妈妈 洗累 了 衣服。
お母さん 洗う一疲れる ASP 服
‘お母さんが服を洗ってその結果お母さんが疲れた。’

例(32a)は(26a)の主語と目的語が逆転した文であるが、日本語訳からも分かるように、(32)では V1 の動作主と V2 の対象を主語に、そして V1 の対象を目的語に具現することができない ((28e)も参照)。これは、“追累” (追う一疲れる) の例で言えば、(1ii)の解釈に対応するものだが、例(32)は容認されない。本論では、(32)の文の悪さは(19)とは独立の理由に由来すると考える。このことを見るために、結果構文に現れる名詞句の位置についての Shi (2002)の次の一般化を考えてみることにする。

- (33) If the resultative is the underlying predicate of a subject (agent), the VR construction usually cannot have an object. ... the only linguistic form for this kind of expression is verb-copying,...

Shi (2002:37)

(33)は、結果述語(V2)が動作主と同定される場合は、「主語 (V1 の動作主/V2 の対象) + 結果複合動詞+目的語 (V1 の対象)」の語順をとることができず、その代わりに、verb-copying (動詞重複構文) にする必要があることを言っている (なお、VR は本論の V1V2 に対応している)。Shi (2002)の一般化が正しいとすると、(32)のような文の逸脱性は、項の具現化のルールとは独立した事実から説明できることになる。実際、(32)に相当する文を作ろうとすると、(34)のように verb-copying を行う必要がある。

- (34) a. 张三 写 那本书 写累 了。
張三 書く あの本 書く一疲れる ASP
b. 妈妈 洗 衣服 洗累 了。
お母さん 洗う 服 洗う一疲れる ASP

このように(32)の逸脱性は(33)によって説明することができることになる。ただし、(33)には経験的な問題がある。(33)は結果複合動詞構文で「主語 (V1 の動作主/V2 の対象) + 結果複合動詞+目的語 (V1 の対象)」の語順をとることができないと予測するが、(35)に示すように、可能な場合がある。

- (35) a. 大家 吃膩 了 剩菜。
みんな 食べる一飽きる ASP 残飯

‘みんなが残飯を食べ飽きた。’

- b. 老师 讲烦 了 课。
先生 教える一いらいらす ASP 授業
‘先生が講義をしてその結果いらいらした。’

任 (2005: 61)

例(35)の V2 はどれも V1 の動作主と同定されているので、これは Shi (2002)の一般化に反する。例(33)のような一部の結果複合動詞で「主語 (V1 の動作主/V2 の対象) + 結果複合動詞 + 目的語 (V1 の対象)」の語順をとることができないのは、(33)の一般化からではなく V1 の語彙的な制限によると考えられる。これまで議論してきたように、結果複合動詞において動作主目的語構文を作ることのできる V1 には活動動詞、作成動詞、位置変化動詞、そして心理動詞がある。このうち、「主語 (V1 の動作主/V2 の対象) + 結果複合動詞 + 目的語 (V1 の対象)」の語順をとることができないのは、V1 が作成動詞のときのみであるからである。

- (36) a. 张三 吃饱 了 饭。
张三 食べる一いっぱいになる ASP ご飯
‘張三がご飯を食べてその結果いっぱいになった。’
b. *张三 写累 了 那本书。
张三 書く一疲れる ASP あの本
‘張三があの本を書いてその結果疲れた。’
c. 张三 搬累 了 行李。
张三 運ぶ一疲れる ASP 荷物
‘張三が荷物を運んでその結果疲れた。’
d. 张三 恨死 了 李四。
张三 恨む一死ぬ ASP 李四
Intended reading: ‘張三が李四を死ぬほど恨んだ。’

(36)は V1 が作成動詞“写”(書く)である(36b=32a)でのみ「主語 (V1 の動作主/V2 の対象) + 結果複合動詞 + 目的語 (V1 の対象)」の語順がとれないことを示している。なお、(32b)の“洗”(洗う)は活動動詞であるが、きれいになるものが出来上がるという意味では作成動詞とすることができるので、(32b)の悪さも(36b)と同じであるとする事ができる。そうすると、一部の結果複合動詞で「主語 (V1 の動作主/V2 の対象) + 結果複合動詞 + 目的語 (V1 の対象)」の語順をとれないことは、(19)の妥当性を否定するものとならず、V1 が作成動詞のときに限られる現象であるとする事ができる⁷。

- (37) 結果複合動詞の V1 が作成動詞の意味であるときは「主語 (V1 の動作主/V2 の対象) + 結果複合動詞 + 目的語 (V1 の対象)」の語順をとれない。

上で見たように、たとえ「主語 (V1 の動作主/V2 の対象) + 結果複合動詞 + 目的語 (V1

の対象)」の語順の可能性に揺れがあるとしても、ここで重要なのは、動作主目的語ができる場合は V2 の対象と V1 の動作主が意味的に同定されるときのみだということである。次節では、これと同じことが自動詞＋自動詞型の結果複合動詞の動作主目的語構文にも言えることを示す。

2.3.4. 自動詞＋自動詞

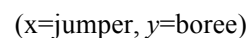
“追累”（追う－疲れる）のような他動詞＋自動詞型の結果複合動詞に動作主目的語が可能のように、自動詞＋自動詞型の結果複合動詞でも動作主目的語が可能である。(38)の複合動詞“跳烦”（跳ぶ－いらいらする）は自動詞“跳”（跳ぶ）と“烦”（いらいらする）を内部構造に持つが、以下に示すように三通りの文を作ることができ、そのうち(38c)は動作主目的語構文に当たる。

- (38) a. 张三 跳烦 了。
 张三 跳ぶ－いらいらする ASP
 ‘张三が跳んでその結果いらいらした。’
 b. 张三 跳烦 了 李四。
 张三 跳ぶ－いらいらする ASP 李四
 ‘张三が跳んでその結果李四がいらいらした。’
 c. 张三 跳烦 了 李四。
 张三 跳ぶ－いらいらする ASP 李四
 ‘张三のせいで、李四が跳んでその結果李四が疲れた。’

(38a)では、主語“张三”は“跳”（跳ぶ）の動作主でありかつ“烦”（いらいらする）の対象であるため、全体としては自動詞文になる。(38b)では、主語“张三”は“跳”（跳ぶ）の動作主、そして目的語“李四”は“烦”（いらいらする）の対象をそれぞれ表しているため、全体としては他動詞文になる。これと同じく、(38c)も他動詞文を表しているが、(38b)とは異なり、目的語の“李四”が“跳”（跳ぶ）の動作主かつ“烦”（いらいらする）の対象になる。また、(38c)では、主語“张三”はいらいらを起こす原因となる使役主と解釈される。

このように、“跳烦”（跳ぶ－いらいらする）では、(38a,b,c)の三種類の文を作ることができるが、この事実は以下のように説明できる。

- (39) a. “跳” : [EVENT x DO]
 b. “烦” : [EVENT y BECOME [STATE y BE BORED]]
 c. “跳烦” : [EVENT x DO] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE BORED]]
 → <x_(i)> , <y_(i)>
 → <x/y> or <x, y>
 a. <x/y> b. <x, y> c. *<x/y>
 | | | |
 SUB SUB OBJ OBJ



(40) *跳煩 了 李四。
跳ぶ一いらいする ASP 李四
Intended reading: ‘李四が跳んでその結果いらいした。’

(z=causer, x=jumper, y=boree)

43

ある。CAUSE 関数でつながれた下位事象は、跳んだ結果疲れるという事象を表しており、跳ぶ人(x)と疲れる人(y)は同じである。(41)の LCS から項構造<z, x/y>が形成される。(19)に従うと、z が主語に、x/y が目的語に具現されることになり、(38c)で示されている通り、“张三”が使役者そして“李四”が跳ぶ人かつ疲れる人という解釈になる。すなわち、(38c)の主語“张三”は“跳”(跳ぶ)の項でも“烦”(いらいらする)の項でもなく、(41)の LCS が示すように外的に付加された使役者となる。このように、自動詞+自動詞型において、主語が結果複合動詞の表す事象を引き起こす使役者あるいは原因を表すことは、無生物主語が現れる(42)の例を見るとより鮮明になる。

- (42) 这双鞋 跑累 了 李四。
 この靴 走る一疲れる ASP 李四
 ‘この靴のせいで、李四が走り疲れた。’

靴は走ることも疲れることもできないので、例(42)の主語“这双鞋”(この靴)は“跑”(走る)の項でもなく“累”(疲れる)の項でもない。したがって、“这双鞋”(この靴)は外的原因としか解釈されない。“跑累”(走る一疲れる)が示す下位事象は走った結果疲れるという事象で、目的語の“李四”は下位事象において走る人かつ疲れる人という解釈になる。すなわち、(42)は(41)と同じタイプの LCS を持つことになり、(43)の LCS で記述される。

- (43) z CAUSE[EVENT [EVENT x_i DO] CAUSE [EVENT y_i BECOME [STATE y_i BE TIRED]]]

→ <z, x/y>

 | |
 SUB OBJ

 | |
 这双鞋 李四

(z=causer, x=runner, y=tiree)

(38c)と(42)から分かるように、自動詞+自動詞型において、動作主目的語が可能となるには、主語が外的原因を表し、目的語がV1の動作主かつV2の対象と解釈される必要がある。実際、結果複合動詞の主語に使役者(原因)の意味があることは、Li (1995; 1999)や Her (2007)などの先行研究で述べられている通りである(cf. Cheng and Huang 1994)。そうすると、(38c)や(42)のような文は“追累”(追う一疲れる)と同じ動作主目的語構文を形成していることになる。そして、“追累”(追う一疲れる)と同じく、(38c)や(42)などの自動詞+自動詞タイプにおいてもやはり動作主目的語はV1の動作主とV2の対象が同定できる場合に限られることは(44)の例から明らかである。

- (44) a. 张三 哭湿 了 手帕。
 张三 泣く一湿る ASP ハンカチ
 ‘张三が泣いてその結果ハンカチが湿った。’
 b. *手帕 哭湿 了 张三。

ハンカチ 泣く一湿る ASP 張三

Lit. ‘ハンカチのせいで張三が泣いてその結果湿った。’

c. *張三 哭湿 了。

張三 泣く一湿る ASP

Lit. ‘張三が泣いてその結果湿った。’

(44a)は自動詞＋自動詞を内部構造に持つ“哭湿”（泣く一湿る）において，“哭”（泣く）の項“張三”と“湿”（湿る）の項“手帕”（ハンカチ）がそれぞれ主語と目的語に具現されることを表している。しかし，(38c)の“跳烦”（跳ぶ一いらいらする）や(42)の“跑累”（走る一疲れる）とは異なり，動作主目的語構文を作ることはできない。実際，(44b)のように，動作主“張三”と対象“手帕”（ハンカチ）が逆転すると非文になる。(38a)とは異なり，“哭湿”（泣く一湿る）はV1の動作主とV2の対象を意味的に同定することができないのである。このことは，(44c)が非文であることから裏付けられる。すなわち，動作主目的語が可能な“跳烦”（跳ぶ一いらいらする）や“跑累”（走る一疲れる）とは異なり，“哭湿”（泣く一湿る）は項を共有することができない。動作主目的語が可能となるにはV1の動作主とV2の対象が同定される必要があるので，“哭湿”（泣く一湿る）タイプの複合動詞は動作主目的語を作ることができないわけである。

以上のことから，“追累”（追う一疲れる）などの他動詞＋自動詞タイプと“跳烦”（跳ぶ一いらいらする）などの自動詞＋自動詞タイプは，V1の動作主とV2の対象が意味的に同定されるときにのみ動作主目的語が可能であることが明らかになった。いずれの構文においても，項の具現化は(19)の原理により説明可能で，本論の分析は当該データを説明できないLi (1995; 1999)やHer (2007)などの分析よりも望ましいものとなる。次節では，本分析が三項動詞＋自動詞タイプの結果複合動詞においても成り立つことを示す。

2.3.5. 三項動詞＋自動詞

英語の send や日本語の「送る」のように，中国語でも“寄”（送る）は項を三つ必要とする動詞であり，(45)のように直接目的語と間接目的語をとることができる。

(45) 張三 寄 了 大家 贺年片。

張三 送る ASP みんな 年賀状

‘張三はみんなに年賀状を送った。’

例(45)は“寄”（送る）が間接目的語の項として<着点>（“大家”（みんな））を，直接目的語の項として<対象>（“贺年片”（年賀状））をとることを示している。これに動作主の“張三”が加わると，“寄”（送る）は三項動詞になり，<agent, theme, goal>のような項構造を形成することになる。ここで問題となるのは，(45)の三項動詞“寄”（送る）に結果述語“膩”（飽きる）を合成して，結果複合動詞を形成することができないということである。

(46) *張三 寄膩 了 大家 贺年片。

張三 送一飽きる ASP みんな 年賀状

‘張三はみんなに年賀状を送りその結果みんなが飽きた。’

ここで、三項動詞が結果複合動詞を形成できないことを説明するために、例(47)を考えてみることにする。

- (47) a. 张三 (*往 卡车 上) 搬累 了 动物。
張三 にトラック上 運ぶ一疲れる ASP 動物
Lit. ‘張三がトラックに動物を運びその結果動物が疲れた。’
b. 张三 往 卡车 上 搬 了 动物。
張三 に トラック 上 運ぶ ASP 動物
‘張三はトラックに動物を運んだ。’

“搬”（運ぶ）は意味的には動作主（運ぶ人）と対象（運ぶもの）に加えて、運ぶ場所すなわち荷物が運ばれる着点(goal)がある。このことを LCS で表すと(48)のようになる。

- (48) [EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y MOVE [STATE y BE PLACED TO z]]]
(x=loader, y=loadee, z=goal)

(48)の LCS は“搬”（運ぶ）が単独では着点(z)をとることを示しており、(47b)のように“往卡车上”（トラックに）として具現化できる。ここで TO は着点(z)を項にとる意味述語を表す。ところが、(47a)が示すように着点を表す“往卡车上”（トラックに）を結果複合動詞構文では出すことができない。これは結果複合動詞ではある行為をした結果何らかの状態になるという意味が重要であるからである。これに対して、動詞が意味的にとる着点ではなく、単にその事象が行われる場所を指定する表現は現れてもよい。

- (49) 张三 在 屋子 里 搬累 了 动物。
張三 で 部屋 中 運ぶ一疲れる ASP 動物
‘張三が部屋の中で動物を運びその結果疲れた。’

例(49)では“在屋子里”（部屋の中で）という場所を指定する表現が現れているが、これは(47a)とは異なり、運ぶ着点ではなく単に荷物を運ぶという行為が行われる場所を表している。なので結果複合動詞の生起条件には影響しない。すなわち、同じ場所を表す表現でも“在屋子里”（部屋の中で）は(48)で着点を表す TO の変項 z が具現化されたものではなく、単に場所を表す付加詞として挿入されているものとなる。

(47a)のように着点と状態変化が同時に結果複合動詞構文で現れないことは、Goldberg (1995)で提案されている Unique Path Constraint（唯一経路の制約）から説明できる。

(50) Unique Path (UP) Constraint

If an argument *X* refers to a physical object, then no more than one distinct path can be predicated of *X* within a single clause. The notion of a single path entails two things: (1) *X*

cannot be predicated to move to two distinct locations at any given time t , and (2) the motion must trace a path within a single landscape.

Goldberg (1995: 82)

(50)は項 X がひとつの物体を指すときに、項 X は単一節内で複数の異なる経路を叙述できないことを表している。したがって、(51)のように目的語 Bill を青黒い痣になるという状態変化と部屋から出ていくという位置変化の両方の対象とみなすことはできない。

(51) *Sam kicked Bill black and blue out of the room.

これと同じことがまさに中国語の結果複合動詞構文にも言える。結果複合動詞構文はその語彙概念構造からも分かるように状態変化を表す。もし、(47a)のように着点“卡车”(トラック)が付け加わると、疲れる状態になるという状態変化の意味に加えて着点というもう一つの経路が単一節内で現れることになり、(50)の Unique Path Constraint に違反することになる。したがって、結果複合動詞構文では着点表現が現れないのである。

さらに、(50)の Unique Path Constraint があるために着点が状態変化を表す結果複合動詞構文で現れないことは、当該構文における名詞句の数が最大で二つまでに規制されることをも示すことになる。“追累”(追う一疲れる)のタイプでは二つの名詞句が、“跳烦”(跳ねる一いらいらする)のタイプでは一つあるいは二つの名詞句が現れる(それぞれ例(1)と(38)を参照)。これは、状態変化動詞は通常、(52a)のように他動詞あるいは(52b)のように自動詞で表されるからである。

(52) a. John broke the vase.

b. The vase broke.

以上のことから結果複合動詞構文には着点を表す変項 z は現れてはならず、何らかの影響を受ける対象が現れることが分かる。このことを LCS で表すと(53)のように説明できる。

(53) a. [... *_[STATE y TO z]]

(y=theme, z=goal)

b. [..._[STATE y BE STATE]]

(y=theme)

(53)の下線部で示しているように、(53a)のように着点項(z)を LCS に含む場合は結果複合動詞構文に生起できず、一方(53b)のように何らかの影響を受ける状態を定項として指定する LCS を含む場合は生起できる。状態の意味を表す(53b)の LCS_[STATE y BE STATE]が結果複合動詞で必要であることは結果複合動詞がある行為をした結果何らかの状態になるという状態変化の意味を表すことから当然の帰結である。

以上のことを踏まえた上で、もう一度(46)を考えてみると、(46)の非文さは結果複合動詞“寄賦”(送る一飽きる)に着点の“大家”(みんな)(年賀状が届くところ)があるためであると説明されることになる。着点の“大家”(みんな)があると、状態変化に加えて着点(位置変化)の意味が単一節内で表されることになる。これは(50)の Unique Path Constraint

に違反する。したがって、三項動詞が結果複合動詞で使われるためには、(54a)のように(45)から着点(“大家”(みんな))を取り除く必要がある。また、(54b)のように(45)から対象(“贺年片”(年賀状))を取り除いた文では着点“大家”(みんな)が残留するため非文となる。

- (54) a. 张三 寄賦 了 贺年片。
 张三 送る一飽きる ASP 年賀状
 ‘張三は年賀状を送りその結果飽きた。’
 b. *张三 寄賦 了 大家。
 张三 送る一飽きる ASP みんな
 ‘張三はみんなに(何かを)送りその結果みんなが飽きた。’

(54a)と(54b)の対比から、“寄賦”(送る一飽きる)を形成できるのは、三項動詞“寄”(送る)が<動作主, 着点>ではなく<動作主, 対象>を項構造に持つ場合であることが分かる。また、(54b)の悪さは(19)(目的語は対象を含まなければならない)からも明らかである。そうすると、(54a)では、“寄賦”(送る一飽きる)と“追累”(追う一疲れる)のV1とV2は、それぞれ同じ項構造<動作主, 対象>、<対象>を共有することから、(先の“寄賦”(送る一飽きる)でも“追累”(追う一疲れる)と同じく)動作主目的語が可能であると予想されるが、(55)が示すように、この予測はまさに正しい。

- (55) 贺年片 寄賦 了 张三。
 年賀状 送る一飽きる ASP 張三
 ‘張三が年賀状を送りその結果飽きた。’

例(55)は、(19)からも予測されるように目的語“张三”に<対象>(飽きる人)の解釈が与えられ、結果複合動詞においてV1が三項動詞のときでも目的語に対象の解釈が必要であることが分かる。これは英語の三項動詞teachに当たる中国語の動詞“教”(教える)が現れる(56)の例を見るとより明瞭になる。

- (56) 小王 教 大学生 汉语。
 王さん 教える 大学生 中国語
 ‘王さんは大学生に中国語を教える。’

“教”(教える)は動作主“小王”(王さん)、着点“大学生”(大学生)、そして対象“汉语”(中国語)を項にとる三項動詞である。“教”(教える)は“寄”(送る)とは異なり、直接目的語と間接目的語を形成している項は対応する他動詞文ではどちらも対象を表す直接目的語(内項)となり得る(このことは、英語teachの‘John taught the students.’のような用法と同じである)。すなわち、(57)の“教”(教える)はいずれも[EVENT x DO ON y]のLCSを持つことになり、対象(y)が直接目的語(内項)として中国語(57a)あるいは大学生(57b)に具現される。

- (57) a. 小王 教 汉语。
 王さん 教える 中国語
 ‘王さんは中国語を教える。’
 b. 小王 教 大学生。
 王さん 教える 大学生
 ‘王さんは大学生を教える。’

(54b)とは異なり、(56)で着点である“大学生”(大学生)は対応する他動詞文(57b)では対象(教えを被るという影響を受けるもの)として解釈される。(47a)で示したように、結果複合動詞構文ではV1の着点は現れず、動作主と対象の二つの項に限られる。(57)の“教”(教える)はいずれも動作主と対象だけを項にとるので、(58)のように、結果複合動詞を形成することができる。

- (58) a. 小王 教膩 了 汉语。
 王さん 教える一飽きる ASP 中国語
 ‘王さんは中国語を教えその結果飽きた。’
 b. 小王 教膩 了 大学生。
 王さん 教える一飽きる ASP 大学生
 ‘王さんは大学生を教えその結果飽きた。’

(58a,b)の目的語はどちらも対象であるので、目的語に対象を要求する(19)の条件を満たすことになり、容認される文となる。一方、(54b)の目的語“大家”(みんな)は着点(間接目的語)にしかないなので、容認されない。よって、例(58)と(54)の対比から、目的語に対象を要求する(19)のルール of 妥当性が経験面からさらに裏付けられることになる。

結果複合動詞に現れる“教”(教える)は(57)のように動作主と対象を項にとる[EVENT x DO ON y]のLCSを持つので、(58)の結果複合動詞“教膩”(教える一飽きる)は“教”(教える)のLCSと“膩”(飽きる)のLCS[EVENT y BECOME [STATE y BE BORED]]が合成され、使役を表すLCS[EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE BORED]]が形成されることになる。このLCSは教えた結果飽きるという意味を表す。ここで、xは動作主(教える人)、yは対象(教えるものあるいは教わる人)、そしてyは対象(飽きる人)を表す。教えたからと言って飽きるわけではないので、“教膩”(教える一飽きる)もstrong resultativeとなり“追累”(追う一疲れる)と同じく(14a)のLCSタイプになる。したがって、“教膩”(教える一飽きる)も“追累”(追う一疲れる)と同じく、(59)のように動作主目的語を作ることができる。

- (59) a. 汉语 教膩 了 小王。
 中国語 教える一飽きる ASP 王さん
 ‘王さんは中国語を教えその結果飽きた。’
 b. ²大学生 教膩 了 小王。
 大学生 教える一飽きる ASP 王さん

‘王さんが大学生を教えその結果飽きた。’

(59a,b)はそれぞれ(59a,b)の主語と目的語が逆転した形になっており、いずれにおいても動作主目的語が可能である。また、これまで議論してきた“追累”(追う一疲れる)タイプと“跳煩”(跳ぶ一いらいらする)タイプと同じく、(59)の動作主目的語構文もやはり V1 の動作主と V2 の対象は同じ項を共有している。

動作主目的語構文において V2 の対象が V1 の動作主と同定されなければならないので、(60)のように V1 だけでは動作主目的語を作ることができない。

- (60) a. *张三 追 了 李四。
張三 追う ASP 李四
Intended reading: ‘李四が張三を追った。’
b. *衣服 洗 了 妈妈。
服 洗う ASP お母さん
Intended reading: ‘お母さんが服を洗った。’
c. *这双鞋 跑 了 妈妈。
この靴 走る ASP お母さん
Intended reading: ‘この靴のせいで、お母さんが走った。’
d. *汉语 教 了 小王。
中国語 教える ASP 王さん
Intended reading: ‘王さんが中国語を教えた。’

(60)から結果複合動詞を形成しない他動詞、自動詞、そして三項動詞は動作主目的語を作ることができないことが分かる。このことは、本論が主張するように、V2 の存在が動作主目的語構文において必須であることを示している。

以上、2.3 節では結果複合動詞において目的語に動作主の解釈が可能な場合は、V1 が他動詞、自動詞、三項動詞に関わらず、V1 の動作主と V2 の対象が意味的に同定される必要があることを示した。LCS 分析を用いると“凍死”(凍らせる一死ぬ)のような結果複合動詞に動作主目的語が不可能であることをも説明できるが、Li (1995; 1999)や Her (2007)などの分析ではこの事実を説明することはできない。さらに、自動詞+自動詞と三項動詞+自動詞タイプの動作主目的語構文においても“追累”(追う一疲れる)などの他動詞+自動詞タイプと同じ原理が働くことを明らかにした。

2.4. まとめ

本章では、動作主であれば主語に具現されるという一般的な見解に反して、中国語非動作主卓越構文のうちの結果複合動詞では動作主を目的語に具現できることを示した。Li (1995; 1999)の分析が複雑なリンキングルールを仮定することで結果複合動詞における動作主目的語を説明しているのに対して、本章で提案した LCS 分析は単純なルールさえ仮定すればよいことを示し、Li (1995; 1999)や Her (2007)などの分析では扱えない“跳煩”(跳ぶ一いらいらする)などの自動詞+自動詞タイプと“教膩”(教える一飽きる)などの三項動

詞＋自動詞タイプの構文も同じ原理で説明できることを示した。中国語の結果複合動詞は strong resultatives と weak resultatives (Washio 1997)の違いにより異なる LCS が形成され、V2 の LCS が V1 の LCS の一部を形成するために、“冻死”（凍らせる一死ぬ）などのタイプの LCS からは動作主目的語ができないことをも示した。もちろん、Li (1995; 1999)や Her (2007)は、“冻死”（凍らせる一死ぬ）などのタイプの結果複合動詞では動作主目的語構文を作ることができないことを説明できない。このように Li (1995; 1999)や Her (2007)のメカニズムではとらえられない現象が存在するという事実は、本分析が彼らの分析よりも妥当であることを如実に物語っていると言える。

注

1. “把”の扱いについては論争があり、機能範疇とする立場(Sybesma 1999; Zou 1993), 動詞とする立場(Bender 2000; Hashimoto 1971; Ross 1991; Yang 1995), 格のマーカースとする立場(Goodall 1986; Huang 1992), 前置詞とする立場(Huang 1982; Li 1990; McCawley 1992), そして“coverb”とする立場がある(Li and Thompson 1981)。ここではこの論争には立ち入らない。
2. Weak resultative で動詞と結果述語に修飾関係が認められるといった主旨のことは、鷲尾龍一氏の講義（夏期講座 2012, 於:東京大学）でも話されていた。
3. strong resultative と weak resultative は現実世界で考えられる因果関係を反映している。意味の記述に現実世界の因果関係を取り入れることは、生成語彙論やフレーム意味論でも見られるが、これらの方法論は制限が甘く、非文をうまく予測できないなどの問題点がある。
4. Tai (1984)では中国語の動詞には達成(accomplishments)を表すものがなく、状態(states), 活動(activities)そして結果(results)しかないと論じている。結果(results)は到達(achievements)に当たる。よく引用される例を以下に挙げる。

(i) Zhangsan sha-le Lisi liangci, Lisi dou mei si.

‘John performed the action of attempting to kill Peter, but Peter didn’t die.’

Tai (1984: 291)

(i)の sha（杀）は達成動詞の典型例としてよく挙げられる英語例 kill に相当する。Tai (1984)は中国語の“杀”（殺す）は kill とは異なり達成動詞ではないとしている。なぜなら、(i)のように結果状態をキャンセルできるからである。しかし、この分析には問題がある。まず、(i)は純粹に結果状態がキャンセルされているとはいいがたい。中国語は語用論に強く依存する言語であるという特徴がある。(i)は死んだ結果がキャンセルされているのではなく、たとえば、刺し所が悪くたまたま Lisi が死ななかったあるいは、Lisi が驚異的な回復力の持ち主であるなど、コンテキストがあれば成立し得る結果と考えられる。このことは次の例からも明らかである。

(ii) *Zhangsan sha-le yizhi niao, zhezhi niao mei si.

John kill-ASP one-CL bird this-CL bird NEG dead

‘John killed a bird, but this bird didn’t die.’

もし、“杀”（殺す）が達成動詞でないのならば、(ii)の文は容認されると予測されるが、実際には容認されない。鳥には(i)で想定できるようなコンテキストが考えられにくいからである。したがって、“杀”（殺す）は達成動詞であると考えほうが自然であり、中国語には達成動詞があると考える根拠が本論と例(ii)から示されることになる。

5. 主語一致の原則に対する例外は松本 (1998)を参照されたい。
6. 以下は、V1 を活動動詞、作成動詞、位置変化動詞、そして、心理動詞に分けた場合、動作主目的語が可能な結果複合動詞の例を示しておく。

(i) 活動動詞

“追累”（追う一疲れる），“吃饱”（食べる一いっぱいになる），“喝饱”（飲む一いっぱいになる），“吃膩”（食べる一飽きる），“喝膩”（飲む一飽きる），“吃胖”（食べる一太る），“洗累”（洗う一疲れる），“喝醉”（飲む一酔う），“讲烦”（教える一いらいらす

る)，“看哭”(読む一泣く)，“听乐”(聞く一喜ぶ)，“下输”(指す一負ける)，“唱赋”(歌う一飽きる)など。

“写累”（書く一疲れる），“画累”（描く一疲れる），“挖膩”（掘る一飽きる），“刻累”（彫る一疲れる）など。

“貼煩”（貼る－いらいらする），“搬累”（運ぶ－疲れる），“装累”（積む－疲れる）など

“骂疯”（叱る一氣が狂う），“恨死”（恨む一死ぬ），“气死”（怒る一死ぬ），“吓昏”（驚かす一頭がくらくらする）など。

- (i) a. 我 负责 这件事。
私 責任を負う このこと
'私はこのことに責任を負う.'

(i)の“负责”(責任を負う)と(ii)の“做主”(決定する)はどちらも意味的には責任を負う対象と決定する対象を必要とするので、目的語が必要になる。しかし、(i)ではその目的語を具現することができないという事実から、Her (1991)は、複合動詞(VO型)は次のような複合動詞の目的語の現れに個別性があることを認めるプロセスを認め、他動詞として働くかどうかに関して揺れがあると述べている。

しかし、上記のような例と結果複合動詞の例の間に直接的なつながりはない。複合動詞全体における語順の問題はさらなる研究が必要である。

第三章

存現文

3.1. はじめに

意味役割の階層性に反して項の具現化が行われる中国語非動作主卓越構文には、第二章で議論した結果複合動詞構文以外に存現文がある。存現文とは英語などの *Locative Inversion* (場所格倒置構文) に相当する文で、「場所+動詞+対象」の語順をとり、「ある場所にあるものが存在する」という存在の意味を表す構文であることが先行研究により示されている (宋 1982a,b ; 李 1986 ; 任 2005; 2007 など)。

- (1) 衣服 上 绣 着 小王 的 脸。
服 上 縫う ASP 王さん GEN 顔
‘服の上に王さんの顔（模様）が縫ってある。’
- (2) 张三 在 衣服 上 绣 了 小王 的 脸。
張三 で 服 上 縫う ASP 王さん GEN 顔
‘張三が服の上に王さんの顔（模様）を縫った。’

“绣”（縫う）という動詞は本来、例(2)のように、通常動作主（縫う人）（“张三”）を主語に、対象（縫われるもの）（“小王的脸”（王さんの顔（模様）））を目的語にとり、そして縫われる場所（“衣服”（服））は前置詞“在”（で）を伴って現れる。ところが、(2)に対応する(1)の存現文では動作主は取り除かれ、場所（“衣服”（服））が主語に、そして対象（“小王的脸”（王さんの顔（模様）））が目的語に具現化されている。すなわち、例(1)と(2)の対比から、存現文では動詞本来がとる項の具現化ではなく、対象と場所が逆転した形で具現されることが分かる。

本章は、なぜ存現文で場所項が対象項よりも高い位置に現れ、「場所+動詞+対象」の語順をとるのかを明らかにする。本論では、存現文が「場所+動詞+対象」の語順をとるのは動詞本来の語彙概念構造(LCS)に含まれる存在の LCS がアスペクト助詞によって、所有の LCS に書き換えられるためであることを示す (cf. 于 2012)。より具体的には、動詞本来の LCS に含まれる存在を表す[...[STATE y BE AT z]]が所有を表す[STATE z_i BE WITH [STATE y BE AT z_i]]に書き換えられることにより、(1)の語順が作られることを示す。これは、所有 LCS では場所項(z)が対象項(y)よりも高い位置に生成されるために、場所(z)が主語に対象(y)が目的語に具現化される語順になるからである。すなわち、(1)の存現文が可能なのはアスペクト助詞“着”が“绣”（縫う）の意味構造を「服が服に王さんの顔があることを所有する」という所有の意味構造に書き換えらるために、<衣服, 小王的脸>という場所項“衣服”（服）が対象項“小王的脸”（王さんの顔）に階層上優先する項構造が形成されるからである。

本章では議論を以下のように進める。まず、3.2 節では先行研究の具体的な問題点を指摘する。3.3 節では存現文において、実際に場所が主語に対象が目的語に現れていることを確

かめた上で、語彙概念構造(LCS)による分析を提案し、存現文に現れることができる動詞は LCS に場所を項にとる AT 述語が記載されているものに限られるという一般化を提示する。さらに、存現文が持つ存在の意味は書き換えられた LCS から得られることも示す。3.4 節では、存現文では、動詞の意味構造に含まれる存在スキーマから所有スキーマへの LCS 変換規則があるという本分析の根拠をいくつか提示する。3.5 節はまとめである。

3.2. 先行研究の問題点

第一章でも議論したように、英語などの **Locative Inversion** と異なり、中国語の存現文では非対格自動詞以外にも非能格自動詞と他動詞が現れることができる。(3a)は非対格自動詞“落”(落ちる)。(3b)は非能格自動詞“走”(歩く)。(3c)は他動詞“刻”(彫る)の例である。

- (3) a. 路 上 倒 着 一 棵 树。
 道 上 倒れる ASP 一-CL 木
 ‘道の上には木が一本倒れている。’
 b. 前面 走 着 一 对 夫妻。
 前 歩く ASP 一-CL 夫婦
 ‘前には一組の夫婦が歩いている。’
 c. 石头 上 刻 着 一 个 字。
 石 上 彫る ASP 一-CL 文字
 ‘石の上には文字がひとつ彫ってある。’

特に、他動詞が存現文に現れることができるという点において、中国語の存現文は英語の場所格倒置構文と大きく異なる。そのため、第一章で議論したように Bresnan (1994)や Bresnan and Kanerva (1989)の LFG 分析や Coopmans (1989)の統語分析を中国語の存現文の分析に援用することはできない。なぜなら彼らの分析では、他動詞が場所格倒置構文に現れないことを予測するからである。

次に、Pan (1996)の分析について検討すると、Pan (1996)は存現文に現れるアスペクト助詞“着”に着目し、このアスペクト助詞“着”が動詞の項構造から動作主を取り去るという働きがあるため(*zhe operation*)、存現文では他動詞が生起可能になると論じている。(4)がそのメカニズムである。

- (4) *zhe operation*: <agent, theme, location,> → <theme, location>

The *zhe operation* applies if

- a. the verb in question is an accomplishment verb with the argument structure: <agent, theme, location>;
- b. the location is predicated of the theme; and
- c. the sentence in question is [-stative]

Pan (1996:428)

(4)の分析はアスペクト助詞“着”により<動作主, 対象, 場所>の項構造を持つ他動詞から動作主が取り除かれる存現文が派生されることを示している。この分析では、項構造に対する操作の結果として<対象, 場所>という項構造が形成されることになる。これは、Bresnan (1994)や Bresnan and Kanerva (1989)で提示された場所格倒置構文に現れる動詞は<theme, location>の項構造を持つという一般化に合致することになる。

しかしながら、Pan (1996)の分析は動作主を持たない非対格動詞でも(3a)のようにアスペクト助詞“着”を伴うということが説明されない。アスペクト助詞は動詞の種類にかかわらず、存現文において必須要素であるからである (例(9)参照)。さらに、Pan (1996)の分析は(5)を説明することができない。

- (5) a. *路上 慢慢地 倒 着 一棵 树。
 道上 ゆっくりと 倒れる ASP 一-CL 木
 Lit. ‘道の上にはゆっくりと木が一本倒れている。’
 b. *前面 慢慢地 走 着 一对 夫妻。
 前 ゆっくりと 歩く ASP 一-CL 夫婦
 Lit. ‘前にはゆっくりと一組の夫婦が歩いている。’
 c. *石头 上 慢慢地 刻 着 一个 字。
 石 上 ゆっくりと 彫る ASP 一-CL 文字
 Lit. ‘石の上にはゆっくりと文字がひとつ彫ってある。’

動詞が本来表す行為連鎖「行為—変化—(結果)状態」から見ると、(3a)の“倒”(倒れる)は「変化—状態」、(3b)の“走”(歩く)は「行為」、そして(3c)の“刻”(彫る)は「行為—変化—状態」を表すと考えられるが、(5)は(3)が行為連鎖の行為と変化を修飾する副詞句“慢慢地”(ゆっくりと)が生起できないことを表している。動作主を取り除くという Pan (1996)の分析では、存現文に現れることができる動詞は他動詞(達成動詞)に限られるため、動作主を持たないとされている非対格自動詞(5a)が、非能格自動詞(5b)と他動詞(5c)と同様の分布を示していることに対して、説明を与えるのは困難である¹。

このように、存現文で動詞本来が表す行為連鎖において「行為」と「変化」を修飾できないことは、存現文の意味構造は動詞本来の意味構造と異なることを示唆している。以下では、先行研究では捉えることのできない存現文の意味を捉えるために、語彙概念構造による分析を提案する。

3.3. 提案

3.3.1. 語順

具体的な分析に入る前に、まず存現文が SVO 語順をなしていることを確かめておく。第三章でも議論したように、通言語的に見て主語性を決定する文法テストには possessor relativizing (所有者関係節化)や reflexive binding (再帰代名詞束縛)などがある(cf. Keenan 1976)。Tan (1991)で議論されているように、中国語で所有者関係節化ができるのは主語のみである(詳細は第二章 2.3.1 節を参照)。もし、(1)の存現文で倒置され、動詞の後にくる対象項が主語でないとすると、possessor relativizing ができないことが予想されるが、実際、

例(6a)において, “小王的脸”(王さんの顔)の所有者“小王”を(6b)のように possessor relativizing できない。

- (6) a. 张三 的 衣服 上 绣 着 小王 的 脸。
 張三 GEN 服 上 縫う ASP 王さん GEN 顔
 ‘張三の服の上に王さんの顔(模様)が縫ってある。’
 b. *[张三 的 衣服 上 绣 着 ϕ_i 脸 的] 小王 $_{i_0}$
 張三 GEN 服 上 縫う ASP 顔 GEN 王さん
 Lit. ‘張三の服の上に顔(模様)が縫ってある王さん。’
 c. [ϕ_i 衣服 上 绣 着 小王 的 脸 的] 张三 $_{i_0}$
 服 上 縫う ASP 王さん GEN 顔 GEN 張三
 ‘服の上に王さんの顔(模様)が縫ってある張三。’

(6b)から分かるように, (6a)の目的語名詞句“小王的脸”(王さんの顔(模様))からは所有者関係節化ができない。これに対して, (6c)は(6a)の主語名詞句から所有者関係節化ができることを示している。このことは, (6a)の存現文において“小王的脸”(王さんの顔)が(倒置された)主語でないことを示している。

さらに, 存現文の目的語名詞が主語として機能していないことは reflexive binding (再帰代名詞束縛) から確かめることができる。

- (7) a. 门口 穿着自己 $_{i_1}$ 的衣服 站 着 一个 男人 $_{i_0}$
 ドアの前 自分の服を着て 立つ ASP 一-CL 男
 ‘ドアの前にはひとりの男が自分の服を着て立っている。’
 b. 一个 男人 $_i$ 穿着自己 $_i$ 的衣服 站 在 门口。
 一-CL 男 自分の服を着て 立つ で ドアの前
 ‘ひとりの男が自分の服を着てドアの前に立っている。’

一般に, 再帰代名詞の“自己”(自分)を束縛できるのは主語のみとされている(cf. Tan 1991; Huang et al. 2009; etc.)。もし, (7a)の存現文における“一个男人”(ひとりの男)が単に倒置された主語として機能しているならば, “自己”(自分)を束縛できるはずだが, インデクスが示しているように実際にはできない。一方, (7a)に対応する通常の文(7b)では“自己”(自分)を束縛できるので, “一个男人”(ひとりの男)が主語として機能していることが分かる。これらの事実は, (7a)の存現文では主語として機能しているのは対象項ではなく場所項であることを示している。

さらに, (7a)から示唆されるように, 存現文の目的語名詞(有生物)は動作主としてではなく, ある場所に存在する対象として機能している。このことは(8)の付加詞のコントロールの事実からも分かる。

- (8) a. 十个 人 (紧张地) 站 在 屋 里。
 十-CL 人 緊張して 立つ で 部屋 中

‘十人が緊張して部屋の中で立っている。’

- b. 屋 里 (*紧张地) 站 着 十 个 人。
部屋 中 緊張して 立つ ASP 十-CL 人
Lit. ‘部屋の中に十人が緊張して立っている。’

Tan (1991: 132)

通常、中国語において付加詞をコントロールできるのは動作主（すなわち、多くの場合は主語）のみとされている(cf. Tan 1991)。(8a)では動詞“站”（立つ）が立つ人（“十个人”（十人））を項にとり、立つ場所（“屋”（部屋））が前置詞“在”（で）を伴って現れている。(8b)は(8a)に対応する存現文に当たる。もし、(8b)で“十个人”（十人）が単に倒置された動作主で、主語として機能しているのであれば、(8a)と同じく付加詞“紧张地”（緊張して）をコントロールできると予測されるが、実際はできない。

以上の事実から、存現文では単に主語が倒置されたのではなく、場所が主語にそして対象が目的語に具現されていることが確かめられたことになる。また、このことは中国語が厳格な SVO 語順であることから推察される。以降、これらの事実を踏まえた上で、具体的な提案を示していく。

3.3.2. 存在と所有の変換規則

議論の出発点として、まずアスペクト助詞による語彙概念構造の書き換えという操作の動機づけを示す。李 (1986), 聂 (1989), 任 (2007) や宋 (1988)でも議論されているように、存現文ではアスペクト助詞“着”と“了”が現れ、それらは交替可能であるということが明らかになっているが、興味深いことに、存現文においてこれらのアスペクト助詞は必須の要素で、(9)に示す通り例(3)の存現文からアスペクト助詞を省略することはできない（グロスは(3)を参照）。

(9) a. 路上倒{着/了}一棵树。

a'. *路上倒一棵树。

b. 前面走{着/了}一对夫妻。

b'. *前面走一对夫妻。

c. 石头上刻{着/了}一个字。

c'. *石头上刻一个字。

一般に、アスペクト助詞“着”は継続相，“了”は完了相を表すとされているが（呂 1944; 高橋 2002; 王 1943; 王 1999 など）、例(9)から分かるように、存現文では“着/了”を用いないと非文となる²。このように、アスペクト助詞が存現文において必須であるということから、本論は存現文の形成には、アスペクト助詞による動詞の LCS の存在スキーマから所有スキーマへの変換が関わっていることを提案する。以下ではそのような変換がどのようにして起こるかについて論じる。

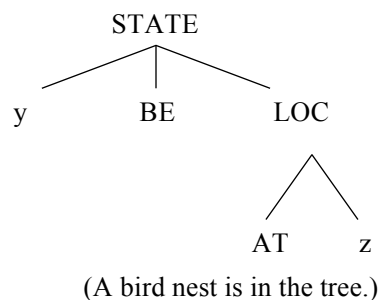
まず、影山 (1996)でも主張されているように、たとえば、(10a)の存在文から(10b)の所有文への変換においては、(11)のように動詞の意味構造で場所に焦点が当たると存在スキーマ

マから所有スキーマへの LCS の組み換えが行われると仮定できる。

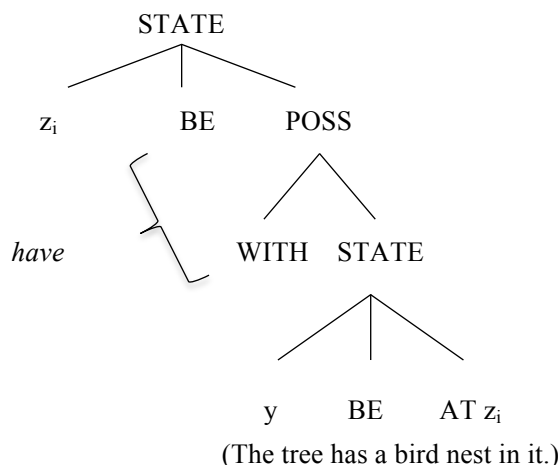
(10) a. A bird nest is in the tree.

b. The tree has a bird nest in it.

(11) a. 存在文



→ b. 所有文



影山 (1996: 55)

影山 (1996)の分析では、存在文が存在対象(y)に焦点を置いた構文であるのに対して(11a), 場所(z)に焦点を当て、zを主語に取り立てたのが所有文である(11b)。(11b)に示しているように、(11a)から(11b)への変換においては、(11a)の存在スキーマから取り立てられた z は AT 以下と同一指示項となり、BE WITH という意味述語の項となる。WITH は何らかの状態を伴っていること(付随, 付帯)を意味する概念を表し(影山 1996), 英語では BE WITH 全体が have という動詞として具現される。(11b)の意味構造は、ある場所(z)が何か(y)がその場所(z)にあることを所有するということを表している。

存現文も結局のところ談話的には場所句に焦点が当たっているという特徴があるので、(11)の存在スキーマから所有スキーマへの転換規則が存現文にも関与していると考えられる。そうすると、以下でも見るように、存現文が「場所+動詞+対象」の語順になることが説明できる。

(11)から分かるように、存在の LCS から所有の LCS へと書き換えられるには、構文において場所を指定する必要があるため、動詞本来の LCS に場所を変項にとる AT 述語が含まれていなければならない。この AT 述語が含まれている動詞とそうでない動詞を動詞が表

す意味タイプで分けてみると、(12)のように列挙することができる。第一章でも議論したように、語彙概念構造(LCS)は動詞が表す(概念的な)意味を反映しているので、それぞれの意味タイプが表す LCS の雛形は以下のように記述できる。

(12) a. LCS に場所を含む AT 述語がある動詞

- (i) 作成動詞 (“刻” (彫る), “写” (書く) など)
[EVENT [EVENT x DO] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE AT z]]]
- (ii) 位置変化動詞 (“放” (置く), “挂” (掛ける) など)
[EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y MOVE [STATE y BE AT z]]]
- (iii) 着衣動詞 (“戴” (被る), “穿” (着る) など)
[EVENT [EVENT x PUT ON y] CAUSE [EVENT y MOVE [STATE y BE AT z]]]
- (iv) 移動様態動詞 (“走” (歩く), “跑” (走る) など)
[EVENT x MOVE [STATE x BE AT z]]
- (v) 出現動詞 (“生” (発生する), “出現” (出現する) など)
[EVENT BECOME [STATE y BE AT z]]
- (vi) 存在動詞 (“住” (住む), “存在” (存在する) など)
[STATE [y BE AT z]]

b. LCS に場所を含む AT 述語がない動詞

- (i) 状態変化動詞 (“杀” (殺す), “打破” (壊す) など)
[EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE STATE]]]
- (ii) 接触・打撃動詞 (“打” (殴る), “踢” (蹴る) など)
[EVENT x DO ON y]
- (iii) 知覚動詞 (“看” (見る), “听” (聞く) など)
[EVENT x EXPERIENCE y]
- (iv) 飲食動詞 (“吃” (食べる), “喝” (飲む) など)
[[EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE CONSUMED]]]
- (v) 生理動詞 (“哭” (泣く), “笑” (笑う) など)
[EVENT x EXPERIENCE]

ここで(12)を少し詳しくみると、(12a,b)のうち存現文に現れることができる動詞は(12a)のタイプになる。(12a)と(12b)は第一章で導入した達成などのアスペクトで分けられているのではない。作成動詞(12iai)と状態変化動詞(12bi)はどちらも達成動詞に当たるが、作成動詞の LCS には場所概念を表す AT があり、状態変化動詞にはない。これは作成動詞があるものがある場所に出現するという意味があるからである。一方、状態変化動詞は場所とは関係なく、何かがある状態に変化することを意味する。この意味の違いを LCS で記述すると、作成動詞の LCS には場所を指定する AT 述語が含まれるもの(12ai), 状態変化動詞の LCS には [BE STATE]のように場所でなく状態を指定する定項 STATE が含まれるものに分かれることになる(12bi)。これと同じことは活動アスペクトを表す移動様態動詞(12aiv)と生理動詞(12bv)を比べても分かる。移動様態動詞の LCS を単に[x MOVE]と記述することもあるのは事実であるが、(12aiv)の動詞では[EVENT x MOVE [STATE x BE AT z]]のように場所を指定

する AT 述語が含まれていると考えることができる。歩くや走るという動作はある場所でその動作が行われることを含意するからである。実際、移動様態動詞の意味構造に場所が項として指定され得ることは、移動様態動詞が場所を項（目的語）としてとり、他動詞として機能することがあるからで、(13)からもその事実が伺える。

- (13) a. 她 跑 这里, 我 跑 那里。
 彼女 走る ここ 私 走る あそこ
 ‘彼女はここ、私はあそこを走る。’
 b. 我 走 过 这个 公园。
 私 走る ASP この-CL 公園
 ‘私はこの公園を走ったことがある。’

例(13)のように、場所を項としてとることは移動様態動詞の LCS に移動するもの(x)と移動する場所(z)が指定されていることを示唆している。一方、“哭”(泣く)などの生理動詞(12bv)は(13)に相当する文を作ることができない。(14a)は泣く場所、(14b)は笑う場所が目的語として機能できないことを示している。

- (14) a. *我 哭 这里。
 私 泣く ここ
 Lit. ‘私はここで泣く。’
 b. *她 笑 公园。
 彼女 笑う 公園
 Lit. ‘彼女は公園で笑う。’

(13)と(14)の対比から移動様態動詞の LCS には場所を指定する AT 述語が含まれ(12aiv), 生理動詞の LCS には場所概念を表す AT 述語が含まれないとすることができる(12bv)。

このように動詞はその意味構造として、場所を変項にとる AT 述語を含むものと含まないものがある。(12ai)の作成動詞では、誰か(x)がある行為をしてその結果あるもの(y)がある場所(z)に現れるという意味を表し、AT が含まれる LCS で捉えることができる。位置変化動詞はあるもの(y)が移動する先(場所) (12aai), 着衣動詞は対象(y)が移動する先(場所, すなわち身体部位) (12aaii), 移動様態動詞は移動する場所(12aiv), 出現動詞は対象(y)が現れる場所(12av), そして存在動詞にはそれが存在する場所が必要となるために(12avi), それぞれの LCS に AT 述語が必須要素として記載されるのである。一方、場所概念を表す AT 述語を含まない動詞には(12bi~v)のようなものがある。状態変化動詞は誰か(x)がある対象(y)がある状態になることを引き起こすこと(12bi), 接触・打撃動詞は誰か(x)が人やもの(y)に働きかけること(12bii), 知覚動詞は見るや聞くなどの行為を経験すること(12biii), 飲食動詞は飲み食いした結果対象(y)が消費されること(12biv), そして生理動詞は誰かが(x)生理現象を経験することが意味の中心であり(12bv), それぞれ場所が必須要素とならないために語彙概念構造には AT 述語が含まれない。このように動詞が表す意味を見ることで、動詞の意味構造に場所を変項にとる AT 述語があるかどうかは分かる。

(11)の存在の LCS から所有の LCS への転換規則は, 動詞本来の LCS に AT 述語があることが必須条件となるので, (12a)のように, 動詞本来の意味構造に AT 述語が含まれる動詞は存現文に現れることができるが, (12b)のように, 動詞本来の意味構造に AT 述語が含まれない動詞は存現文に現れることができないことが予測される。以下この予測が他動詞, 非能格自動詞, 非対格自動詞などさまざまな動詞において成り立つことを示す。

3.3.3. AT 述語と他動詞

(12a,b)のうち, (11)の LCS 転換規則が適用できるのは, 語彙概念構造に場所を変項にとる AT 述語がある(12a)である。具体的には, まず, (3c)の作成動詞“刻”(彫る)の語彙概念構造から考えてみると, “刻”(彫る)は動作主(x)が彫るという行為をし, その結果何かが(y)が場所(z)に現れるという(12ai)タイプの意味構造を表す。

(15) “刻”(彫る)

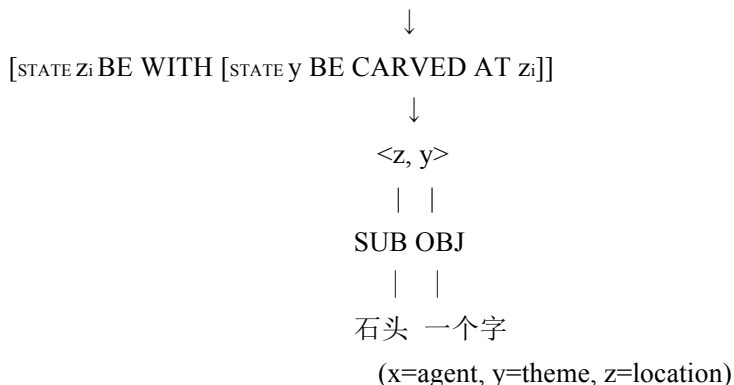
[EVENT [EVENT x DO] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE CARVED AT z]]]
(x=agent, y=theme, z=location)

一般に LCS 上でより高い位置にある変項は項構造さらには統語構造においてもより高い位置に具現されるので (cf. 影山 1996), (15)の LCS からは<x, y, z>という項構造が形成されることになる。この LCS からは(16)の文が作られる。

(16) 张三 在 石头 上 刻 了 一个 字。
张三 で 石 上 彫る ASP 一-CL 文字
‘张三が石の上で文字をひとつ彫った。’

例(16)では動作主(张三)が主語に対象(一个字)が目的語にそして場所句(石头)は前置詞“在”を伴って副詞句として現れる。このように, “刻”(彫る)本来の LCS からは(3c)の存現文の語順とならないため, 存現文に現れるアスペクト助詞“着/了”が(11)の LCS 組み換え規則を担うと仮定すると, (17)が派生できる。そして, (3c)の文構造は(17)のメカニズムから説明できることになる。

(17) [EVENT [EVENT x DO] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE CARVED AT z]]]



(17)では、アスペクト助詞により存在を表す LCS [STATE y BE CARVED AT z]の下線部がハイライトされ、場所に焦点が当てられると同時に存在の LCS 以前の LCS が背景化される。場所に焦点が当てられるということは、(11)で見たように、存在スキーマから所有スキーマへの組み換え規則が適用されるということであり、一つ目の矢印で表すような LCS が形成されるということである。このことにより、場所(z)が何か(y)がそこにあることを所有するという意味構造が出来上がる。この LCS から形成される項構造は、より高い位置にある変項は項構造でもより高い位置にリンクされるため、2つ目の矢印で示されているように、<z, y>となる (cf. 影山 1996)。項構造レベルでより高い位置にある項は統語構造でもより高い位置に具現されるので、この項構造からは場所が主語に対象が目的語に具現化され、(3c)の存現文ができることになる。このように、存在スキーマから所有スキーマへの書き換え規則により存現文の語順を自然に説明できる。なお、通常、所有者は有生物であることが多いが、‘the table’s leg’のように所有物と所有者が部分と全体関係にあるときは所有関係を結ぶことができる(cf. Pinker 1989)。(17)から派生される(3c)の存現文でも主語名詞“石头”(石)と目的語名詞“字”(文字)は部分と全体関係にある。石に彫られている文字はその石の一部をなすからである。このことから LCS 転換規則により所有 LCS に書き換えられる(17)の分析が支持されることになる。

さらに、本論の分析は存現文が表す「あるものがある場所に存在する」という存在の意味も説明することができる。結論から言うと、存在の意味は(17)の所有スキーマ[STATE z BE WITH [STATE y BE CARVED AT z]] (z が y を所有する) から得ることができる。Pinker (1989)でも議論されているように、一般に所有と存在の間には、‘If X HAVE Y, then Y BE (place function) X’という推論規則が働くと考えられている。この推論規則を(17)の所有スキーマに適用すると、(17)の所有 LCS が表す「ある場所(石)があるもの(文字)が(彫られた状態で)そこにあることを所有する」という意味から「あるもの(文字)がある場所(石)に(彫られた状態で)存在する」という存在の意味を導くことができる。このように、本分析は存現文の語順を説明できるだけでなく、存現文が表す存在の意味も同時に捉えることができるのである。

ここでひとつ注意したいのは、存現文で場所に焦点が当たっていることは、場所句が話題化されているということの意味しているのではないということである。このことは、存現文の主語の後に“呀”や“呢”などの pause particle を置くことができないことから分かる(cf. Li and Thompson 1981)。

- (18) *石头 上 呀/呢 刻 着 一个 字。
 石 上 Pause Particle 彫る ASP 一-CL 文字
 ‘石の上には文字がひとつ彫ってある。’

通常、話題化された名詞句は“呀”や“呢”などの pause particle を挿入できるとされている(cf. Li and Thompson 1981)。もし、存現文で主語として取り立てられた場所が単に話題化されることで焦点が当てられているのだとすると、“呀/呢”と共起できるはずだが、実際にはできない。このことは存現文の場所主語が単に話題化を受け焦点化されているのではないことを示している。

ここで、再度(5c)の逸脱性を考えてみると、(5c)で行為連鎖上の行為を修飾する副詞句“慢慢地”(ゆっくりと)と共に起できないのは、(17)で動詞の存在 LCS よりも前の LCS は背景化されており、存現文の LCS である[STATE z_i BE WITH [STATE y BE CARVED AT z_i]]には行為を意味する[EVENT x DO ON y]が取り除かれているからであると説明することができる。行為を表す LCS が存現文では背景化されていることは、存現文では(21)のように動作主を表出できないことから明らかである。

- (19) *石头 上 张三 刻 着/了 一个 字。
 石 上 張三 彫る ASP 一-CL 文字
 Lit. ‘石の上に張三が文字をひとつ彫ってある。’

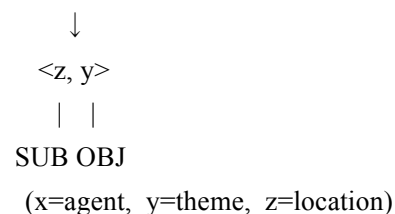
(19)では(17)の DO の項 x に当たる動作主(张三)が具現されていることになるが、実際には存現文の LCS は概念述語 DO を持たないために非文となる³。この事実は存現文では存在スキーマから場所に焦点が当てられることにより、存在スキーマから所有スキーマへの書き換えが起こり、「場所+動詞+対象」の語順が得られるということを示唆している。

ここで“刻”(彫る)以外の作成動詞や位置変化動詞も存現文に自由に現れることができることに注目したい。

- (20) a. 墙 上 画 着 一朵 玫瑰花。
 壁 上 描く ASP 一-CL バラ
 ‘壁にはバラが一輪描かれている。’
 b. 衣服 上 绣 着 一只 鸟。
 服 上 縫う ASP 一-CL 鳥
 ‘服の上には鳥(の模様)がひとつ縫ってある。’
 c. 墙 上 挂 着 两块 金牌。
 壁 上 掛ける ASP 二-CL 金メダル
 ‘壁には金メダルが二つ掛けてある。’
 d. 桌子 上 放 着 两个 杯子。
 机 上 置く ASP 二-CL グラス
 ‘机の上にはグラスが二つ置いてある。’

(20a,b)ではそれぞれ作成動詞“画”(描く)と“绣”(縫う)が、(20c,d)ではそれぞれ位置変化動詞“挂”(掛ける)と“放”(置く)が現れている存現文である。(20a,b)の作成動詞は(17)の“刻”(彫る)と同じ LCS を持ち、(20c,d)の位置変化動詞は(12a_{ii})タイプの LCS に当たる(21)のような LCS を持つと考えられ、(20a,b)と(20c,d)はどちらも意味構造に場所(z)を変項にとる AT 述語があるという点で共通している。

- (21) [EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y MOVE [STATE y BE AT z]]]
 ↓
 [STATE z_i BE WITH [STATE y BE AT z_i]]

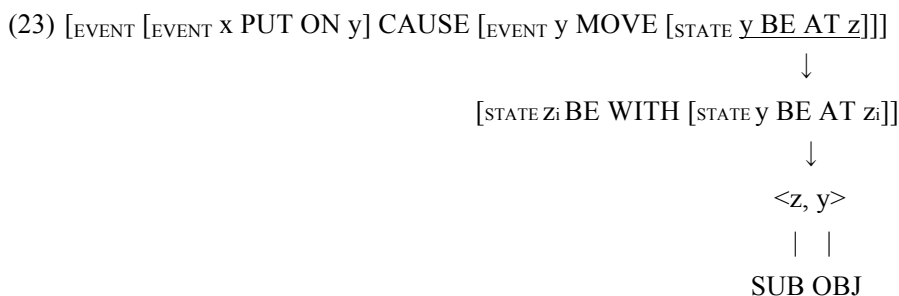


(21)で示されているように、位置変化動詞は、本来の LCS として動作主(x)が対象(y)に働きかけその結果 y が場所(z)に移動する(MOVE)という意味構造を持つ。ここでの LCS においても AT 述語があるので、AT がとる場所(z)を取り立てることができる。(17)と同様に(11)のスキーマの書き換え規則を動詞の LCS に適用すると、<location, theme>の項構造が形成されることになる。したがって、場所が主語に対象が目的語に具現される(20c,d)のような存現文が作られる。

作成動詞と位置変化動詞以外にも(12a)で意味構造に AT 述語を持つとされる他動詞には着衣動詞があり、(22)に示すように存現文に現れることができる。

- (22) a. 他的头 上 戴 着 一个 帽子。
彼の頭 上 被る ASP 一-CL 帽子
‘彼の頭には帽子がひとつ被ってある。’
b. 他的身 上 穿 着 一套 很 漂亮的西服。
彼の体 上 着る ASP 一-CL とても きれいなスーツ
Lit. ‘彼の体の上にはとてもきれいなスーツが着てある。’
c. 她的手 上 戴 着 一块 高级表。
彼女の腕 上 着ける ASP 一-CL 高級時計
‘彼女の腕には高級時計がひとつ着けてある。’
d. 她的脖子 上 围 着 一条 红围巾。
彼女の首 上 巻く ASP 一-CL 赤いスカーフ
‘彼女の首には赤いスカーフがひとつ巻いてある。’

(22a,b,c,d)はそれぞれ着衣動詞“戴”(被る)，“穿”(着る)，“戴”(着ける)，“围”(巻く)の存現文である。(12aiii)の語彙概念構造の記述に従うと、着衣動詞の LCS は(23)のように記述でき、意味構造に AT 述語があるという点において作成動詞(20a,b)、位置変化動詞(20c,d)と共通している。



(x=agent, y=theme, z=location)

(23)では着衣動詞本来の LCS は、誰か(x)が何か(y)を着てその結果 y が（身体部位の）場所(z)に移動し存在するという意味を表している。ここで、PUT ON は着るという行為の概念を表している。ここでも大事なことは、着衣動詞の意味構造に AT 述語があることである。AT 述語があるため(13)の存在から所有への LCS 転換規則を適用することができ、その結果一つ目の矢印で示すような LCS が形成されることになる。この LCS から $\langle z, y \rangle$ という項構造が形成されることになる。したがって、場所(z)が主語に、対象(y)が目的語に具現化される(22)の存現文が作られる。

これに対して、同じ他動詞であっても AT 述語を持たないと考えられる知覚動詞は存現文を作ることができない。

(24) a. 张三 在 街 上 看 了 很多 人。

张三 在 街 上 看 ASP 了 很多 人

‘张三が街でたくさんの人を見た。’

b. *街 上 看 了 很多 人。

街 上 看 ASP 了 很多 人

Lit. ‘街にはたくさんの人が見ている。’

(25) a. 张三 在 客厅 里 听 了 音乐。

张三 在 客厅 里 听 ASP 了 音乐

‘张三が客間で音楽を聞いた。’

b. *客厅 里 听 了 音乐。

客厅 里 听 ASP 了 音乐

Lit. ‘客間には音楽が聞かれている。’

例(24a,b)と(25a,b)は知覚動詞“看”（見る）と“听”（聞く）が存現文に現れないことを示している。(12b)でも示したように、見ることや聞くことにとって場所概念は必須でないもので、知覚動詞の LCS は(26)のように記述できる。

(26) [EVENT x EXPERIENCE y]

→ $\langle x, y \rangle$

| |

SUB OBJ

(x=agent, y=theme)

(26)では場所を表す意味述語に当たる AT がなく、LCS から場所項を取り立てることは不可能なため(11)のスキーマの書き換え規則を適用することができない。その結果、(26)の LCS から $\langle x, y \rangle$ という項構造しか形成されず、(24a)と(25a)のような語順のみが許されるのである。

(12b)で意味構造に AT 述語がない動詞には他に接触動詞や飲食動詞などの働きかけを表

す他動詞があり、これらのタイプの動詞も知覚動詞と同じく存現文にできない。接触動詞は接触することが重要であり、飲食動詞は飲食する行為により何かが消費されることが重要であるので、[EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT [y BECOME [STATE y BE CONSUMED]]]]という LCS を持つと考えられる。(27a,b)では接触動詞の“打”（打つ）と“踢”（蹴る）が、(27c,d)では飲食動詞の“吃”（食べる）と“喝”（飲む）が存現文と共起できないことを示している。

- (27) a. *屋子 里 打 着 李四。
 部屋 中 殴る ASP 李四
 Lit. ‘部屋の中には李四が殴られている。’
 b. *屋子 里 踢 着 李四。
 部屋 中 蹴る ASP 李四
 Lit. ‘部屋の中には李四が蹴られている。’
 c. *教室 里 吃 着 苹果。
 教室 中 食べる ASP りんご
 Lit. ‘教室の中にはりんごが食べてある。’
 d. *教室 里 喝 着 咖啡。
 教室 中 飲む ASP コーヒー
 Lit. ‘教室の中にはコーヒーが飲まれている。’

日本語訳からも分かるように、殴られているあるいは蹴られている“李四”が部屋にいるという存在の意味を表す存現文を作ることはできない(27a,b)。同様に、食べられたりんごや飲まれたコーヒーが教室にあるという存現文を作ることもできない(27c,d)。食べられるあるいは飲まれると（少なくとも原型として）対象物は存在しなくなるからである。この意味は飲食動詞の LCS に[STATE y BE CONSUMED]として指定されている。存現文はあるものの存在を表す構文であるので、何かが消費されなくなることを LCS で指定する飲食動詞は存現文と共起できないのである。

以上のことから、存現文では動詞本来の LCS に場所を変項としてとる AT 述語が必要であることが分かり、この場所に焦点が当てられ取り立てられることで、存在スキーマから所有スキーマへの書き換え規則が適用された結果、最終的に<location, theme>という項構造から「場所＋動詞＋対象」という存現文の語順が得られることが分かる。次節では、これと同じことが非能格自動詞と非対格自動詞にも言えることを見ていく。

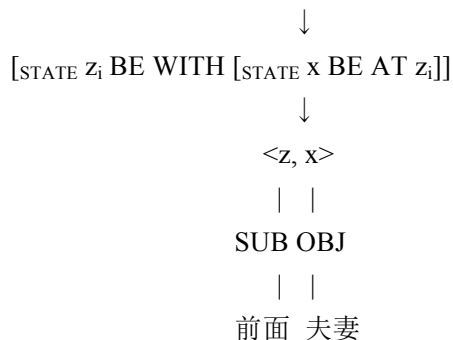
3.3.4. AT 述語と自動詞

3.3.4.1. 非能格自動詞

動詞の語彙概念構造に場所を変項にとる AT 述語があるのは、作成動詞などの他動詞だけでなく、AT 述語を持つ自動詞もある。まず、(12aiv)の移動様態動詞から考えてみることにする。非能格自動詞に当たる移動様態動詞もやはり作成動詞や位置変化動詞の他動詞と同じく存在スキーマから所有スキーマへの書き換えによって存現文で現れることができる。移動様態動詞には“走”（歩く）などがあり、(28=(3b))は(29)の LCS から説明できる。

- (28) 前面 走 着 一对 夫妻。
 前 歩く ASP 一-CL 夫婦
 ‘前には一組の夫婦が歩いている。’

(29) [EVENT x MOVE [STATE x BE AT z]]



(x=theme, z=location)

影山・由本 (1997)や岸本 (2009)でも議論されているように、「歩く」のような移動（様態）動詞の概念述語として MOVE が設定される。歩いた移動があれば，ある場所（移動先）に存在することになることから，BE AT の概念構造も設定されることになる。したがって，移動様態動詞を表す非能格自動詞の LCS は誰か(x)が移動し，ある場所に存在するという意味を表す(29)の一つ目の LCS になる。(29)でも AT 述語があるので AT がとる場所項(z)に焦点が当てられると，(11)の存在スキーマから所有スキーマへの書き換え規則が働き，一つ目の矢印で表すような LCS が形成される。その結果，場所(z)が主語にそして対象(x)が目的語に具現され，存現文が作られることになる。(29)でもうひとつ重要なのはスキーマの書き換え規則により動詞の元の LCS から MOVE が背景化されていることである。MOVE の背景化により，存現文の LCS に概念述語 MOVE が取り除かれるので，(5b)のように副詞句“慢慢地”（ゆっくりと）は動作の様態を修飾することができなくなる。

歩くという行為は意志的に行うことができるので，(29)の“夫妻”（一組の夫婦）を動作主として見なすことも可能だが，存現文で現れたときは歩く動作主ではなくその場所に歩いている状態で存在する対象として機能している。このことは(30)の対比からも明らかである。

- (30) a. *前面 故意地 走 着 一对 夫妻。
 前 わざと 歩く ASP 一-CL 夫婦
 Lit. ‘前にはわざと一組の夫婦が歩いている。’
 b. 一对 夫妻 故意地 走 在 前面。
 一-CL 夫婦 わざと 走る で 前
 ‘一組の夫婦が前でわざと歩いている。’

通常，“故意地”（わざと）は動作主指向の副詞とされている。動作主を項にとる LCS の概念には DO があるが，ここでは MOVE が動作主の項をとることができる。移動するという行為を意図的に行うことができるからである。もし，(28)の“一对夫妻”（一組の夫婦）が

動作主であるならば“故意地”（わざと）と共起できるはずだが、(30a)が示すように実際にはできない。対照的に、“一对夫妻”（一組の夫婦）が主語に現れる(30b)では可能である。(30)の事実から場所が主語に現れる(28)の存現文では“一对夫妻”（一組の夫婦）は動作主ではなくその場所に存在する対象として機能していることが分かる。

もちろん、“走”（歩く）以外の移動様態動詞も存現文に現れることができ、(31)が示すように“跑”（走る），“游”（泳ぐ），“飞”（飛ぶ）などがこれに当たる。

- (31) a. 前面 跑 着 很多 人。
 前 走る ASP たくさん 人
 ‘前にはたくさんの人が走っている。’
 b. 池 里 游 着 八条 鲤鱼。
 池 中 泳ぐ ASP 八-CL 鯉
 ‘池の中には八匹の鯉が泳いでいる。’
 c. 天 上 飞 着 五只 鸟。
 空 上 飛ぶ ASP 五-CL 鳥
 ‘空には五匹の鳥が飛んでいる。’

“跑”（走る），“游”（泳ぐ），“飞”（飛ぶ）も“走”（歩く）と同じく移動様態動詞であるので、(12aiv)の LCS の雛形に当たる(29)の LCS を形成することになる。したがって、(31)の存現文を作ることができる。これに対して、(33a,b)に示すように場所概念を表す AT 述語が LCS に記載されていない(32a)の生理動詞や(32b)の動作動詞は存現文を作ることができない。

- (32) a. *会场 里 哭 着 很多 小孩。
 会场 中 泣く ASP たくさん こども
 Lit. ‘会場にはたくさんのこどもが泣いている。’
 b. *屋子 里 叫 着 三个 小姑娘。
 部屋 中 叫ぶ ASP 三-CL 少女
 Lit. ‘部屋の中には三人の少女が叫んでいる。’

- (33) a. [EVENT x EXPERIENCE]
 b. [EVENT x DO]

(12b)でも示したように、“哭”（泣く）などの生理動詞の LCS と“叫”（叫ぶ）などの意図的な行為を表す LCS は、それぞれ(33a,b)のように記述できる。(33a)は誰かが(x)泣く行為を経験すること、(33b)は誰かが(x)叫ぶ行為をするを表している。これらの LCS は単にある生理現象を経験することやある行為が行われることを表すので、その LCS には AT 述語がない。したがって、(11)の LCS 転換規則を適用することができないために(32)の存現文を作ることができない。

3.3.4.2. 非対格自動詞

LCSに場所を変項にとる AT 述語が含まれる自動詞は“走”（歩く）などの移動様態動詞を表す非能格自動詞だけでなく、非対格自動詞“倒”（倒れる）などがある。本分析では LCS に AT 述語があるかないかが重要なので、“倒”（倒れる）などの動詞も存現文に現れる。Levin and Rappaport Hovav (1995)でも議論されているように、英語では非対格自動詞の中でも状態変化動詞（自他交替があるもの）の場合は *Locative Inversion* にできない。

(34) a. *On the top floor of the skyscraper BROKE many windows.

b. *On the streets of Chicago MELTED a lot of snow.

Levin and Rappaport Hovav (1995: 224)

例(34)から分かるように、状態変化を表す非対格自動詞 *break*(34a)と *melt*(34b)は *Locative Inversion* に現れない。これは *break* や *melt* の LCS が[_{EVENT} y BECOME y BE STATE]のような状態変化の LCS を持つからである。この LCS には場所概念の AT 述語がない。

英語と同じく、中国語の存現文もまた状態変化を表す非対格自動詞は現れない(35c)。

(35) a. 张三 打破 了 杯子。

张三 打つ-破れる ASP コップ

‘张三がコップを壊した。’

b. 杯子 破 了。

コップ 破れる ASP

‘コップが壊れた。’

c. *桌子 上 破 着 一个 杯子。

机 上 破れる ASP 一-CL コップ

Lit. ‘机の上にはコップがひとつ壊れてある。’

d. *桌子 上 打破 着 一个 杯子

机 上 打つ-破れる ASP 一-CL コップ

Lit. ‘机の上にはコップがひとつ壊れてある。’

(35a,b)は“打破”（壊す）と“破”（壊れる）の自他交替を表す文である。ここで“破”（壊れる）は何か壊れる状態になるという状態変化を表す非対格自動詞である。状態変化の意味を表す非対格自動詞は(35c)のように存現文にできない。これは(35c)が(36)の LCS を持つからである。

(36) [_{EVENT} y BECOME [_{STATE} y BE BROKEN]]

(36)の LCS には場所を変項にとる AT 述語がなく,(11)の存在スキーマから所有スキーマへの書き換え規則を適用することができない。したがって、(35c)の存現文を作ることにはできない。これと同じ理由により(35d)の“打破”（壊す）も存現文に現れない。“打破”（壊す）は使役状態変化を表す他動詞なので、(37)のような LCS を持つ。

(37) [EVENT x DO ON y [EVENT y BECOME [STATE y BE BROKEN]]]

(37)の LCS もまた場所を変項にとる AT 述語がないので, (11)の LCS 書き換え規則を適用できない。したがって, (35d)のような存現文はできない。(37)の LCS を持つ状態変化他動詞が存現文に現れないことは(38)の例からも明らかである。

(38) *路上 杀 着 一个 人。
 道上 殺す ASP 一-CL 人
 Lit. ‘道の上には人がひとつ殺されている。’

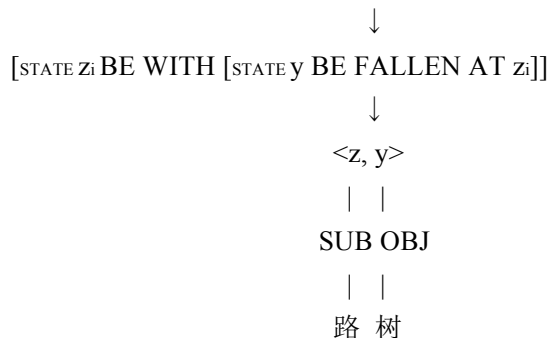
“杀”(殺す)も(37)の LCS を持つ使役状態変化他動詞なので, この LCS からは(38)の存現文を作ることはできない。

一方, 英語と同じく出現や消失を表す非対格自動詞は存現文でも自由に現れる⁴。まず, 出現の意味を表す非対格自動詞について考えてみることにする(39=3a)。

(39) 路上 倒 着 一棵 树。
 道上 倒れる ASP 一-CL 木
 ‘道の上には木が一本倒れている。’

(39)は(40)のメカニズムから説明できる。

(40) [EVENT y BECOME [STATE y BE FALLEN AT z]]



(y=theme, z=location)

(40)の一つ目の LCS は“倒”(倒れる)が何か(y)が変化してその結果ある場所(z)に倒れるという意味を表している。ここでも重要なのは LCS に場所(z)を変項にとる AT 述語が含まれていることである。他動詞と非能格自動詞の場合と同じく, 存在スキーマから所有スキーマへの書き換え規則により AT がとる場所項(z)に焦点が当てられると(下線部), 2つ目の LCS が形成される。この LCS から場所が対象に先行する項構造<z, y>が形成されると, 場所(z)が主語に対象(y)が目的語に具現される(39)の文が出来上がる。さらに, スキーマの書き換えにより, 一つ目の LCS にある BECOME 述語が存現文の LCS ではなくなるので, (5a)で示したように, 行為連鎖上の変化を修飾する副詞句“慢慢地”(ゆっくりと)と相容

れないことになる。

消失の意味を表す非対格自動詞も基本的には(40)と同じメカニズムが働いている。去るという消失の意味を表す動詞“走”(去る)が現れている(41)の存現文は(42)から説明できる。なお、“走”(去る)には移動の意味が含まれている。すなわち、去った着点が動詞の意味構造に含まれていると考えられる。この意味は(42)のLCSで記述できる。

(41) 班 里 走 了 一 名 同 学。 任 (2005:26)

クラス 中 去る ASP 一-CL クラスメイト

‘クラスの中からクラスメイトが一人去った。’

(42) [EVENT y BECOME [STATE y NOT BE AT z] & [STATE y TO z]]

↓

[STATE z_i BE WITH [STATE y NOT BE AT z_i]]

↓

<z, y>

| |

SUB OBJ

| |

班 同学

(y=theme, z=location)

陈 (1957)や任 (2007)でも議論されているように、出現は存在の始まりであり消失は存在の終結であるので、広義的に存現文はすべて存在を表すことになる。この考えを踏襲すると、存在の終結を表す消失のLCSは、(42)の一つ目のLCSの下線部、すなわち、対象(y)がある場所(z)に存在しなくなるという意味構造で記述することができる。さらに、“走”(去る)には(AからBに去る)移動の意味があるので、[STATE y TO z]のように着点(z)を項にとるTO述語もLCSに含まれることになる(なお、この着点LCSがハイライトされないのは、すぐ後で見ると存現文では純粋な着点表現は現れないからである)。ここでもやはりAT述語があるので、場所(z)に焦点が当てられると、存在スキーマから所有スキーマへの書き換え規則が適用され、2つ目のLCSが形成される。その結果、場所が対象よりも高い位置になるので、場所項が主語に対象項が目的語に具現される。

李 (1986)などで出現・消失を表す存現文の場所句は動作の起点や着点を表すとされているが、例(41)の場所句“班里”(クラスの中)は動作の起点として機能していない。例(41)の“班里”(クラスの中)はクラスメイトが去っている場所を表すのではなく、クラスメイトが去った状態を表すからである。さらに、存現文の場所句が着点として機能していないことは次の例から分かる。通常、動詞“到”(着く)は着点を表すが(43a), (43b)のように対応する存現文を作ることはできない。

(43) a. 火车 到 了 车站。

列車 着く ASP 駅

‘列車が駅に着いた。’

- b. *车站 到 了 火车。
 駅 着く ASP 列車
 Lit. ‘駅には列車が着いている。’

(43a)から分かるように, “到”(着く)は着点項をとる。この着点項をLCSで記述すると, [EVENT x MOVE [x TO z]]とすることができる。(43b)から分かるように, 着点を項にとる(43a)は存現文にできない。さらに, 移動様態動詞“走”(歩く)に“到”(着く)を付加して着点を指定することもできるが(44a), (43b)同様それに対応する存現文を作ることはできない(44b)。

- (44) a. 很多人 走 到 车站 了。
 たくさんの人 歩く 着く 駅 ASP
 Lit. ‘たくさんの人が駅に歩いて着いた。’
 b. *车站 里 走 到 着 很多人。
 駅 中 歩く 着く ASP たくさんの人
 Lit. ‘駅の中にはたくさんの人が歩いて着いている。’
 c. 车站 里 走 着 很多人。
 駅 中 歩く ASP たくさんの人
 ‘駅の中にはたくさんの人が歩いている。’

例(44)の対比から分かるように, 移動様態動詞“走”(歩く)に着点を指定する“到”(着く)がつくと存現文を作ることはできない。以上の事実から, 存現文に現れる場所句は動作の着点や起点を表すのではなく, ある状態が存在する場所を表すことが分かる。実際, (44b)で「たくさんの人が歩いて着いた場所」という着点の意味を場所句が担うことはできない。一方, “到”(着く)を取り除いた(44c)の存現文では, 場所句は着点を表さず, たくさんの人が歩いている状態を指定しているので, よい文となる。このことは存現文のLCSに[x TO z]のように着点を表す概念が指定されておらず, あくまである状態の存在を表す場所概念ATが指定されているという本分析を支持することになる。このような事実から(42)で着点を表すLCS[STATE y TO z]がハイライトされないことは明らかである。

出現・消失の意味を表す非対格自動詞は(45)のように自由に存現文に現れることができる。これは出現動詞であれば(40), 消失動詞であれば(42)のようにそれぞれ場所を変項にとるAT述語を含むLCSを持つからである。以下, (45a,b)は出現を表す“长”(生える)と“生”(発生する), (45c,d)は消失を表す“跑”(逃げる)と“下去”(降りる)の存現文である。

- (45) a. 地 上 长 着 一棵 树。
 地面 上 生える ASP 一-CL 木
 ‘地面には木が一本生えている。’
 b. 腿 上 生 了 一个 疮。
 脚 上 発生する ASP 一-CL 傷
 ‘脚の上には傷がひとつ出来ている。’
 c. 我的家 里 跑 了 一只 鸟。

私の家 中 逃げる ASP 一-CL 鳥

Lit. ‘私の家の中から鳥が一匹逃げている。’

d. 火车 上 下去 了 很多人。

列車 上 降りる ASP たくさんの人

‘列車からたくさんの人が降りている。’

さらに，“死”（死ぬ）なども存現文に現れる。中国語の“死”（死ぬ）は‘死！’（死ぬ）のように命令形にすると不自然になるので（願望の意味が強い）、非対格自動詞とすることができる。“死”（死ぬ）は誰かが(y)ある場所(z)に死んだ状態で存在するという(46a)のLCSで記述することができる。そうすると、(40)と同じメカニズムが働くので、(46b)の存現文を作ることができる（LCSの転換規則は(40)と同じなので、ここでは省略する）。

(46) a. “死” : [EVENT y BECOME [STATE y BE NOT ALIVE AT z]]

b. 村 里 死 了 一个 老太太。

村 中 死ぬ ASP 一-CL おばあさん

Lit. ‘村の中にはひとりのおばあさんが死んでいる。’

“死”（死ぬ）を非対格自動詞ではなく、単に死んだ状態である場所に存在しているという存在動詞と見なすことも可能だが、3.4.3節で見るように存在動詞も存現文に現れることができる。いずれにしても、(11)のLCS転換規則は“死”（死ぬ）にも適用されるということである。

これまで議論してきたことから存現文に現れることのできる動詞に関して次の一般化を行うことができる。

(47) 場所を変項にとるAT述語を語彙概念構造に含む動詞のみ存現文に現れる。

ここで、場所を変項にとるAT述語がある動詞とは、(12)で分類した動詞クラスのうち(12a)を指している。(12)でも議論したように、動詞のLCSに場所を項にとるAT述語があるかないかは、動詞の意味分類（作成動詞、位置変化動詞、出現・消失動詞など）を見ることで判明する。すなわち、ある動詞の属する動詞クラスを見ることによりそれが存現文に現れることができるかどうか(47)から予測できるのである。

以上、本節では存現文で必須の要素であるアスペクト助詞に着目した上で、語彙概念構造による語彙的分析を提案し、アスペクト助詞が動詞の元のLCSにある存在スキーマから所有スキーマへの書き換えを行うために、元の動詞のLCSから予測されない「場所+動詞+対象」という存現文の語順が生まれるという提案を行った。また、存現文が持つ存在の意味は書き換えられた所有のLCSにより、所有から存在への推論規則によって導くことができることを示した。次節では、存在スキーマから所有スキーマに書き換えられるという語彙的分析の根拠を示していく。

3.4. LCS 転換規則の根拠

3.4.1. 語彙的操作

存現文では、存在のLCSから所有のLCSへの書き換えが行われるという前節の分析の根拠として、本節では、語彙的分析をとる根拠を提示しておく。中国語は英語と異なり、通常「前置詞＋場所句」を主語位置に出すことはできない。

- (48) a. *在 路 上 倒 着 一 棵 树。
 で 道 上 倒れる ASP 一-CL 木
 ‘道の上には木が一本倒れている。’
 b. *在 前 面 走 着 一 对 夫 妻。
 で 前 歩く ASP 一-CL 夫婦
 ‘前には一組の夫婦が歩いている。’
 c. *在 石 头 上 刻 着 一 个 字。
 で 石 上 彫る ASP 一-CL 文字
 ‘石の上には文字がひとつ彫ってある。’

例(48)から分かるように、非対格自動詞(48a), 非能格自動詞(48b), そして他動詞(48c)のいずれにおいても前置詞“在”(で)を伴って場所句を主語位置に具現することはできない。このことは、中国語が単に対象と場所を表面上倒置させたのではないことを表している。したがって、語彙概念構造の文法レベルからの分析が必要であることを示唆している⁵。なお、この点ではPan (1996)もアスペクト助詞(“着”)に着目し、(他)動詞の項構造から動作主を取り去るという語彙的分析を提案しているが、Pan (1996)の分析では例(5)で見たように、他動詞、非能格自動詞そして非対格自動詞にかかわらず、行為連鎖上における状態以外の部分を修飾できないという一貫した事実を説明できない。これに対して、存在スキーマから所有スキーマへの書き換え規則による本論の分析では、行為連鎖上における状態以外の部分は存現文のLCSでは取り除かれているので、(5)のようにこれらを修飾する副詞と相容れない事実を説明することができる。

3.4.2. アスペクト

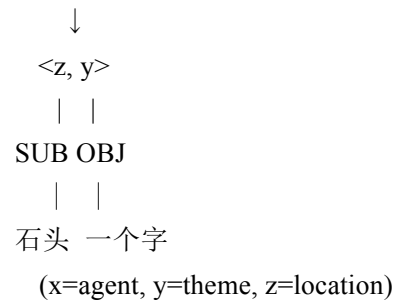
存現文で存在LCSから所有LCSへのLCSの転換規則が働いていることは時間副詞との共起制限からも分かる。便宜上、“刻”(彫る)のLCSを(50)に再掲する。

- (49) a. 张三 在 石 头 上 花了一个小时 刻 了 一 个 字。
 张三 在 石 上 一時間で 彫る ASP 一-CL 文字
 ‘張三は一時間で石の上で文字をひとつ彫った。’
 b. *石 头 上 花了一个小时 刻 了 一 个 字。
 石 上 一時間で 彫る ASP 一-CL 文字
 Lit. ‘石の上には一時間で文字が彫ってある。’

(50)=(15)) [EVENT [EVENT X DO] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE CARVED AT z]]]

↓

[STATE zi BE WITH [STATE y BE CARVED AT zi]]



“刻”（彫る）は動作主（张三）、対象（一个字）そして場所（石头上）を項にとると、(50)の一つ目の LCS を形成することになるので、(49a)の語順として具現される。ここで重要なのは(50)の一つ目の LCS が達成を表していることである。通常、達成動詞は完結性があるとされているので、“花了一个小时”（一時間で）のような時間副詞と共起することができる(49a)。これに対して、LCS の書き換えが行なわれると、(50)の二つ目の LCS が全体として[STATE...]と指定されていることから分かるように、存現文の LCS は達成ではなく状態を表すことになる。一般に状態は“花了一个小时”（一時間で）のような時間副詞と共起できない。実際、(49b)の存現文では“花了一个小时”（一時間で）は現れない。これは LCS 転換規則により意味構造が達成から状態に書き換えられているからである。

(49)の時間副詞のふるまいは非対格自動詞でも同じことが観察される。非対格自動詞は到達の事象を表すとされているので、それ自体では完結性を持つ動詞である。本分析が正しいとすると、非対格自動詞の場合でも(49)と同様に完結を表す時間副詞と存現文は共起できないことが予測されるが、(51)に示すように、この予測はまさに正しい。

- (51) a. 一棵 树 花了一个小时 长 在 地上。
 一-CL 木 十年で 生える で 地面
 ‘一本の木が十年で地面に生えた。’
 b. *地 上 花了一个小时 长 着 一棵 树。
 地面 上 十年で 生える ASP 一-CL 木
 Lit. ‘地面には十年で木が一本生えている。’

このように、動詞のアスペクトに関するふるまいから語彙概念構造の書き換えがあるという本分析が経験的に支持されることが分かる。次節では本分析を経験的に支持するさらなる根拠を示していく。

3.4.3. 置換と状態性

存現文は存在の意味を表す構文である。中国語には存在の意味を表す代表的な動詞として“有”（所有の用法と併用）と“在”がある。通常、この二つの動詞はそれぞれ異なるフレームを持つとされており、(52a,b)がそれぞれの具体例である。

- (52) a. “有”（存在）のフレーム
 桌子 上 有 一本 书。

机 上 ある 一-CL 本
 ‘机の上には本が一冊ある。’

b. “在”のフレーム

书 在 桌子 上。
 本 ある 机 上
 ‘本が机の上にある。’

“有”と“在”はどちらも存在の意味を表すことができるが、“有”が「場所+動詞+対象」の語順をとるのに対して(52a)，“在”は「対象+動詞+場所」の語順をとる(52b)。このフレームの使い分けは“有”と“在”の動詞自体の特性であるので、それぞれ(53a,b)のような LCS で記述できる。

(53) a. “有”(存在・所有)の LCS

[STATE x/z HAVE y]

b. “在”(存在)の LCS

[STATE y BE AT z]

(x=possessor, y=theme, z=location)

“有”は存在に加えて所有の用法がある。所有用法の“有”は「人+“有”+もの」の語順をとる。たとえば、‘我有一本书(私は一冊の本を持っている)。’などがこれに当たる。このように“有”は存在の意味を表すかあるいは、所有の意味を表すかにおいて、それぞれ選択するフレームが異なる。このフレームの違いを LCS に反映させると(53a)のようになる。(53a)の x/z は x(possessor)あるいは z(location)のどちらかが選択されることを表している。“有”が所有を表す場合は誰か(x)が何か(y)を所有する(HAVE)という意味を表す[STATE x HAVE y]の LCS となる。そして、“有”が存在を表す場合の LCS は、[STATE z HAVE y] (場所(z)が何か(y)を所有する)とすることができる(存現文の所有 LCS [STATE zi BE WITH [STATE y BE ATzi]]との違いは以下の定性制約の議論を参照)。前節でも述べたように、所有と存在の間には推論規則が働いている(cf. Pinker 1989)。そうすると、“有”の存在の意味は[STATE z HAVE y]から「ある場所があるものを所有するということは、あるものがある場所に存在する」という推論によって得ることができる。一方、“在”には存在の用法しかないので、(53b)の何か(y)がある場所(z)に存在するという LCS となる。

ここで大事なことは、(53a,b)から得られるフレームの違いである。(53a)の LCS から存在を表す“有”では場所が対象よりも高い位置に生成されることが分かり、(53b)の LCS から存在を表す“在”は対象が場所よりも高い位置に生成されることが分かる。もし、本論の分析が正しいとすると、存現文に現れる「動詞+アスペクト助詞」は“有”とは交替可能だが、“在”とは交替できないことが予測される。なぜなら、存現文と“有”は同じ「場所+動詞+対象」というフレームを持つからである。(54)と(55)に示す通り、この予測はまさに正しい((55)のグロス(54)を参照)。

(54) a. 路 上 {倒 着 /有} 一 棵 树。

道 上 倒れる ASP ある 一-CL 木

‘道の上には木が一本倒れている/ある。’

b. 前面 {走 着 /有} 一对 夫妻。

前 歩く ASP ある 一-CL 夫婦

‘前には一組の夫婦が歩いている/いる。’

c. 石头 上 {刻 着 /有} 一个 字。

石 上 彫る ASP ある 一-CL 字

‘石の上には文字がひとつ彫ってある/ある。’

(55) a. *路上 {倒着/在} 一棵树。

b. *前面 {走着/在} 一对夫妻。

c. *石头上 {刻着/在} 一个字。

この事実はまさにアスペクト助詞によって動詞の意味構造が書き換えられるという本論の分析の妥当性を支持するものと考えられる。LCS の書き換えがなければ、どちらの存在動詞とも交替してよいはずだが、実際にはそうではない。LCS の書き換えが行われる前の概念構造では対象は場所よりも高い位置にあるので、“在” のフレームをとるが、書き換えが行われた後の概念構造では場所が対象よりも高い位置にあるので、“有” と同じフレームをとるわけである。

ここで、“有” と「動詞+アスペクト助詞」の存現文の違いを挙げておくと、一つは“有” にはアスペクト助詞が付かないことである。これはそもそも“有” が「場所+動詞+対象」のフレームを持つため(53a), LCS の転換規則によりわざわざ「場所+動詞+対象」の語順を出す必要性がないからである。

(56) a. *路上有着 一棵树。

b. *前面有着 一对夫妻。

c. *石头上有着 一个字。

もう一つは目的語名詞の定性制約(Definiteness Restriction) (cf. Milsark 1977)である。Huang (1987)でも議論されているように、“有” 存在文では目的語名詞に定名詞は現れないが、「動詞+アスペクト助詞」タイプの存現文では定名詞が現れることができる(ただし、現れることのできる定名詞にも制限が観察される。詳しくは注 6 を参照)⁶。

(57) a. 屋子 里 有 一个 人/ 很多 人。

部屋 中 ある 一-CL 人/ たくさん 人

‘部屋の中には人がひとり/たくさんいる。’

b. *屋子 里 有 李四/他/每个人。

部屋 中 ある 李四/彼/すべての人

Lit. ‘部屋の中には李四/彼/すべての人がいる。’

(58) a. 沙发 上 坐 着 一个 女性。

ソファ 上 座る ASP 一-CL 女性

- ‘ソファの上には女性が一人座っている。’
 b. 沙发 上 坐着 朴老师。
 ソファ 上 座る ASP 朴先生
 Lit. ‘ソファの上には朴先生が座っている。’

例(57)では、a や many に当たる不定名詞“一個人”(一人)や“很多人”(たくさんの人)は“有”構文に現れることができるが、proper name, pronoun そして every に当たる定名詞“李四”(李四)、“他”(彼)と“每个人”(すべての人)は現れることができないということで、“有”構文の目的語名詞に定性制約が見られることを示している。一方、(58)では、動詞+アスペクト助詞タイプの存現文の目的語名詞に不定名詞“一个女性”(ひとりの女性)が現れることに加えて(58a)、定名詞“朴老师”(朴先生)も現れることができるので(58b)、これは存現文の目的語名詞には定性制約がかからないことを示している。この定性制約に関するふまの違ひは“有”の LCS(53a)と存現文の [STATE z_i BE WITH [STATE y BE AT z_i]] から得られる。このことを示すために、日本語の「いる」の所有用法から考えてみることにする。Kishimoto (1996)や岸本 (2005)でも議論されているように、「いる」の所有文では目的語に定性制約が見られる。

- (59) a. *ジョンには、(その) {ほとんどの/すべての} 兄弟がいる。
 b. ジョンには、{たくさんの/何人かの/三人の} 兄弟がいる。

岸本 (2005:177)

「いる」が表す所有関係は[x HAVE y]のような LCS で記述することができる。(59b)では「ジョン」が x に「兄弟」が y に相当することになる。(59a,b)から分かるように、HAVE が選択する項(y)には定性制約が見られる。“有”の LCS もまた(53a)で示したように[x HAVE y]であるので、(59)と同様 y 項に定性制約が見られるのである。一方、存現文の [STATE z_i BE WITH [STATE y BE AT z_i]]にはこの HAVE 述語がない。BE WITH は意味的には所有を表しているが、存現文の対象(y)は HAVE ではなく BE が選択している項である。したがって、目的語名詞(y)に定性制約は見られないのである。なお、存在を表す BE 述語が選択する項(y)に定性制約がないことは(60)からも明らかである⁷。

- (60) a. 那个男人/ 全家 都 在 这里。
 あの男/ 家族全員 みな いる ここ
 ‘あの男/家族全員はここにいる。’
 b. あの男/すべての家族がここにいる。
 c. That man/every family member is here.

さらに、“有”所有文の[x HAVE y]と存現文の[STATE z_i BE WITH [STATE y BE AT z_i]]が異なることは HAVE と BE WITH がそれぞれとる x 項と z 項からも分かる。通常、HAVE がとる項 x は所有者(possessor)を表す。一方、(存現文の LCS が所有の意味であっても) BE WITH がとる項 z はインデックス i から分かるようにあくまで場所である。したがって、3.3.3 節

で議論したように、所有の意味であっても全体と部分の関係を表すことができる。要するに、HAVE は主語として所有者を項にとり、BE WITH は主語として場所を項にとるのである。このことから所有を表す[x HAVE y]と[STATE z_i BE WITH [STATE y BE AT z_i]]に異なる制限があることが分かる。

このように動詞＋アスペクト助詞タイプの存現文と“有”構文では目的語名詞に定性制約の違いがあること、主語名詞に選択制限があることが見られるが、ここで大事なのはどちらも「場所＋動詞＋対象」の語順をとるという点である。

(54)のように存在を表す“有”と置き換えることができるということは存現文が存在の意味を表すことを如実に物語っていると言える。存現文あるいは場所格倒置構文が存在の意味あるいは状態性を表すことは中国語に限られたことではなく、Nakajima (2001)でも議論されているように英語や日本語の観察でも同じことが主張されている。Nakajima (2001)では Locative Inversion に現れる動詞は結局のところ状態を表すとしている。日本語でも英語の Locative Inversion に当たる構文を作ることができ、(61)のような文がこれに当たる (cf. Yamamoto 1997; Nakajima 2001; 小野 2005; 于 2007) ⁸。

- (61) a. 道路には自転車が倒れている。
 b. この会社にはたくさんの人が働いている。
 c. 机の上にはコップが置かれている。

日本語でも中国語と同様、非対格自動詞(61a)、非能格自動詞(61b)、そして他動詞(61c)が場所格倒置構文に現れることができるが (小野 2005 では場所格構文と呼ばれている)、(61)でもやはり状態がハイライトされていることは(62)から明らかである。

- (62) a. *道路にはゆっくりと自転車が倒れている。
 b. *この会社にはあくせくとたくさんの人が働いている。
 c. *机の上にはゆっくりとコップが置かれている。

例(62)から分かるように、日本語も中国語と同様、行為連鎖における行為や変化の部分を修飾することはできない。このことは日本語の場所格倒置構文においても状態以外の部分は背景化されていることを示唆している。同じことは英語の Locative Inversion にも言える。Levin and Rappaport Hovav(1995)で議論されているように、Locative Inversion に現れる他動詞の受動形は by 句と共起しないことから状態の解釈を示すとされている(63)。また、第一章で見たように work などの非能格自動詞が生起できることもあるが、この場合でも状態性がハイライトされていることは willingly などの副詞と共起できないことから明らかである(64)。

- (63) a. ?? Among the guests of honor was seated my mother by my friend Rose.
 b. ?? In the rainforest can be found the reclusive lyrebird by a lucky hiker.

Bresnan (1994:78-79)

- (64) a. ?? Willingly on the third floor worked two young women.

b. ^{??} Willingly behind the wheel Lounged a man uniformed with distinct nautical flavour.

さらに、Levin and Rappaport Hovav (1995)で観察されている通り、同じ状態変化動詞であっても、その動詞が状態変化の意味を表すのかあるいは出現の意味を表すのかで Locative Inversion に生起できる可能性が変わる。Levin and Rappaport Hovav (1995)によると、動詞 open には状態変化の意味に加えて、“become visible” と同等の出現の意味を表すことができる。その場合、外的な要因による状態変化とは異なり、あるものがある場所に存在するようになるという意味を有することになり、Locative Inversion に現れることが可能となる。

(65) a. Underneath him OPENED a cavity with sides two hundred...

b. *On the top floor of the skyscraper BROKE many windows.

Levin and Rappaport Hovav (1995: 224)

例(65a)の open は外的な要因が加わり、彼の下にへこみが出来るという状態変化の意味を表しているのではなく、へこみが現れるという出現の意味を表している。一方、break などの状態変化動詞ではあくまで出来事が起こる場所としての意味しかなく、状態性に焦点が当てられないので、(65b)のように Locative Inversion では現れない(Levin and Rappaport Hovav 1995)。

このように日本語と英語の場所格倒置構文においてもやはり状態性に焦点が当てられていることが分かる。すなわち、存現文では状態性がハイライトされているという本論の分析は通言語的に見て共通した特徴であると言える。

3.5. 状態動詞

最後に状態を表す存在動詞のふるまいについて見ておくことにする。これまでの議論が正しいとすると、状態動詞が存現文で現れるときもアスペクト助詞が必須となり、場所に焦点が当てられ、LCS の転換規則によって「場所+動詞+対象」の語順が得られると予測されるが、まさにその通りとなる。まず、“住”（住む）を例にとって考えてみることにする。“住”（住む）は存在動詞なので、(66a)の LCS を持つと考えられ、(66b)の文を作ることができる。

(66) a. [STATE y BE AT z]

b. 很多 人 住 在 他的家。

たくさん 人 住む で 彼の家

‘たくさんの人が彼の家に住んでいる。’

(66)もまた存現文を作ることができ、その場合、例(67)が示す通りアスペクト助詞“着”は必須の要素となり、(67)から“着”を削除すると、たくさんの人が彼の家に住んでいるという意味にはならない。

(67) 他的家 住 *(着) 很多 人。

彼の家 住む ASP たくさん 人
 ‘彼の家にはたくさんの人が住んでいる。’

例(67)も LCS に場所を項にとる AT 述語を含む動詞なので(66a), (11)の LCS 転換規則を適用することにより(68)から派生できる。

(68) [STATE y BE AT z]

↓
 [STATE z_i BE WITH [STATE y BE AT z_i]]
 ↓
 <z, y>
 | |
 SUB OBJ
 | |
 他的家 很多人

(y=theme, z=location)

(68)でもやはり一つ目の LCS に場所を変項にとる AT 述語がある。これも(47)の一般化と一致するので、これまで見てきた他動詞、非能格自動詞や非対格自動詞と同様、存在スキーマから所有スキーマへの転換規則が適用できる。ルール適用の結果、場所(z)が対象(y)に先行し、統語上 z が主語にそして y が目的語に具現され、(67)の存現文が作られる。

LCS に AT 述語が記載されている状態動詞は“住”(住む)以外にもあり、自由に存現文を作ることが可能である。

- (69) a. 床 上 躺 *(着) 一只 猫。
 ベッド 上 横たわる ASP 一-CL 猫
 ‘ベッドの上には猫が一匹横たわっている。’
 b. 口 里 含 *(着) 一个 糖。
 口 中 含む ASP 一-CL 飴
 ‘口の中には飴がひとつ含んである。’
 c. 前面 站 *(着) 一个 人。
 前 立つ ASP 一-CL 人
 ‘前には人がひとり立っている。’
 d. 他的心 里 存在 *(着) 很多 問題。
 彼の心 中 ある ASP たくさん 問題
 ‘彼の心にはたくさんの問題が(抱えて)ある。’

例(69)から分かるように、アスペクト助詞“着”を省略できないことから、(69)もこれまで見てきた存現文と同等に扱うことができる。ただし、3.4.2 節で議論したように、(69d)の“存在”(ある)と類似した存在を表す動詞“在”(ある)は「対象+動詞+場所」の語順のみをとり、「場所+動詞+対象」の語順はとれない。

- (70) a. 一本 书 在 桌子 上。
 一-CL 本 ある 机 上
 ‘一冊の本が机の上にある。’
 b. *桌子上 在 (着) 一本 书。
 机 上 ある ASP 一-CL 本
 Lit. ‘机の上には本が一冊ある。’

(70b)から分かるように、存在動詞“在”（ある）はアスペクト助詞“着”を伴っていても存現文を作ることができない。これは、先に述べたように中国語で“在”（ある）は「対象＋動詞＋場所」の語順しかとれないという、“在”に特有の語彙的な制限があるため例外的なふるまいをする。しかし、一方で“存在”（ある）には“在”（ある）のような語順に関する制限がなく、ほぼ同じ意味である(69d)の存在動詞“存在”は存現文に現れることができる(71a)。

- (71) a. 他的心 里 存在 着 很多 問題。
 彼の心 中 ある ASP たくさん 問題
 ‘彼の心にはたくさん問題が（抱えて）ある。’
 b. 很多 問題 存在 他的心 里。
 たくさん 問題 ある 彼の心 中
 ‘たくさん問題が彼の心の中に（抱えて）ある。’

“存在”（ある）は(71b)のようにアスペクト助詞を伴わないで「対象＋動詞＋場所」の語順をとることが可能である。このことは、“在”（ある）とほぼ同じ意味を“存在”（ある）が表すにもかかわらず、存在スキーマから所有スキーマへの書き換え規則を適用することができることを示している。状態動詞である“存在”（ある）の LCS には場所を項にとる AT 述語が記載されていると考えられるので、存現文にできるということは予測される。対照的に、Pan (1996)の分析では(4)で示したように *zhe operation* が適用されるのは[-stative]の文に限られるので、[+stative]の事象を表す状態動詞でも存現文を作ることができることを説明できないということは前に述べた通りである。

同じ状態動詞であっても LCS に AT 述語のないものはやはり存現文に現れることができない。たとえば、“愛”（愛する）や“知道”（知る）がこれに当たる。

- (72) a. *那里 爱 着 一个 女性。
 あそこ 愛する ASP 一-CL 女性
 Lit. ‘あそこにひとりの女性が愛されている。’
 b. *他的脑子里 知道 着 这个 问题的答案。
 彼の脳 中 知る ASP この-CL 問題の答え
 Lit. ‘彼の脳の中にはこの問題の答えが知っている。’

これらの LCS は(73)のように記述できる。

誰かを愛することや何かを知することは、誰かがある人を愛することを経験すること、そして何かを知ることを経験することとすることができるので、(72a,b)の LCS は(73)のように記述できる。この LCS には場所を項にとる AT 述語がないので、(72)の存現文を作ることができないのである。

以上、本節では 3.3 節で提案した存在スキーマから所有スキーマへの書き換えによる本分析の妥当性をアスペクトのふるまい、動詞“有”(ある)との交替、日本語や英語でも同じく状態性に焦点が当たっていることにより確かめられると論じた。さらには、状態を表す存在動詞においても他動詞、非能格自動詞そして非対格自動詞と同様のメカニズムが働いていることを示した。

3.6. まとめ

本章では、中国語非動作主卓越構文のうちの存現文に現れる動詞が、なぜそれ本来が持つ項構造に反して、対象項と場所項が倒置された状態で具現されるのかについて考察した。本論では、存現文が「場所+動詞+対象」の語順をとるのは、存現文に共起するアスペクト助詞により、動詞本来の語彙概念構造に含まれる存在スキーマから所有スキーマへ書き換えがあるからであるという分析を提案した。この分析では、場所項が対象項よりも階層上高い位置に現れる項構造<場所, 対象>が作られることになり、場所項が主語に対象項が目的語に具現化される存現文の語順しか許されなくなる。さらに、本分析は存現文の語順だけでなく、存現文が表す「ある場所にあるものが存在する」という存在の意味も導くことができることを示した。より具体的には、存現文が表す存在の意味は、所有から存在への推論規則によって得られると論じた。本論では、存現文に現れる動詞は、「語彙概念構造に場所を変項にとる AT 述語が含まれる動詞に限られる」という一般化を提示し、この一般化が他動詞だけでなく、非能格自動詞、非対格自動詞、さらには状態動詞にも当てはまることを示した。本分析を用いると、存現文が他動詞、非能格自動詞そして非対格自動詞において、一貫して動詞の行為連鎖上の行為と変化の部分を修飾する副詞句と共起できないという事実を無理なく説明できるようになる。これに対して、Pan (1996)の分析ではこれらの事実はいまだ説明できない。さらに、Pan (1996)の分析は[-stative]の事象に限られるので、[+stative]である状態動詞に他動詞、非能格自動詞そして非対格自動詞と同じメカニズムが働いていることを説明できない。動詞本来の語彙概念構造に含まれる存在の LCS から所有の LCS に書き換えられるという本分析の妥当性は、時間副詞のアスペクトテスト、存在動詞“有”との交替、通言語的に場所格倒置構文では状態性に焦点があることなどの経験的事実から確かめることができる。

注

1. Pan (1996)論文から動作主が消されると文の事象が状態になるというニュアンスは読み取れるが、なぜそうなるかは不明である。
2. 先行研究でも議論されているように、存現文で交替可能なアスペクト助詞“着”と“了”はどちらも状態を表している。特に、通常完了・完成のアスペクトを表すとされる“了”が完了を表さないことは、完了点を指定する副詞“刚才”（さきほど）と共起できないことから明らかである。
(i) *石头上 刚才 刻了 一个字。
石 上 さきほど 彫る ASP 一-CL 文字
Lit. ‘石の上にはさきほど文字がひとつ彫られている。’
3. Pan (1996)ではアスペクト助詞“了”は動作主を残すことが可能であると述べられているが、話者によって判断の差がある。動作主が残っているように見える場合でもやはり行為連鎖上の行為の部分修飾することはできない。
(i) 桌子上 John 放了一本书。 Pan (1996:410)
(ii) *桌子上 John 慢慢地放了一本书。
(i)はPan (1996)の判断であるが、この判断を受け入れたとしても(ii)のように行為を修飾する副詞句“慢慢地”（ゆっくりと）とは共起できないことから、(i)における John は動作主でないことが分かる。すなわち、アスペクト助詞によって動作主の出現可能性が変わるとは考えにくいのである。
4. 中国語学では存現文を細分化して“存在句”（存在句）と“隐現句”（隐現句）に大別することがある。“存在句”（存在句）とは対象が存在している場合を、“隐現句”（隐現句）とは対象が消失したり出現したりする場合を指す。本論では単に存現文としておく。
5. ここで提案した語彙論的分析が正しいとすると、中国語には二つのタイプのアスペクト助詞があることができる。通常、アスペクト助詞は統語上の概念であると考えられている。そうすると、本分析のように語彙のレベルにアスペクト助詞が関係するという分析と相容れなくなるが、通常の文とは異なり存現文ではすべての動詞とアスペクト助詞が共起できるわけではない。このように共起制限があるということは、存現文で機能しているように語彙的に働くアスペクト助詞と通常の統語上のアスペクト助詞の二種類があると捉えてもよいと考えられる。ただし、これはあくまで本分析が正しいという前提に基づいた考えである。
6. 確かに、Huang (1987)で議論されているように、動詞＋アスペクト助詞タイプの存現文では定名詞が目的語に現れることができるが、すべての定名詞が現れることができるわけではない。たとえば、every に当たる冠詞は現れない。
(i) *沙发 上 坐着 每个学生。
ソファ 上 座る ASP すべての学生
Lit. ‘ソファにはあの学生/すべての学生が座っている。’
このように、存現文に現れることのできる定名詞には制限があると思われる。ここではなぜこのような制限があるかについては深く議論しないが、“有”構文に比べて定名詞が現れる制限が緩いのは確かである。

7. もちろん、There 構文には目的語名詞に定性制約が見られる(Milsark 1977)。There 構文では対象項が虚辞 There よりも低い位置にあるので、[y BE AT z]の LCS でないことが示唆される。There 構文の意味構造は別問題であると考えられるので、ここでは深く議論しないことにする。
8. 日本語の場所格倒置構文でもアスペクトを表す「ている」（あるいは「いる」）が必須の要素となっている。
- (i) 道路には自転車が*倒れる/倒れている。
 - (ii) この会社にはたくさんの人が*働く/働いている。
 - (iii) 机の上にはコップが*置かれる/置かれている。
- したがって、日本語の場所格倒置構文でも中国語と同じメカニズムが機能しているとすることができるが、本論ではこれ以上深く議論しないことにする。

第四章

双数量詞構文

4.1. はじめに

第二章では、中国語の結果複合動詞構文で動作主が目的語に具現化されることがあることを見たが、結果複合動詞構文に加えて、中国語で動作主が目的語に現れると思える非動作主卓越構文にはもう一つある。(1a)のような文がこれに相当する。

(1) a. 一锅 饭 吃 十个人。

一-CL ご飯 食べる 十-CL 人

‘ひと鍋のご飯で十人の人間が食べることができる。’

任 (2005: 15) (グロスと訳は筆者による)

b. 十个人 吃 一锅 饭。

十-CL 人 食べる 一-CL ご飯

‘十人の人間がひと鍋のご飯を食べる。’

“吃”（食べる）は通常、動作主（食べる人）と対象（食べるもの）を項にとり、動作主（“十个人”）は主語に、対象（“飯”）は目的語に具現化され、(1b)の文が作られる。ところが、同じ“吃”（食べる）でも(1a)では食べる行為をする人“十个人”（十人）は主語ではなく、目的語として現れている。(1a)のような文は中国語学で“供用句”と呼ばれる。この構文もまた動作主であれば主語に具現化されるという一般的な見解に反するような構文になっている。

(1a)のような文が存在することは、すでに李・范 (1960)で議論されており、中国語特有の構文であると論じられている。先行研究によって、この構文には次のような二つの特徴があることが明らかにされている (cf. 任 2005)。まず、(1a)の主語名詞と目的語名詞は数量詞を伴って現れることが指摘されている。このことは(1a)から数量詞を取り除くと非文となることから分かる。

(2) a. *饭 吃 十个人。

ご飯 食べる 十-CL 人

Lit. ‘ご飯で十人の人間が食べることができる。’

b. *一锅 饭 吃 人。

一-CL ご飯 食べる 人

Lit. ‘ひと鍋のご飯で人が食べることができる。’

(2a)では主語名詞句、(2b)では目的語名詞句がそれぞれ数量詞を伴わない裸名詞句として現れているが、どちらも容認されない。さらに、数が“十个人”（十人）や“十口人”（十人）のような数量詞表現で明示される必要がある。

- (3) a. 一锅 饭 吃 *他们/全家。
 一-CL ご飯 食べる 彼ら/家族全員
 Lit. ‘ひと鍋のご飯で彼ら/家族全員食べることができる。’
- b. 一锅 饭 吃 他们 十个人/全家 十口 人。
 一-CL ご飯 食べる 彼ら 十-CL 人/家族全員 十-CL 人
 ‘ひと鍋のご飯で彼ら十人/家族全員十人が食べることができる。’

(3a)の“他们”(彼ら)と“全家”(家族全員)は複数を表すが、数を指定しているわけではないので容認されない。このように、“十个人”(十人)や“十口人”(十人)のような数量詞名詞句が(1a)のように主語、目的語ともに必須要素であることから、以降、当該構文を「双数量詞構文」と呼ぶ。

双数量詞構文の主語名詞句と目的語名詞句の間には数量対比の意味関係があることが指摘されている(cf. 任 2005)。たとえば、(1a)では、主語“一锅饭”(ひと鍋のご飯)と目的語“十个人”(十人)の間には、対比関係があり、ひと鍋のご飯あたり十人の人間が食べることができる(量である)という意味を表す。このように、双数量詞構文はその基本的な特徴として、数量詞名詞句を必須要素として伴い、主語名詞句は目的語名詞句が表す行為に対して十分な量・程度であるという意味を表す。

本章は、双数量詞構文において、動作主と対象が倒置された形で具現化されるのはなぜかということ明らかにする。本論では、(1a)の語順が可能となるのは、双数量詞構文に現れる動詞が明示的には現れていないものの実質的には数量対比関係を表す動詞“够”(足りる)と複合動詞を形成するからであることを示す。また、(1a)は対象“饭”(ご飯)が主語に、動作主“十个人”(十人)が目的語に具現化されるパターンしか許されないが、この事実も本論で提案する分析から捉えられることを示す。さらに、一見、双数量詞構文に似ている“看”(診る)の用法についても検討し、実際には双数量詞構文とは別の現象であることを示す。しかしながら、“看”(診る)の項の文法関係もまた双数量詞構文と同様、見かけ上は現れない動詞が複合されていると考えることで、説明できることを示す。

本章は議論を以下のように進める。まず、4.2 節では、先行研究の問題点を指摘する。4.3 節では、(1a)が SVO 語順をなしていることを確かめた上で、語彙概念構造(LCS)による分析を提案する。より具体的には、双数量詞構文の概念構造は、動詞本来の LCS と“够”(足りる)に由来する数量対比関係の LCS とで合成される意味構造を形成することを示す。この意味構造により先行研究では捉えられない事実を説明することができる。4.4 節はまとめである。

4.2. 先行研究の問題点

任(2005)は(1a)以外でも双数量詞構文で(4)のような動詞が現れることを示し、どの文も「与える」という意味があることで共通していると述べている。(4a)はひと壺の水で三人の人間が飲むことのできる量を与えていること、(4b)は一枚の布団で三四人の人間が寝るスペースを与えていること、(4c)はひとつの家で六人の人間が住むことのできる空間を与えていること、そして(4d)はひとつのベッドで二人の子供が寝ることのできるスペースを与えていることを表している。

- (4) a. 一壺 水 喝 三个 人。
 一-CL 水 飲む 三-CL 人
 ‘ひと壺の水で三人の人間が飲むことができる。’
- b. 一条 被子 盖 三四个 人。
 一-CL 布団 被る 三四-CL 人
 ‘一枚の布団で三四人の人間が被ることができる。’
- c. 一间 房子 住 六个 人。
 一-CL 家 住む 六-CL 人
 ‘一つの家で六人の人間が住むことができる。’
- d. 一张 床 睡 两个 孩子。
 一-CL ベッド 寝る 二-CL こども
 ‘一台のベッドで二人のこどもが寝ることができる。’

任 (2005:15) (グロスと訳は筆者による)

任(2005)は双数量詞構文に「与える」という意味が含まれている根拠として、当該構文が中国語で与えるという意味を表す動詞“给”とパラフレーズできることを示している。

- (5) a. 一间 房子 给 六个 人 住。
 一-CL 家 与える 六-CL 人 住む
 ‘一つの家で六人の人間が住むことができる。’
- b. 一条 被子 给 三四个 人 盖。
 一-CL 布団 与える 三四-CL 人 被る
 ‘一枚の布団で三四人の人間が被ることができる。’
- c. 一张 床 给 两个 孩子 睡。
 一-CL ベッド 与える 二-CL こども 寝る
 ‘一台のベッドで二人のこどもが寝ることができる。’
- d. 一壺 水 给 三个 人 喝。
 一-CL 水 与える 三-CL 人 飲む
 ‘ひと壺の水で三人の人間が飲むことができる。’

任 (2005:22) (グロスと訳は筆者による)

なお、任(2005)の分析は意味の記述に限られる（そのため、そもそもなぜこの構文の語順が(1a)のようになるのかという問題を解決できない）。これに対して、Her (2009)では、双数量詞構文に含まれる数量対比の意味関係を踏まえた上で、双数量詞構文の語順を LFG の枠組みから説明を試みている。(6)が“吃(chi)”（食べる）を代表例とした双数量詞構文を説明するための具体的な提案となる。

- (6) chi <~~x~~-z y>
 IC: [+o] [-r]
 DC: [+r]

	OBJ θ	S/O
UMP:	OBJ θ	S

Her (2009:29)

(6)の項構造<~~x~~-z, y>は, “吃(chi)” (食べる) が動作主(x)と対象(y)を項としてとることを示しており, さらに, x 項 (動作主) には新しい項として「程度(extent)」という意味役割を表す z 項が付加されている。Her (2009)によれば, この z 項の付加により, 動作主 x の抑制(~~x~~)が行なわれるため, “吃” (食べる) の項構造から統語構造へとリンクされる項は z と y に絞られる。これは, 抑制された項は項のリンキングに関与しないからである (第一章参照)。第一章でも議論したように, Her (2009)は(7)の Huang (1993)の意味役割の階層性を踏襲している。

(7) ag>ben>go/exp>inst>pt/th>loc/ext

(7)の意味役割の階層性では, “ext” (程度) は階層性の一番低い位置にある。この階層性に従うと, (6)の項構造<~~x~~-z, y>からは y (対象) が主語に, 抑制された動作主 x を含む z(ext) が目的語に具現化される(1a)の語順がしか許されないことになる。しかし, Her (2009)の分析では捉えることができない事実がいくつかある。それは以下のようなものである。まず, 例(8a)から分かるように, 双数量詞構文は進行形にできない。さらに, (8b)のように, 副詞“刚才” (さきほど) と共起することもできない。

- (8) a. *一锅 饭 在 吃 十个 人。
 一-CL ご飯 ASP 食べる 十-CL 人
 Lit. ‘ひと鍋のご飯で十人の人間が食べている。’
 b. *一锅 饭 刚才 吃 了 十个 人。
 一-CL ご飯 さきほど 食べる ASP 十-CL 人
 Lit. ‘ひと鍋のご飯で十人の人間がさきほど食べた。’

もちろん, “吃” (食べる) は活動動詞であるので, (1b)の通常文であればこのようなふるまいは観察されない。(9)に示す通り, (1b)の通常の構文では進行形にすることができ(9a), さらに副詞“刚才” (さきほど) と共起することもできる(9b)。

- (9) a. 十个 人 在 吃 一锅 饭。
 十-CL 人 ASP 食べる 一-CL ご飯
 ‘十人の人間がひと鍋のご飯を食べている。’
 b. 十个 人 刚才 吃 了 一锅 饭。
 十-CL 人 さきほど 食べる ASP 一-CL ご飯
 ‘十人の人間がさきほどひと鍋のご飯を食べた。’

Her (2009)のメカニズムでは、動作主(x)に程度(z)を付加することで、“吃”（食べる）の項構造内の意味役割の階層性が逆転するだけなので、なぜ項の逆転が起きると、(8)と(9)の差が生まれるのかということをつまえることはできない。これに対して、本章で提案する語彙概念構造による分析では、(8)を自然に説明できる。次節では、具体的な分析を提案する。

4.3 分析

4.3.1. 語順

具体的な提案に入る前に、まず(1a)のそれぞれの名詞句の持つ文法関係について確かめておくことにする。第二章と第三章でも見たように、中国語の主語テストには再帰代名詞束縛や所有者関係節化がある(cf. Tan 1991; Huang et al. 2009)。まず、再帰代名詞“自己”（自分）のふるまいから(1a)では、動作主“十个人”（十人）が主語になっていないことが分かる。(1a)で“十个人”（十人）が倒置された主語として機能しているならば、再帰代名詞“自己”（自分）を先行詞にとれると予測されるが、(10a)に示すように、実際にはできないからである。これに対して、もちろん、(1b)の通常文では“十个人”（十人）は主語なので、(10b)に示す通り、“自己”（自分）を束縛することができる。

- (10) a. 一锅 饭 在自己_{*i}的家里 吃 十个 人_i。
 一-CL ご飯 自分の家で 食べる 十-CL 人
 Intended reading: ‘十人の人間が自分の家でひと鍋のご飯を食べることができる。’
 b. 十个 人_i 在自己_i的家里 吃 一锅 饭。
 十-CL 人 自分の家で 食べる 一-CL ご飯
 ‘十人の人間が自分の家でひと鍋のご飯を食べる。’

次に、所有者関係節化を見ると、例(11b)に示すように、動作主に当たる(11a)の所有者名詞句“那家的三个孩子”（あの家の三人のこども）を関係節化することはできない。第二章と第三章でも議論したように、この関係節化は主語に対してのみ適用できるため、動作主として解釈される(11a)の所有者名詞句“那家的三个孩子”（あの家の三人のこども）が主語として機能していないことになる。これに対して、(11c)に示すように、対象に当たる(11a)の所有者名詞句“张三的这一件衣服”（张三のこの服）を関係節化することはできる。このことは(11a)の所有者名詞句“张三的这一件衣服”（张三のこの服）が主語として機能していることを示している。（なお、(11c)は構文の複雑さゆえに話者によっては、少し容認度は落ちるが、非文法的な(11b)と比べるとその容認度は高い）。

- (11) a. 张三 的 这 一件 衣服 穿 那家 (的) 三个 孩子。
 张三 GEN この 一-CL 服 着る あの家 GEN 三-CL 人 こども
 ‘张三のこの服であの家の三人のこどもが着ることができる。’
 b. *[张三 的 这 一件 衣服 穿 ϕ_i 三个孩子 的] 那家_i
 张三 GEN この 一-CL 服 着る 三-CL 人 こども GEN あの家
 Lit. ‘张三のこの服で三人のこどもが着ることができるあの家。’
 c. [ϕ_i 这 一件 衣服 穿 那家 (的) 三个 孩子] 的 张三_i

この 一-CL 服 着る あの家 GEN 三-CL 人 こども GEN 張三
 ‘この服であの家の三人のこどもが着ることができる張三。’

(11b)と(11c)から双数量詞構文が SVO 語順をなしていることが分かる。そのため、例(11)から動作主“那家的三个孩子”(あの家の三人のこども)は目的語として具現化されていることが分かる。

以上の議論から双数量詞構文では動作主は主語に具現化されていないことが分かる。また、第二章と第三章でも議論したように、中国語が厳格な SVO 言語であることから双数量詞構文では動作主が主語ではなく目的語に具現化されていることが推察される。4.3.2 節では上記の事実を念頭に置いた上で、具体的な提案を提示する¹。

4.3.2. 提案

Her (2009)の分析とは異なり、本論では(1a)のような双数量詞構文の語順は語彙概念構造から説明されることを提案する。より具体的には、双数量詞構文で現れる動詞は、見かけ上は単独の動詞であるが、実質的には数量対比関係を表す動詞“够”(足りる)と合成して複合動詞を形成することを提案する。このことは、(1a)の双数量詞構文が“够”(足りる)や複合動詞“够吃”(足りる一食べる)とパラフレーズできることから分かる。このことを示すために、まず(12)の例から考えてみることにする。

(12) 一锅 饭 够 十个 人 吃。
 一-CL ご飯 足りる 十-CL 人 食べる
 ‘ひと鍋のご飯で十人の人間が食べることができる。’

(12)は双数量詞構文(1a)と同じ意味を表し、動詞“够”(足りる)は‘十个人吃’(十人が食べる)という文を補部にとっている。(12)の主語名詞句と目的語名詞句は(1a)と同じく数量詞を伴う必要がある。

(13) a. *飯 够 十个 人 吃。
 ご飯 足りる 十-CL 人 食べる
 Lit. ‘ご飯で十人の人間が食べることができる。’
 b. *一锅 饭 够 人 吃。
 一-CL ご飯 足りる 人 食べる
 Lit. ‘ひと鍋のご飯で人が食べることができる。’

(13)から分かるように、“一锅饭”(ひと鍋のご飯)と“十个人”(十人)から数量表現を取り除くと、許容されない文となる。また、(8)と同じく、(12)も進行形や副詞“刚才”(さきほど)と共起することができない。

(14) a. *一锅 饭 够 十个 人 在 吃。
 一-CL ご飯 足りる 十-CL 人 ASP 食べる

Lit. ‘ひと鍋のご飯で十人の人間が食べている。’

b. *一鍋 飯 刚刚 够 十个 人 吃。

一-CL ご飯 さきほど 足りる 十-CL 人 食べる

Lit. ‘ひと鍋のご飯でさきほど十人の人間が食べることができた。’

さらに、後に議論するように、(1a)の双数量詞構文と同じく、具体的な時間や場所を指定することもできない。

(15) a. *一鍋 飯 昨天 够 十个 人 吃。

一-CL ご飯 昨日 足りる 十-CL 人 食べる

Lit. ‘ひと鍋のご飯で昨日十人の人間が食べることができた。’

b. *一鍋 飯 在 食堂 够 十个 人 吃。

一-CL ご飯 で 食堂 足りる 十-CL 人 食べる

Lit. ‘ひと鍋のご飯で十人の人間が食堂で食べることができる。’

このように、(12)と(1a)は実質的に同じ意味を表し、同じ文法的制約が見られる。

なお、(12)では“够”（足りる）と“吃”（食べる）が離れた位置に現れているが、“够”（足りる）と“吃”（食べる）を合成して、“够吃”（食べるのに足りる）のような複合動詞を作ることでもある。

(16) a. 一鍋 飯 够吃 十个 人。

一-CL ご飯 足りる一食べる 十-CL 人

‘ひと鍋のご飯で十人の人間が食べることができる。’

b. *十个 人 够吃 一鍋 飯。

十-CL 人 足りる一食べる 一-CL ご飯

Lit. ‘十人の人間はひと鍋のご飯を食べるのに十分な人数である。’

例(16a)では“够吃”（足りる一食べる）が複合動詞を形成して、(1a)の双数量詞構文と同じ意味を表している。また、(16a)に対応する(16b)の通常文を作ることができないことは、(16a)と(1a)が同じく対象項が主語に現れる数量対比関係を表す構文であることを示している。さらに、(16a)は(17)に示す通り、進行形にできないこと、副詞“刚才”（さきほど）と共起しないこと、そして具体的な時間や場所を指定できないことという点においても、(1a)と同じ制約が見られる。

(17) a. *一鍋 飯 在 够吃 十个 人。

一-CL ご飯 ASP 足りる一食べる 十-CL 人

Lit. ‘ひと鍋のご飯で十人の人間が食べ足りている。’

b. *一鍋 飯 刚才 够吃 了 十个 人。

一-CL ご飯 さきほど 足りる一食べる ASP 十-CL 人

Lit. ‘ひと鍋のご飯でさきほど十人の人間が食べ足りた。’

- c. *一锅 饭 昨天 够吃 十个 人。
 一-CL ご飯 昨日 足りる一食べる 十-CL 人
 Lit. ‘ひと鍋のご飯で昨日十人の人間が食べ足りた。’
- d. *一锅 饭 在 食堂 够吃 十个 人。
 一-CL ご飯 で 食堂 足りる一食べる 十-CL 人
 Lit. ‘ひと鍋のご飯で十人の人間が食堂で食べ足りる。’

このように，“够”（足りる）を含む(12)と(16)は(1a)と同じ文法的ふるまいをする。このことから，(1a)の双数量詞構文では，“够”（足りる）という概念が含まれているものの，“够”（足りる）は表層上には現れていないと考えることができる。つまり，「ひと鍋のご飯は十人食べることができる」という数量対比関係の意味が，(12)では，動詞“够”（足りる）の述部として，‘十個人吃’（十人が食べる）で表され，(16)では，“够吃”（足りる一食べる）という複合動詞関係で表されているのに対して，(1a)では，動詞“吃”（食べる）のみで表されているのである。双数量詞構文は，見かけは単独の動詞が現れているが，実質的には数量対比関係を表すため，双数量詞構文と通常文では意味が異なる。特に，複合動詞“够吃”（足りる一食べる）と(1a)の双数量詞構文で同じふるまいをするということは，(1a)が実際には複合動詞“够吃”（足りる一食べる）を形成しており，表面上“够”（足りる）が省略されていると考えることができる。すなわち，双数量詞構文に含まれる数量対比関係の意味は，実質的に存在する“够”（足りる）に由来すると考えられるのである。

双数量詞構文に現れる動詞の特徴として，口語的あるいは日常よく使われる動詞が現れることが言われている（cf. 李・范 1960; 任 2005）。(18a)は双数量詞構文に現れることができる動詞，(18b)はできない動詞を表しており，(16)のように，“够”（足りる）と合成して複合動詞を作ることができるのは，(18a)に限られる。

- (18) a. “坐”（座る），“穿”（着る），“住”（住む），“喝”（飲む），“吃”（食べる），
 “睡”（寝る），“盖”（被る），“洗”（洗う），“卖”（売る）など
 b. “做”（作る），“缝”（縫う），“争”（争う），“烧”（煮炊きする），“倒”（注ぐ），“领”
 （受け取る），“借”（借りる），“得”（得る），“买”（買う）など
- (19) a. “够坐”（足りる一座る），“够穿”（足りる一着る），“够住”（足りる一住む），
 “够喝”（足りる一飲む），“够吃”（足りる一食べる），“够睡”（足りる一寝る），
 “够盖”（足りる一被る），“够洗”（足りる一洗う），“够卖”（足りる一売る）
 b. * “够做”（足りる一作る），* “够缝”（足りる一縫う），* “够争”（足りる一争う），
 * “够烧”（足りる一煮炊きする），* “够倒”（足りる一注ぐ），* “够领”（足りる一
 受け取る），* “够借”（足りる一借りる），* “够得”（足りる一得る），* “够买”
 （足りる一買う）

(19)は双数量詞構文に現れる動詞は“够”（足りる）と複合動詞を作ることができ，現れない動詞は“够”（足りる）と複合動詞を形成できないことを示している。このことは，例(20)と(21)からも分かる。

- (20) a. 这么 小 的 沙发 够坐 吗？
 この 小さい GEN ソファ 足りる一座る Q
 ‘こんな小さいソファで座るのに足りますか？’
- b. 60 平米 的 房子 够住 吗？
 60 平米 GEN 家 足りる一住む Q
 ‘60 平米の家で住むのに足りますか？’
- c. 这 一点儿 酒 不 够喝。
 この 少し 酒 NEG 足りる一飲む
 ‘こんな少しの酒では飲むのに足りない。’
- d. 这么 小 的 被子 不 够盖。
 この 小さい GEN ふとん NEG 足りる一被る
 ‘こんな小さなふとんでは被るのに（大きさが）足りない。’
- (21) a. *这么 小 的 锅 够做 吗？
 この 小さい GEN 鍋 足りる一作る Q
 Lit. ‘こんな小さい鍋で作るのに（スペースが）足りますか？’
- b. *这么 少 的 水 够倒 吗？
 この 少ない GEN 水 足りる一注ぐ Q
 Lit. ‘こんな少ない水で注ぐのに（量が）足りますか？’
- c. *30 平米 的 房子 不 够租。
 30 平米 GEN 家 NEG 足りる一貸す
 Lit. ‘30 平米の家では貸すのに（スペースが）足りない。’
- d. *一个 金牌 不 够得。
 一-CL 金メダル NEG 足りる一得る
 Lit. ‘一つの金メダルでは得るのに（量が）足りない。’

このように、双数量詞構文に現れる動詞が“够”（足りる）と合成して複合動詞を形成することができるという事実は、表面上には現れない“够”（足りる）が双数量詞構文に存在する根拠を示していることに他ならない。

このような見方をとると、(1a)の語順を説明することができるようになる。このことを示すために、まず(16)の“够吃”（足りる一食べる）の意味構造について考えてみることにする。第二章でも議論したように、複合動詞はそれぞれの動詞の LCS を合成することで作られる。“够吃”（足りる一食べる）の LCS を示す前に、まず“够”（足りる）の LCS について考えてみることにする。

(12)と(16)から分かるように、“够”（足りる）は動詞として使うことができるので、語彙概念構造を持つことができる。本章では、量・程度が充足するという意味を表す“够”（足りる）の意味述語として ENOUGH を仮定する。够”（足りる）の LCS は(22)のように記述することができる。

(22) “够”（足りる）

[PROPERTY y ENOUGH x [EVENT ...]]

(x=unspecified, y=theme)

(22)の ENOUGH は対象(y)が x が何かをするのに十分な量・程度であることを表している。例(12)から分かるように，“够”（足りる）は補部として事象をとっている。この事象自体には具体的な内容は指定されないで、[EVENT ...]のように事象が未指定された意味構造として表されている。なお，“够”（足りる）がとる項 y と x のうち、x の意味役割は未指定であり、この x は[EVENT ...]内の項と同定されることになる。また、ENOUGH という意味述語から(22)は、あるもの(y)の性質(Property)を表すことが分かる。

(22)に“吃”（食べる）の意味構造が合成されると，“够吃”（足りる一食べる）の意味構造が出来上がることになる。具体的には，“够吃”（足りる一食べる）の意味構造は、(23c)に示すような(22)の LCS に含まれる事象が未指定されている意味構造[EVENT ...]に“吃”（食べる）の LCS が埋め込まれる形で表すことができる。

(23) a. “够”（足りる）

[PROPERTY y ENOUGH x [EVENT ...]]

b. “吃”（食べる）

[[EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE CONSUMED]]]

c. “够吃”（足りる一食べる）

[PROPERTY y ENOUGH x [[EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE CONSUMED]]]]

→ $\langle y_{ij}, x_{m/n} \rangle, \langle x_{i/m}, y_{j/n} \rangle$

→ $\langle x/x, y/y \rangle$ or $\langle y/x, x/y \rangle$

d. $\ast \langle x/x, y/y \rangle$

e. $\ast \langle y/x, x/y \rangle$

f. $\langle x/x, y/y \rangle$

g. $\ast \langle y/x, x/y \rangle$

| |

| |

×

×

SUB OBJ

SUB OBJ

SUB OBJ

SUB OBJ

| |

| |

| |

| |

一锅饭 十个人

一锅饭 十个人

一锅饭 十个人

一锅饭 十个人

(x=agent, y=theme, x=unspecified, y=theme)

(23a)と(23b)はそれぞれ“够”（足りる）と消費動詞“吃”（食べる）の意味構造を表している（消費動詞の LCS については第三章 3.3.2 節も参照）。“吃”（食べる）が双数量詞構文で使われると、(23c)のように，“够”（足りる）と“吃”（食べる）が合成して複合動詞を形成し（以下、V1,V2 と呼ぶ）、(23c)の LCS が作られることになる。この LCS から一つ目の矢印で示されている項構造 $\langle y_{ij}, x_{m/n} \rangle, \langle x_{i/m}, y_{j/n} \rangle$ が形成される。前者は“够”（足りる）、後者は“吃”（食べる）の項構造である。例(16)から分かるように、複合動詞“够吃”（足りる一食べる）は二項述語なので、インデックス i, j, m, n により V1 と V2 の項が同定され、二つ目の矢印で示されているような二つの項構造が形成される。一つは、V1 の x 項（未指定）と V2 の x 項（動作主）、そして量・程度を表す V1 の y 項（対象）と V2 の y 項（対象）が同定された項構造 $\langle x/x, y/y \rangle$ である。もう一つは、量・程度を表す V1 の y 項（対象）と V2 の x 項（動作主）、そして V1 の x 項（未指定）と V2 の y 項（対象）が同定された項構造 $\langle y/x, x/y \rangle$ である。この二つの項構造から論理的に可能なリンクは(23d,e,f,g)のように四つある。そのうち、実際には(23f)のみが可能なリンクとなる。このパラダイム

は、(24)のリンキングルールによって説明することができる。

(24) 項 α が対象（内項）であるとき、かつ、そのときに限り、項 α は主語にリンクされる

(24)のルールは、対象である項が主語にリンクされていない場合と対象でない項が主語にリンクされている場合を排除することになる。(23d,e,f,g)のうち、(24)のルールを満たしているのは(23f)だけである。(23d,g)では動作主(x)が主語に、(23d,e,g)では対象(y か y のいずれか)が目的語に具現化されているので、(24)のルールに違反することになる。要するに、(23c)からは(23f)のリンキングパターンしか有り得ないので、対象が主語に動作主が目的語に具現化される語順が作られることになり、(16)が唯一の可能性となるわけである。

(24)のルールは(16)の前項動詞“够”(足りる)に動機づけられるものである。通常、動作主は事象文に現れ、性質(property)を表す文には現れない。“够”(足りる)の意味(構造)からも分かるように、数量対比関係の意味は出来事ではなく、性質(property)を表している。性質により叙述される項は対象であるため、事象文とは異なり、(24)のルールが規定されることになるのである。つまり、動作主が主語にリンクできなくなるのである。実際、動作主が主語に現れる(16b)は容認されない。

以上のメカニズムを踏まえた上で、再度(1a)の双数量詞構文の意味構造を考えてみることにする。前述したように、複合動詞“够吃”(足りる一食べる)と(1a)は同じ文法的ふるまいを見せ、どちらも数量対比関係の意味を表す。このことから、(1a)も(23)と同じメカニズムが働いていると考えることができる。ただし、双数量詞構文では“够”(足りる)は見かけ上は現れないので、(25c)のように“(够)吃”((足りる)一食べる)と記述しておく。

(25) a. “够”(足りる)

[PROPERTY y ENOUGH x [EVENT ...]]

b. “吃”(食べる)

[[EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE CONSUMED]]]

c. “(够)吃”((足りる)一食べる)

[PROPERTY y ENOUGH x [[EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE CONSUMED]]]]

→ $\langle y_{ij}, x_{m/n} \rangle, \langle x_{i/m}, y_{j/n} \rangle$

→ $\langle x/x, y/y \rangle$ or $\langle y/x, x/y \rangle$

d. $\ast \langle x/x, y/y \rangle$

e. $\ast \langle y/x, x/y \rangle$

f. $\langle x/x, y/y \rangle$

g. $\ast \langle y/x, x/y \rangle$

| |

| |

×

×

SUB OBJ

SUB OBJ

SUB OBJ

SUB OBJ

| |

| |

| |

| |

一锅饭 十个人

一锅饭 十个人

一锅饭 十个人

一锅饭 十个人

(x=eater, y=eatee, x=unspecified, y=enougee)

(25)は(23)と同じメカニズムで派生されるので、当然、対象が主語に動作主が目的語に具現化される語順が(1a)の双数量詞構文で可能な唯一の語順となる。このように、双数量詞構

文に現れる動詞は、実質的には、複合動詞“够吃”（足りる一食べる）を形成し、(1a)では“够”（足りる）が見かけ上現れていないと考えると、双数量詞構文の語順及び項の文法関係を説明することができるようになる。

実際、単一の動詞が表面上現れていても双数量詞構文で複合動詞が作り出されたとする(25)の分析の妥当性は、(26a)の文で程度副詞“足够”（十分に）が現れることができることから裏付けられる。もちろん、“足够”（十分に）は、(26a)に対応する通常文(26b)では共起できない。

- (26) a. 一锅 饭 足够 吃 十个人。
 一-CL ご飯 十分に 食べる 十-CL 人
 ‘ひと鍋のご飯で十分に十人の人間が食べることができる。’

- b. *十个 人 足够 吃 一锅 饭。
 十-CL 人 十分に 食べる 一-CL ご飯

Intended reading: ‘十人の人間はひと鍋のご飯を食べるのに十分である。’

(26a)の双数量詞構文では、ひと鍋のご飯で十人の人間が食べることができるという量を表すので、“足够”（十分に）を伴って、十分な量であるという意味を表すことができる。これに対して、(26b)の通常文は、単に十人の人間がひと鍋のご飯を食べるという事象を表すので、“足够”（十分に）を伴って、ひと鍋のご飯を食べるのに十人の人間が十分な量であるという意味を表すことにはならない。この“足够”（十分に）は、双数量詞構文で表面上現れないが実質的に存在する(25c)の意味述語 ENOUGH を修飾している。(26a,b)で意味が異なるということは、二つの構文が持つ意味構造が異なることを示している。(1a)の双数量詞構文は、動詞“吃”（食べる）のLCSだけではなく、“够”（足りる）の持つLCSと合成された(25c)のLCSを形成すると考えることができるのである。

(25c)の意味構造についてもう一つ大事なことは、数量対比関係の意味構造がハイライトされ、元の動詞の意味構造は背景化されるという点である。数量対比の意味がハイライトされていることは、(27)を見るとはっきりする。

- (27) a. *一锅 饭 慢慢地 吃 了 十个 人。
 一-CL ご飯 ゆっくりと 食べる ASP 十-CL 人
 ‘ひと鍋のご飯で十人の人間がゆっくりと食べることができた。’

- b. 十个 人 慢慢地 吃 了 一锅 饭。
 十-CL 人 ゆっくりと 食べる ASP 一-CL ご飯
 “十人の人間がゆっくりとひと鍋のご飯を食べた。”

(27b)とは異なり、双数量詞構文(27a)では、副詞“慢慢地”（ゆっくりと）と共起することができない。“慢慢地”（ゆっくりと）は動詞の行為（LCSではDOに当たる）の様態を修飾する副詞であるが、第三章でも見たように、この副詞は背景化されるLCSの意味述語を修飾することはできないのである（なお、Her (2009)の分析は動作主に程度という意味役割を付け加えるだけなので、(27a,b)の差を捉えることはできない）。

本論で提案する(25)の分析は先行研究では説明できない(8)で挙げた問題を以下のように説明することができる。(25b)からも分かるように, “吃”(食べる)本来の意味構造では, 誰かが何かを食べるという事象(event)が指定されている。一方, 合成された LCS 全体には事象の指定がない。前述したように, 意味述語 ENOUGH から, 合成された LCS は性質(property)を表す。そのために, (28)に示すように, 双数量詞構文では, 具体的な時間や場所を指定する表現とは共起できないのである。

- (28) a. *一锅 饭 昨天 吃 了 十个 人。
 一-CL ご飯 昨日 食べる ASP 十-CL 人
 ‘昨日, ひと鍋のご飯で十人の人間が食べることができた。’
 b. *一锅 饭 在 食堂 吃 了 十个 人。
 一-CL ご飯 で 食堂 食べる ASP 十-CL 人
 ‘食堂で, ひと鍋のご飯で十人の人間が食べることができた。’

これに対して, もちろん, (25b)のように, 誰かが何かを食べる行為を表す事象文は具体的な時間や場所表現と共起することができる。

- (29) a. 十个 人 昨天 吃 了 一锅 饭。
 十-CL 人 昨日 食べる ASP 一-CL ご飯
 ‘十人の人間が昨日ひと鍋のご飯を食べた。’
 b. 十个 人 在 食堂 吃 了 一锅 饭。
 十-CL 人 で 食堂 食べる ASP 一-CL ご飯
 ‘十人の人間が食堂でひと鍋のご飯を食べた。’

このように, 双数量詞構文の意味構造に性質(property)が指定されるために, 具体的な時間や場所を指定する表現は現れないのである。

(25c)に事象の指定がないことは(30)からも明らかである。(30)に示すように, 双数量詞構文は完結性を表す時間副詞“花一个小时”(一時間で)も非完結性を表す時間副詞“一个小时”(一時間)も許さない。もちろん, 対応する通常文ではどちらも現れることができる(31)。

- (30) a. *一锅 饭 花了一个小时 吃 了 十个 人。
 一-CL ご飯 一時間で 食べる ASP 十-CL 人
 Lit. ‘ひと鍋のご飯で十人の人間が一時間で食べることができた。’
 b. *一锅 饭 吃 了 一个小时 十个 人。
 一-CL ご飯 食べる ASP 一時間 十-CL 人
 Lit. ‘ひと鍋のご飯で十人の人間が一時間食べた。’
 (31) a. 十个 人 花了一个小时 吃 了 一锅 饭。
 十-CL 人 一時間で 食べる ASP 一-CL ご飯
 ‘十人の人間が一時間でひと鍋のご飯を食べ(終わっ)た。’
 b. 十个 人 吃 了 一个小时 一锅 饭。

十-CL 人 食べる ASP 一時間 一-CL ご飯
 ‘十人の人間が一時間ひと鍋のご飯を食べた。’

(31)の通常文とは異なり、双数量詞構文は性質(property)を表す文なので、(30)のように、ある行為が行われる時間を指定することはできないのである(cf. Vendler 1967)。

ここで例(8)に再び戻ると、(8a)の双数量詞構文で進行形が現れないのは、(25c)の LCS に事象が指定されていないからであると考えることができる。これは(32)のような例を見ると分かる。

- (32) a. *一鍋 飯 在 吃 十个 人。
 一-CL ご飯 ASP 食べる 十-CL 人
 Lit. ‘ひと鍋のご飯で十人の人間が食べている。’
 b. 十个 人 在 吃 一鍋 飯。
 十-CL 人 PROG 食べる 一-CL ご飯
 ‘十人の人間がひと鍋のご飯を食べている。’

(32b)で進行形ができるのは(25b)の LCS に事象(event)が指定されているからであり、(32a)で進行形ができないのは事象が指定されていないからである。このように、双数量詞構文で進行形が現れないことは、性質を表す(25c)の LCS に事象(event)が指定されていないことから自然に説明されることになる。もちろん、Her (2009)の分析ではこの事実を説明することはできない。

また、(25)の分析は(8b)の悪さも説明することができる。副詞“刚才”(さきほど)はある事象が起こった時点を指定する表現である。しかし、双数量詞構文では動詞本来の意味構造と ENOUGH が合成されることで、事象(event)が指定されない LCS が形成されることになり、(8b)のように、出来事のある時点を修飾する副詞“刚才”(さきほど)とは相容れなくなる。もちろん、Her (2009)の分析はこの事実も説明できない。

以上、双数量詞構文の動詞は見かけ上、単独で現れるが、隠された動詞“够”(足りる)と複合すると、数量対比関係を表す意味述語 ENOUGH が合成されて、双数量詞構文が作られることを提案した。本分析では、双数量詞構文で様態副詞が現れないこと、進行形にできないこと、副詞“刚才”(さきほど)が現れないことなどの事実を説明することができる。

4.3.3. 三項動詞とその目的語名詞の解釈

前節までの議論で明らかになったように、双数量詞構文には対象(y)が動作主(x)が動作するのに十分な量や空間を提供するという意味があり、このような意味が想定されやすい動詞は双数量詞構文に現れる (cf. 任 2005)。

- (33) a. 一瓶 酒 喝 三个 人。
 一-CL 酒 飲む 三-CL 人
 ‘ひと瓶の酒で三人飲むことができる。’

- b. 一张 沙发 坐 三四个 人。
 一-CL ソファ 座る 三四-CL 人
 ‘ひとつのソファで三四人座ることができる。’

(33a)はひと瓶のお酒で三人の人間が飲むのに十分な量であること, (33b)はひとつのソファで三四人の人間が座るのに十分な広さであることをそれぞれ表している。(33)のような二項動詞に加えて, (34)のような三項動詞も双数量詞構文に現れることができる。

- (34) a. 张三 卖 了 李四 一本书。
 張三 売る ASP 李四 一冊の本
 ‘張三は李四に一冊の本を売った。’
 b. 我 给 了 他 一本书。
 私 あげる ASP 彼 一冊の本
 ‘私は彼に一冊の本をあげた。’

(34)の動詞“卖”(売る)と“给”(あげる)はそれぞれ動作主(売る人/あげる人), 対象(売るもの/あげるもの)そして着点あるいは受益者(買う人/もらう人)を項にとる三項動詞である。(34)もまた双数量詞構文を作ることができる。

- (35) a. 这本书 卖 三个 人。
 この本 売る 三-CL 人
 (i) ‘この本は三人の人間に売れる。’
 (ii) ‘*この本は三人の人間が売ることができる。’
 b. 这本书 给 三个人。
 この本 あげる 三人
 (i) ‘この本は三人の人間にあげることができる。’
 (ii) ‘*この本は三人の人間があげることができる。’

前節で議論してきた二項動詞とは異なり, (35a,b)の目的語名詞“三个人”(三人)はそれぞれ動作主ではなく受益者としてしか解釈されない。すなわち, (35a)は売った人が三人, (35b)はあげた人が三人とは解釈できず, 買う人が三人, もらう人が三人という解釈になる。以下では, 三項動詞でも“吃”(食べる)と基本的に同じメカニズムで意味解釈がなされることを示し, 意味構造から目的語名詞は受益者としてしか解釈できないことを示す(なお, (35)の主語名詞句には数量詞表現は明示されていないが, このことは(35)の主語名詞句に数量の意味がないことを表すのではない。“这”には「一」という数量が含まれているからである。“这”は *zhèi* と発音することができるが, この *zhèi* は *zhè* (这) と *yī* (一) の音が合成されたものから成る。このことから, 中国語の指示代名詞“这”(この)自体に一つという数量が含まれていることになる。

“吃”(食べる)と同じく, “卖”(売る)も“够卖”(足りる一売る)のような複合動詞を作ることができるので, 双数量詞構文の“卖”(売る)の意味構造は(36)のように派生さ

(36) a. “够” (足りる)

b. “卖” (売る)

c. “(够) 卖” ((足りる) 一売る) ↓

$$\rightarrow \langle y_{i/j}, x_{m/n} \rangle, \langle y_{i/m}, z_{j/n} \rangle$$
$$\rightarrow \langle x/y, y/z \rangle \text{ or } \langle y/y, x/z \rangle$$
$$g_* \ast \langle v/v_*, x/z \rangle$$

SUB OBJ

11

(y=theme, x= unspecified, x=agent, y=theme, z=recipient,)

102

Lit. ‘一脚の椅子で三人のこどもが借りることができる。’

d. 两个 孩子 从 他们 两个 人 借 了 一把 椅子。

二-CL こども から 彼ら 二-CL 人 借りる ASP 一-CL 椅子

‘二人のこどもが彼ら二人から一脚の椅子を借りた。’

“領”（受け取る）は項として，動作主（受け取る人），対象（受け取るもの），起点（あげる人）をとる。“借”（借りる）もまた項として，動作主（借りる人），対象（借りるもの），起点（貸す人）をとる，どちらも(35b,d)のように，動作主（＝着点）を主語にとる三項動詞である。したがって，“領”（受け取る）と“借”（借りる）は(38)と同じタイプの LCS を形成することになる。“买”（買う）と同じく，LCS の上位事象を取り除いても結局，x 項を取り除くことができないため，(39a,c)の双数量詞構文を作ることはいできない。

このように，程度や空間を提供するという意味に対して，取得の意味を表す動詞が双数量詞構文にならないことは次の例からも分かる（任 2005）。

(40) *一间 房子 租 六个人。

一-CL 家 借りる 六-CL 人

Lit. ‘ひとつの家で六人の人間が借りることができる。’

任 (2005: 18)

(40)はひとつの家が六人の人間が借りることのできる空間を提供しているという意味を表すのではない。(40)が取得の意味を表すことは対応する通常文(41)から分かる。

(41) 六个人 租 一间 房子。

六-CL 人 借りる 一-CL 家

‘六人でひとつの家を借りる。’

(41)から分かるように，家を借りるということは対象物を取得することになる。取得の意味を表す動詞は双数量詞構文にできないということを示す(40)の例は，着点（何かを取得する人）が主語にくる(37)の“买”（買う）や(39)の“領”（受け取る）と“借”（借りる）が双数量詞構文にできないことを如実に物語っている。

最後に，アスペクト助詞“了”が双数量詞構文に現れることができることについて述べておくことにする。例(42)の双数量詞構文では，どれもアスペクト助詞“了”が現れている。

(42) a. 一瓶 酒 喝 了 三个人。

一-CL 酒 飲む ASP 三-CL 人

‘ひと瓶の酒で三人飲むことができた。’

b. 一盘 菜 吃 了 三个人。

一-CL おかず 食べる ASP 三-CL 人

‘ひと皿のおかずで三人食べることができた。’

c. 这间 房子 住 了 五个人。

この-CL 家 住む ASP 五-CL 人

‘この家で五人住むことができた。’

d. 这张 床 睡 了 三四个 人。

この-CL ベッド 寝る ASP 三四-CL 人

‘このベッドで三四人寝ることができた。’

第三章でも議論したように、動詞の直後に現れるアスペクト助詞“了”は通常、完了・完成を表すとされている（呂 1944；高橋 2002；王 1943；王 1999 など）。しかし、双数量詞構文に現れる“了”は完了を表すのではない。(25c)のLCSからも分かるように、双数量詞構文は事象ではなく性質を表す文である。実際、双数量詞構文に現れる“了”が完了を表さないことは、(43)のように、副詞“刚才”（さきほど）と共起しないことから分かる。

(43) a. *一瓶 酒 刚才 喝 了 三个 人。

一-CL 酒 さきほど 飲む ASP 三-CL 人

‘ひと瓶の酒で三人飲むことができた。’

b. *一盘 菜 刚才 吃 了 三个 人。

一-CL おかず さきほど 食べる ASP 三-CL 人

‘ひと皿のおかずで三人食べることができた。’

c. *这间 房子 刚才 住 了 五个 人。

この-CL 家 さきほど 住む ASP 五-CL 人

‘この家で五人住むことができた。’

d. *这张 床 刚才 睡 了 三四个 人。

この-CL ベッド さきほど 寝る ASP 三四-CL 人

‘このベッドで三四人寝ることができた。’

このアスペクト助詞“了”のふるまいは第三章の存現文における“了”のふるまいと類似している。第三章でも議論したように、存現文に現れるアスペクト助詞“了”は完了を表さないので、(44)のように、副詞“刚才”（さきほど）と共起することができない。

(44) *石头 上 刚才 刻 了 一个 字。

石 上 さきほど 彫る ASP 一-CL 文字

Lit. ‘石の上にはさきほど文字がひとつ彫られている。’

(43)と(44)から、双数量詞構文と存現文は副詞“刚才”（さきほど）において同じふるまいをすることが分かる。双数量詞構文に現れる“了”が完了を表すのではないということは、性質を表す形容詞文(45)でも“了”が現れることから分かる。

(45) 张三 胖 了。

張三 太る ASP

‘張三は太った（という状態だ）’

(45)に現れる“了”は、通常中国語学で“了₂”と呼ばれるアスペクト助詞に相当するもので、一般に変化の状態を表すとされている。このように、ものの性質を表す形容詞文では、完了を表さない“了”が現れる。双数量詞構文も性質を表す文なので、完了を表さない“了”が現れていると考えることができる²。

以上、本節では、双数量詞構文に現れる三項動詞のふるまいについて考察し、基本的には“吃”（食べる）と同じメカニズムが働くことを見た。“吃”（食べる）とは異なり、三項動詞は“够”（足りる）と合成して複合動詞を形成すると、本来の意味構造に含まれる行為を表すLCSは取り除かれることになる。そのために、三項動詞が現れる双数量詞構文の目的語名詞は受益者としてしか解釈できない。また、“买”（買う）などの着点を主語にとる動詞が双数量詞構文にできないという事実は、量・程度を提供するという働きがある当該構文の性質に由来することが分かった。次節では、表面上、双数量詞構文に見える構文について検討する。

4.3.4. 動詞“看”の特殊性

前節までは、数量対比関係の意味があるときに動作主と対象が逆転した形で現れることを見てきた。本節では、動作主と対象が逆転した形で具現化されているにもかかわらず、数量対比の意味関係が見られない文(46)について見ておくことにする³。

(46) 我 的 眼睛 看 了 三个 医生。
私 GEN 目 診る ASP 三-CL 医者
‘私の目は三人の医者に診てもらった。’

以下では、一見、双数量詞構文には似ているものの、(46)は双数量詞構文とは別の構文であることを示す。

まず、例(46)では、“看”（診る）の対象“我的眼睛”（私の目）は主語位置に、動作主“三个医生”（三人の医者）は目的語位置に現れている。“三个医生”（三人の医者）でなく“我的眼睛”（私の目）が主語の働きをしていることは、再帰代名詞束縛から確かめることができる。

(47) 我_i 的 眼睛 看 了 自己_{i/*j}的妹妹介绍的三个医生_j。
私 GEN 目 診る ASP 自分の妹が紹介した三人の医者
‘私の目は私の妹が紹介した三人の医者に診てもらった。’

例(47)において、再帰代名詞“自己”（自分）の先行詞となれるのは“我”（私）のみである。したがって、(46)で主語として機能しているのは動作主“三个医生”（三人の医者）ではなく、対象“我的眼睛”（私の目）である。なお、Tang (1989)で議論されているように、中国語では所有者の再帰代名詞束縛ができることに注意しておく必要がある。

(48) [[Zhangsan_i de] jiaobao]_j hai le ziji_{i/*j}
Zhangsan DE pride hurt ASP SELF

‘Zhangsan’s pride hurt himself.’

Tang (1989:100 (筆者によりグロスと訳にわずかな変更がある))

このように，“自己”（自分）は主語の中に所有者を束縛できるので，“我的眼睛”（私の目）が主語として機能していることが確認できるのである。さらに，意味的な性質を見ると，(46)は(1a)の双数量詞構文と同じ語順をなしているが，(1a)などの双数量詞構文とは異なり，(46)では数量対比の意味はない。また，(49)に示すように，例(46)は程度副詞“足够”（十分に）を伴って数量対比の意味関係を表すこともできない。さらに，(12)のように，“够”（足りる）とのパラフレーズもできない。

(49) a. *我 的 眼睛 足够 看 三个 医生。

私 GEN 目 十分に 診る 三-CL 医者

Lit. ‘私の目は三人の医者に診てもらうのに十分である。’

b. *我 的 眼睛 够 三个 医生 看。

私 GEN 目 足りる 三-CL 医者 診る

Lit. ‘私の目は三人の医者が診るのに十分である。’

次に，例(46)は(1a)とは異なり，具体的な時間や場所を指定することができる。

(50) a. 我 的 眼睛 昨天 看 了 三个 医生。

私 GEN 目 昨日 診る ASP 三-CL 医者

‘私の目は昨日三人の医者に診てもらった。’

b. 我 的 眼睛 在 西宮北口 看 了 三个 医生。

私 GEN 目 で 西宮北口 診る ASP 三-CL 医者

‘私の目は西宮北口で三人の医者に診てもらった。’

これらは双数量詞構文とは異なる特徴である。これらの事実から，(46)が双数量詞構文とは全く別の現象であることが分かる。しかしながら，(46)の“看”（診る）の項の文法関係もまた，(1a)の“吃”（食べる）と同様，見かけ上は現れない動詞が複合されていると考えられることで，説明することができる。より具体的には，(46)の動詞“看”（診る）は表面上現れない診断の結果を意味構造に含むもう一つの“看”と合成して，複合動詞を形成するために，(46)の語順が可能になることを示す。

動詞“看”にはさまざまな意味がある。(46)で示したような「(医者が) 診る」以外に「(映画を) 観る」，「(本を) 読む」，「(友達を) 訪れる」などの意味がある。これらの中で，(46)の語順が可能なのは，“看”が「(医者が) 診る」という意味を表す場合に限られる。(52)に示すように，「観る」，「読む」，「訪れる」の意味・用法では動作主と対象は逆転できない⁴。(51)は(52)に対応する通常文である。

(51) a. 这 两个 学生 看 了 一片 电影。

この 二-CL 学生 観る ASP 一-CL 映画

- ‘この二人の学生は一本の映画を観た。’
- b. 这 三个 老师 看 了 一本 书。
この 三-CL 先生 読む ASP 一-CL 本
‘この三人の先生は一冊の本を読んだ。’
- c. 这 三个 老人（去） 看 了 一个 朋友。
この 三-CL 老人（行く） 訪ねる ASP 一-CL 友達
‘この三人の老人はひとりの友達を訪ねた（に行った）’
- (52) a. *一片 电影 看 这 两个 学生
一-CL 映画 観る この 二-CL 学生
Intended reading: ‘ひとつの映画でこの二人の学生が観ることができる。’
- b. *一本 书 看 这 三个 老师
一-CL 本 読む この 三-CL 先生
Intended reading: ‘一冊の本で三人の先生が読むことができる。’
- c. *一个 朋友（去） 看 这 三个老人
一-CL 友達 行く 訪ねる この 三-CL 老人
Intended reading: ‘ひとりの友達でこの三人の老人が訪ね（に行く）ことができる’

“看”の意味・用法の中でも、(46)のような倒置ができるのは“看”が「(医者)が診る」の意味を表す場合に限られるのである。この(医者)が診るという意味を表す“看”は(46=53b)の語順に加えて、医者が主語に現れる(53a)の語順も可能である。

- (53) a. 三个 医生 看 了 我 的 眼睛。
三-CL 医者 診る ASP 私 GEN 目
‘三人の医者が私の目を診た。’
- b. 我 的 眼睛 看 了 三个 医生。
私 GEN 目 診る ASP 三-CL 医者
‘私の目は三人の医者に見てもらった。’

(53a,b)は基本的に同じ医者が目を診断するという意味関係を表しているが、(53a)は進行形にでき、(53b)は進行形にできない。

- (54) a. 三个 医生 在 看 我 的 眼睛。
三-CL 医者 ASP 診る 私 GEN 目
‘三人の医者が私の目を診ている。’
- b. *我 的 眼睛 在 看 三个 医生。
私 GEN 目 ASP 診る 三-CL 医者
Lit. ‘私の目は三人の医者に見てもらっている。’

通常、医者が患者を診断することは、患者が医者診断を受け、その診断結果を所有するようになると考えることができる。(54a,b)の差は、(53b)の“看”(診る)では、この結果

の意味がより強く想起されていることを示唆している。実際、結果補語を伴う“看见”（見る一見える）も進行形にできない。(55a)は単に張三を見たという行為だけでなく、実際に見えたという結果の意味があるために、(55b)のように進行形にできない。

- (55) a. 我 看见 了 张三。
私 見る一見える ASP 張三
‘私は張三を見た。’
b. *我 在 看见 张三。
私 ASP 見る一見える 張三
Lit. ‘私は張三を見ている。’

“看见”（見る一見える）の意味構造は(56)のように記述することができる。

- (56) a. “看”（見る）
[EVENT x DO ON y]
b. “见”（見える）
[EVENT y BECOME [STATE y BE SEEN]]
c. “看见”（見る一見える）
[EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y BE SEEN]]]
(x=experiencer, y=theme)

(56a)は誰か(x)が誰か(y)を見ること、(56b)は誰か(y)が見られることを表し、(56a)と(56b)が合成して、(56c)の“看见”（見る一見える）が作られると、全体として、誰か(x)が誰か(y)を見て、その結果 y が見られたという意味を表している。(54b)と(55b)の類似性から(53b)の“看”（診る）にも診断結果を所有するという意味があることが推測でき、見かけ上は現れないが、(56b)に相当するような結果の意味を表す“看”（診る）が実質的に存在すると考えると、(53)の語順が説明できる。このことを示すために、「診断する」という行為を表す“看”（診る）を“看₁”，「(医者)の診断結果を所有する」という意味を表す“看”（診る）を“看₂”として仮定し，“看”（診る）は実質的には“看₁看₂”という複合動詞を形成すると考える⁵。“看₁”と“看₂”の意味構造はそれぞれ次のように記述できる。

- (57) a. “看₁”
[EVENT x DO ON y]
b. “看₂”
[EVENT y BECOME [STATE y HAVE x's DIAGNOSIS]]
(x/x=agent, y/y=theme)

(57a)の“看₁”の意味構造は医者(x)が患者(y)を診断するという行為を表している。一方、(57b)の“看₂”は患者(y)が医者(x)の診断結果を所有するようになることを表している。(57b)のDIAGNOSISは診断（結果）を表す定項である。“看₁看₂”の複合動詞を形成すると、(58)

のような意味構造が作られる。

(58) a. “看₁”

[EVENT x DO ON y]

b. “看₂”

[EVENT y BECOME [STATE y HAVE x]]

c. “看₁看₂”

[EVENT [EVENT x DO ON y] CAUSE [EVENT y BECOME [STATE y HAVE x's DIAGNOSIS]]]

→ <x_{i/j}, y_{m/n}>, <y_{i/m}, x_{j/n}>

→ <x/y, y/x> or <x/x, y/y>

d. *<x/y, y/x>

e. <x/x, y/y>

f. *<x/y, y/x>

g. <x/x, y/y>

| |

SUB OBJ

| |

三个医生

我的眼睛

| |

SUB OBJ

| |

三个医生

我的眼睛

| |

SUB OBJ

| |

三个医生

我的眼睛

| |

SUB OBJ

| |

我的眼睛

三个医生

(x/x=agent, y/y=theme)

(58c)のLCSは、医者が患者を診断し、その結果患者が診断結果を持つという意味を表している。このLCSからは一つ目の矢印で表される項構造<x_{i/j}, y_{m/n}>, <y_{i/m}, x_{j/n}>が作られる。前者は“看₁”，後者は“看₂”の項構造である。“看”は二項述語なので、一つ目の矢印で表される項構造から2つ目で表される二つの項構造<x/y, y/x>または<x/x, y/y>が作られることになる。この項構造からは(58d,e,f,g)の四つのリンキングの可能性がある。このうち、xとx（イタリック）は医者、yとy（イタリック）は患者（私の目）を表すので、(58d,f)は意味的に齟齬をきたすため、有り得ないリンキングとなる。これに対して、(58e)から動作主が主語に対象が目的語に具現化されると、(53a)が作られることになり、(58g)から動作主が目的語に対象が主語に具現化されると、(53b)が作られることになる。

このように、“看”が実際には現れないもう一つの“看”と合成して複合動詞を形成すると考えると、(53)の“看”の二通りの語順を説明できる。さらに、本分析の見方をとると、(59)の目的語に見られる定性制約を説明できるようになる(cf. Milsark 1977)。

(59) *张三 的 眼睛 看 了 那个 医生。

張三 GEN 目 診る ASP あの-CL 医者

Lit. ‘張三の目はあの医者に診てもらった。’

(59)は(53b)の目的語名詞に定性制約が見られることを示している。これは以下のように説明することができる。第三章でも議論したように、意味述語 HAVE で表される所有関係では、目的語名詞に定の名詞は現れない。[y HAVE x]のxに相当する医者の診断（結果）を表す定項 DIAGNOSIS は特定の診断ではなく不定の診断結果でなければならない。つまり、医者と診断は1対1の対応関係にあり、診断の数量が不定であるためには医者の数量も不定でなくてはならないのである。DIAGNOSISの項に含まれるx（医者）が不定の表現でな

ければ、当然のことながら、 x が定名詞句で現れる(59)は非文となる。具体的には、(58g)のリンキングパターンから分かるように、(53b)の目的語名詞“三个医生”(三人の医者)は(58c)の x 項に相当する。この x 項は(58c)の意味述語 HAVE の項である。したがって、 x 項には定性制約がかかることになり、その中に含まれる“那个医生”(あの医者)が定表現として現れる(59)は非文となる。これに対して、もちろん、(51)の「観る」、「読む」、「訪ねる」を表す“看”では、このような定性制約は見られない。さらに、(53a)の目的語名詞“我的眼睛”(私の目)は(59c)の意味述語 DO ON がとる y 項に当たるので、これも定性制約はない。

- (60) a. 这 两个 学生 看 了 那片 电影。
 この 二-CL 学生 観る ASP あの-CL 映画
 ‘この二人の学生はあの映画を観た。’
 b. 这 三个 老师 看 了 这本 书。
 この 三-CL 先生 読む ASP この-CL 本
 ‘この三人の先生はこの本を読んだ。’
 c. 这 三个 老人(去) 看 了 那个 朋友。
 この 三-CL 老人(行く) 訪ねる ASP あの-CL 友達
 ‘この三人の老人はあの友達を訪ねた(に行った)’
 d. 三个 医生 看 了 那个 人 的 眼睛。
 三-CL 医者 診る ASP あの-CL 人 GEN 目
 ‘三人の医者があの人の目を診た。’

このように、(58)の分析は動作主と対象が倒置されて具現化される(53b=46)の目的語名詞における定性制約を説明することができる。

(53a,b)ではその解釈に多少の違いがあることは、以下のことから分かる。患者が医者
 の診断を受けその結果を所有するということは、患者が医者に診てもらうという受身的な
 意味を表すと言える。言い換えれば、受身的な意味を表すため、項が倒置されたように見
 えるのである。このことを見るために、同じ診るという意味がある“看病”の用法を考え
 てみる。“看病”は動詞“看”と名詞“病”から構成され、(61a)のようにひとつの自動詞
 として、あるいは(61b)のように動詞+目的語として使われる。

- (61) a. 张三 今天 看病 了。
 張三 今日 診断を受ける ASP
 ‘張三が今日診断を受けた。’
 b. 张三 今天 看 了 两次 病。
 張三 今日 診る ASP 二回 病
 ‘張三は今日二回診断を受けた。’

(61a,b)から分かるように、“看病”は動詞あるいは動詞+目的語のいずれの用法でも「診断
 を受ける」という意味を表す。特に、(61b)のように“看”が他動詞として使われる場合で

「診断を受ける」という意味を表すことは、(53b=46)の“看”それ自体にも「診断を受けその結果を所有する」という受動的な意味があることを示唆している。興味深いことに、(61b)の他動詞文では、すでに項の数が充足しているので、診断をする人（動作主）を具現化することはできないが、(53b=46)のように、目的語名詞として動作主に当たる項を表出させることはできる。この“三个医生”（三人の先生）は(61b)の目的語“病”（病）に置き換えが起こっていると言える。なぜなら、(62)のように、“看”と似た意味を表す“看病”が“三个医生”（三人の先生）を目的語にとれないからである。

- (62) *我 的 眼睛 看病 了 三个 医生。
 私 GEN 目 診断する ASP 三-CL 医者
 Intended reading: ‘私の目は三人の医者に診断してもらった。’

(53b=46)の“看”が「患者が医者に診断してもらおう」という受身的な意味を表す文であることは、受身的な意味を表す統語的受身の“被”受身と実質的に同じ意味を表すことから分かる。

- (63) 我 的 眼睛 被 三个 医生 看 了 (两次)。
 私 GEN 目 PASS 三-CL 医者 診る ASP 二回
 ‘私の目は三人の医者に（二回）診断された。’

以上、本節では、数量対比関係がないにもかかわらず、動作主と対象が逆転して現れる“看”（診る）について検討した。この“看”（診る）では、「診断を受けてその結果を所有する」という受身的な意味と所有の意味が想起されるために、動作主と対象が倒置されて現れることができることを示した。

4.4. まとめ

本章では中国語非動作主卓越構文のうちの双数量詞構文で目的語に動作主の解釈が可能であることを示した。この構文は、形の上では主語、目的語ともに数を表す数量詞表現が明示される必要があり、意味の上では、主語と目的語との間に数量対比の意味関係が見られるという特徴がある。本章では、まず再帰代名詞束縛と所有者関係節化から双数量詞構文の項の文法関係について検討し、当該構文が SVO 語順であることを示した。次に、双数量詞構文に現れる動詞が数量対比関係の意味を表す“够”（足りる）と合成して、複合動詞を形成できることを示した。この構文は具体的な時間や場所を指定できないなどの特徴を共有することから、本章では、双数量詞構文において、見かけ上は現れないが、実質的には存在する数量対比関係を表す動詞“够”（足りる）と動詞が合成され、複合動詞を形成しているとする分析を提案した。より具体的には、双数量詞構文は、複合動詞の構造を持ち、動詞本来の LCS が数量対比関係を表す LCS に埋め込まれる意味構造を作り出していることを示した。そして、「項 α が対象（内項）であるとき、かつ、そのときに限り、項 α は主語にリンクされる」という一つのリンキングルールを仮定することで、双数量詞構文の語順として、「対象＋動詞＋動作主/受益者」しか有り得ないことを示した。本章で提案する

語彙概念構造分析は、双数量詞構文で具体的な時間や場所を指定する表現と共起しないこと、時間副詞と共起しないこと、進行形にできないこと、そして動詞の行為を表す意味述語 DO を修飾できないことなどの事実を捉えることができる。

注

1. 第二章と第三章でも議論したように、中国語において、ある名詞が目的語であることを確かめるテストとしては“把”構文がある。しかし、“把”構文を用いて、双数量詞構文に対して目的語をテストすることは難しい。なぜなら、双数量詞構文の目的語名詞句には Affected（影響）の意味がないからである。(1a)でご飯を食べる十人が影響を受けているわけではない。

2. 沈力氏は以下の双数量詞構文では、完了の“了”が現れていると指摘する（個人談話）。

(i) 昨天 一盘 菜 就 吃 了 三个 人。

昨日 一-CL 料理 だけ 食べる ASP 三-CL 人

‘昨日一皿の料理で三人の人間だけが食べることができた。’

沈力氏は伝統的に動詞の直後に現れる“了”は完了であることから、(i)の“了”も完了であると指摘する。しかし、第三章の存現文でも議論したように、“了”の位置とその用法は必ずしも一致するわけではない。また、(i)は(ii)のように主語名詞句に数量表現がなくても成立する。

(ii) 昨天做的菜 就 吃 了 三个 人。

昨日作った料理 だけ 食べる ASP 三-CL 人

‘昨日作った料理は三人の人間だけ食べることができた。’

(ii)は主語名詞句と目的語名詞句に数量表現を伴うことが必須である本論の双数量詞構文と異なる様相を呈している。実際、(ii)に対応する“吃”の双数量詞構文を作ることはいできない。

(iii) *昨天做的菜 吃 三个 人。

昨日作った料理 食べる 三-CL 人

Intended reading: ‘昨日作った料理で三人の人間が食べることができる。’

以上の事実から、(i)の文は本論の“够”（足りる）タイプの双数量詞構文とは違う構文であることが言える。

3. “看”（診る）の他に心理動詞“气”（怒る）でも同じような現象が見られるが、目的語に動作主の解釈があるときは、使役用法であることを表している(aii)。

(a) 张三 气 了 李四。

張三 怒る ASP 李四

(i) ‘張三が李四に怒った。’

(ii) ‘(張三のせいで) 李四が張三に怒った。’

心理動詞でも上のような使い方ができるのは“气”（怒る）に限られる。

4. なお、例(51)のスコープ関係はすべて目的語名詞が主語名詞よりも広いスコープをとる。スコープは本論とは直接関係がないので詳しくは触れないが、特に、理論言語学でしばしば見られるような中国語のスコープは語順に比例するという考えは事実合わない (cf. Aoun and Li 1989 など)。
5. なお、ここでの“看₁看₂”の連続体は、動詞を連続することで語気を弱めるという用法ではない

第五章

結び

項の具現化でしばしば議論される意味役割の階層性に関して、中国語も基本的にはこれに従った形で項の具現化が行われるが、これまで議論してきたように、結果複合動詞構文、存現文そして双数量詞構文に代表される中国語非動作主卓越構文では、意味役割の階層性に反して項の具現化が行われるということを見てきた。第一章では項の具現化に関する先行研究、第二章では結果複合動詞構文、第三章では存現文、そして第四章では双数量詞構文における項の現れ方について検討し、それぞれ以下に述べるような結論を得た。

第一章では、項の具現化でしばしば議論される意味役割の階層性を検討し、中国語も通常、この階層性に従った形で項の具現化が行われることを見た。その上で、中国語の非動作主卓越構文（結果複合動詞構文、存現文、双数量詞構文）において、意味役割の階層性に反するような形で項の具現化が行われることがあることを見て、それぞれの構文における先行研究について検討し、いずれの構文でも記述的・理論的問題点があることを示した。

第二章では、中国語非動作主卓越構文のうちの結果複合動詞構文における項の現れ方について考察し、以下の結論を得た。まず、結果複合動詞で論理的に可能な四つの解釈のうち、実際には三つの解釈しかできない。そのうちで目的語が動作主として解釈されることが可能である。いずれの解釈においても、主語が動詞の前にそして目的語が動詞の後に現れることを再帰代名詞束縛、所有者関係節化、“把”構文により確かめた。このことから、実際に動作主が目的語に具現化されていることが分かる。結果複合動詞構文の V1 と V2 の組み合わせ方によって、Washio (1997) の strong resultative と weak resultative に相当する二種類の複合動詞が形成される。このうち、動作主が目的語に具現化できるのは、strong resultative に限られることを示した。結果複合動詞のリンキングパラダイムは、「項 α が対象(theme)と解釈されるときに限り、項 α は目的語（内項として項構造に）にリンクされる（ただし、主語（外項）がなければならない）」という単純なルールを仮定すれば説明できることを論じた。さらに、V1V2 の V1 が他動詞、自動詞、そして三項動詞の場合でも同じ原理が働くことを示した。また、通常目的語に具現化されるはずのない動作主が目的語に現れ得るのは、V1 の動作主と V2 の対象が意味的に同定される場合に限られる。この事実も本章で提案するルールから導かれる。要するに、動作主目的語が可能となるには、V1 の動作主と V2 の対象が意味的に同定される必要があるということである。

第三章では、中国語非動作主卓越構文のうちの存現文における項の現れ方について考察し、以下の結論を得た。英語などの Locative Inversion に相当すると思われる存現文では受動形でない他動詞が現れることができるが、その場合、本来他動詞の項である動作主は取り消され、場所が主語に対象が目的語に現れ、対象項と場所項が倒置された形で具現化される。本論では、まず、再帰代名詞束縛と所有者関係節化から存現文が実際に場所を主語に対象を目的語にとることを確かめ、次に、動詞の本来の意味構造に含まれる存在の LCS がアスペクト助詞によって所有の LCS に書き換えられるために、「場所+動詞+対象」という存現文の語順が生まれることを提案した。本分析では、存現文で動詞本来の意味構造

に含まれる行為を表す意味述語(DO)を修飾できないこと、存在を表す“有”と存現文の「動詞+アスペクト助詞」が交替できることなど多くの事実を説明できる。存在の LCS から所有の LCS への書き換え規則は、動詞本来の意味構造に場所を項にとる AT 述語を含むものに限られる。存現文が表す「あるものがある場所に存在する」という存在の意味も本分析で提案する存在の LCS から所有の LCS への書き換え規則から説明できる。

第四章では、動作主が目的語に具現化されていると思われるもう一つの中国語非動作主卓越構文、すなわち双数量詞構文について考察し、以下の結論を得た。この構文では、主語名詞句と目的語名詞句に必ず数量詞表現が現れ、主語と目的語の間で数量対比関係の意味があるという特徴が見られる。双数量詞構文に現れる動詞は、数量対比関係の意味を表す“够”(足りる)と合成して、“够 V”のような複合動詞を作ることができるが、この複合動詞は、双数量詞構文に現れる動詞と同じく、進行形にできない、具体的な時間や場所を指定できない、動詞の意味構造に含まれる行為を修飾できないなどの事実を共有する。このことから、本論では、双数量詞構文は、見かけ上単一の動詞が現れているが、実質的には、“够”(足りる)に由来する数量対比関係を表す意味述語 ENOUGH と単体で現れる動詞の LCS が合成することで形成される構文であるという分析を行った。この構文では、「項 α が対象(内項)であるとき、かつ、そのときに限り、項 α は主語にリンクされる」というリンキングルールを一つだけ仮定すれば、語順が「対象+動詞+動作主」となることを説明できることを示した。さらに、双数量詞構文に現れる三項動詞のふるまいを検討し、本分析で提案するリンキングルールにより、三項動詞が持つ項、動作主、受益者、対象からは「対象+動詞+受益者」の語順しか許されないことを示した。さらに、表面上双数量詞構文と似ている“看”(診る)についても検討し、“看”(診る)に数量対比関係の意味がないこと、具体的な時間や場所を指定する表現と共起できることなどから、実際には“看”(診る)は双数量詞構文とは別の構文であることを示した。別の構文ではあるものの、結局は双数量詞構文と同じく、見かけ上は現れない動詞を想定することで、“看”(診る)の項の文法関係も説明できる。

以上、本論文は全体を通して、中国語の結果複合動詞構文、存現文そして双数量詞構文に代表される非動作主卓越構文では、意味役割の階層性に反して項が倒置された形で具現化されることを考察し、第二章と第四章で提案する二つのリンキングルールだけで説明できることを示した。第二章で提案するリンキングルールは事象文、第四章で提案するリンキングルールは性質を表す文に関するルールとして、すみ分けることができる。第三章は語彙概念構造でより高い位置になる項は項構造でも統語構造でもより高い位置にあるという LCS の前提から説明される。本論文全体の分析から得られる知見として、中国語非動作主卓越構文で項が倒置された形で具現化できるのは、単一の動詞ではなく、複合動詞を形成する場合や動詞とアスペクト助詞が一体となって現れる場合など、「X+Y」のように、二つの要素が合成される場合に限られることが明らかになった。特に、第四章では、見かけ上現れない要素が実質的には当該の語順を説明するのに中心的な役割をしているという可能性があることが分かり、このことは本論文の全体の分析が妥当であることを示している。

参考文献

- Anderson, Stephen. (1976). On the notion of subject in ergative languages. In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*, 1-23. Academic Press, New York.
- Andrews, Avery. (1985). The major functions of the noun phrase. In Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description. Vol 1: Clause Structure*, pp. 62-154. Cambridge University Press, Cambridge.
- Aoun, Joseph and Yen-hui Andrey Li. (1989). Constituency and Scope. *Linguistic Inquiry*, 20, 141-72.
- Bender, Emily. (2000). The syntax of Mandarin *BA*: reconsidering the verbal analysis. *Journal of East Asian Linguistics*, 9, 105-145.
- Birner, Betty. (1995). Pragmatic constraints on the verb in English inversion. *Lingua*, 97, 233-256.
- Bresnan, Joan. (1994). Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar. *Language*, 70, 72-131.
- Bresnan, Joan and Jonni M. Kanerva. (1989). Locative inversion in Chichewa: A case study of factorization in grammar. *Linguistic Inquiry*, 2, 1-50.
- Bresnan, Joan and Lioba Moshi. (1990). Object asymmetries in comparative Bantu syntax. *Linguistic Inquiry*, 21, 147-185.
- Carrier-Duncan, Jill. (1985). Linking of thematic roles in derivational word formation. *Linguistic Inquiry*, 16, 1-34.
- Chao, Yuen-Ren. (1968). *A Grammar of Spoken Chinese*. University of California Press, Berkeley.
- 陈庭珍 (1957). 「汉语中处所词做主语的存在句」, 『中国语文』, 8 月号, 15-19.
- Cheng, Lisa Lai-Shen and C.-T. James Huang. (1994). On the argument structure of resultative compounds. In Matthew Chen and Ovid T. -L. Tzeng (Eds.), *In honor of William Wang*, pp. 187-221. Pyramid Press, Taipei.
- 陈平 (1994). 「讨论汉语中三种句子成分与语义成分的配位原则」『中国语文』, 第 3 期, 161-168.
- Chomsky, Noam. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Foris, Dordrecht.
- Coopmans, Peter. (1989). Where Stylistic and Syntactic Processes Meet: Locative Inversion in English. *Language*, 65, 728-751.
- Dixon, Robert M.W. (1972). *The Dyirbal Language of North Queensland*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Dixon, Robert M. W. (1979). Ergativity. *Language* 55, 59-138.
- Dixon, Robert M. W. (1994). *Ergativity*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Dowty, David R. (1979). Word Meaning and Montague Grammar. Kluwer, Dordrecht.
- Dowty, David R. (1991). Thematic proto-roles and argument selection. *Language*, 67-3, 547-619.
- Fillmore, Charles J. (1968). The case for Case. In Emond Bach and Robert T. Harms (ed.) *Universals in Linguistic Theory*, 1-88. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Foley, William and Robert Van Valin. (1984). *Functional Syntax and Universal Grammar*.

- Cambridge University Press, Cambridge.
- Goldberg, Adele. (1995). *Constructions*. University of Chicago Press, Chicago.
- Goodall, Grant. (1986). On argument structure and L-marking with Mandarin Chinese *Ba*. *NELS*, 17-1, 232-242.
- Grimshaw, Jane. (1990). *Argument Structure*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Gruber, Jeffrey S. (1965) *Studies in Lexical Relations*. Doctoral dissertation, MIT.
- 管燮初 (1953). 『殷墟甲骨刻辞的语法研究』. 中国科学院.
- Hashimoto, Anne Y. (1971). Descriptive adverbials and the passive construction. *Unicorn*, 7, 84-93.
- Her, One-Soon. (1991). Topic as a grammatical function in Chinese. *Lingua*, 84, 1-23.
- Her, One-Soon. (2007). Argument-function mismatches in Mandarin resultatives: A lexical mapping account. *Lingua*, 117, 221-246.
- Her, One-Soon. (2009) Apparent subject-object inversion in Chinese. *Linguistics*, 47-5: 1143-1181.
- Huang, Chu-Ren. (1992). Certainty in functional uncertainty. *Journal of Chinese Linguistics*, 20, 247-287.
- Huang, C.-T. James. (1982). *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*. Doctoral Dissertation, MIT.
- Huang, C.-T. James. (1987). Existential sentences in Chinese and (in)definiteness. In Eric J. Reuland and Alice G.B. Ter Meulen (eds.). *The Representation of (In)definiteness*, 226-253. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Huang, C.-T. James. (1993). Reconstruction and the structure of VP: some theoretical consequences. *Linguistic Inquiry*, 24: 103-138.
- Huang, C.-T. James, Y.-H. Audrey Li and Yafei Li. (2009). *The Syntax of Chinese*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Jackendoff, Ray. (1972). *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Jackendoff, Ray. (1983). *Semantics and Cognition*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Jackendoff, Ray. (1987). The status of thematic relations in linguistic theory. *Linguistic Inquiry*, 18, 369-412.
- Jackendoff, Ray. (1990). *Semantic Structures*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- 影山太郎 (1993). 『文法と語形成』. ひつじ書房, 東京.
- 影山太郎 (1996). 『動詞意味論』. くろしお出版, 東京.
- 影山太郎・由本陽子 (1997). 『語形成と概念構造』. 研究社, 東京.
- Keenan, Edward L. (1976). Towards a universal definition of “subject”. In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*, 303-333. Academic Press, New York.
- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie. (1977). Noun phrase accessibility and universal grammar, *Linguistic Inquiry*, 8, 63-99.
- Kiparsky, Paul. (1985). *Morphology and Grammatical Relations*. unpublished. Stanford University, Stanford, CA.
- Kiparsky, Paul. and J. F. Staal. (1969). Syntactic and semantic relations in Pāṇini. *Foundations of*

- Language*, 5-1, 83-117.
- Kishimoto, Hideki. (1996). Agr and agreement in Japanese. In Masatoshi Koizumi, Masayuki Oishi, and Uli Sauerland (eds.), *Formal Approaches to Japanese Linguistics 2*, MIT Working Papers in Linguistics, 29, 41-60.
- 岸本秀樹 (2005). 『統語構造と文法関係』. くろしお出版, 東京.
- 岸本秀樹 (2009). 「部分的な達成を表す語彙概念構造」. 趙華敏・沈力 (編), 『漢日理論言語学研究』, pp. 38-46. 学苑出版社, 北京.
- Kroeger, Paul. (1993). *Phrase Structure and Grammatical Relations in Tagalog*. CSLI Publications, Stanford, CA.
- Larson, Richard. (1988). On the double object construction. *Linguistic Inquiry*, 19, 335-391.
- Levin, Beth. (1985). *Lexical Semantics in Review, Lexicon Project Working Papers 1*, MIT.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. (1995). *Unaccusativity*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Levin, Beth and Malk Pappaport Hovav. (2005). *Argument Realization*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Li, Audrey Yen-Hui. (1990). *Order and Constituency in Mandarin Chinese*. Kluwer, Dordrecht.
- 李临定 (1986). 『现代汉语句型』. 商务印书馆, 北京.
- 李临定・范方莲. (1960). 「讨论表“每”的数量结构对应式」, 『中国语文』, 11月号, 379-381.
- Li, Yafei. (1990). On Chinese V-V compounds. *Natural Language and Linguistic Theory*, 8, 177-207.
- Li, Yafei. (1993). Head and Aspectuality. *Language*, 69, 480-504.
- Li, Yafei. (1995). The thematic hierarchy and causativity. *Natural Language and Linguistic Theory*, 13, 255-282.
- Li, Yafei. (1999). Cross-componential causativity. *Natural Language and Linguistic Theory*, 17, 445-497.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. (1981). *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. University of California Press, Berkeley.
- 吕叔湘 (1944). 『中国文法要略』. 商务印书馆, 北京. (1982 再版)
- 吕叔湘 (1946). 「从主语, 宾语的分别谈国语句子的分析」, 『吕叔湘文集 (2)』 商务印书馆, 北京. 1990.
- McCawley, James D. (1992). Justifying part-of-speech assignments in Mandarin Chinese. *Journal of Chinese Linguistics*, 20, 211-245.
- Marantz, A. P. (1981). On the nature of grammatical relations. Doctoral dissertation, MIT.
- Marantz, A. P. (1984). *On the Nature of Grammatical Relations*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Milsark, Gary. (1977). Toward an explanation of certain peculiarities of the existential construction in English. *Linguistic Analysis*, 3, 1-29.
- 松本曜 (1998). 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』, 114, 37-83.
- Nakajima, Heizo. (2001). Verbs in locative constructions and the generative lexicon. *The Linguistic Review*, 18: 43-67.
- 聂文龙 (1989). 「存在和存在句的分类」, 『中国语文』, 2, 95-104.

- 小野尚之 (2005). 『生成語彙意味論』. くろしお出版, 東京.
- Ostler, N.D.M. (1979). Case Linking: A Theory of Case and Verb Diathesis Applied to Classical Sanskrit. Doctoral dissertation, MIT.
- Pan, Haihua. (1996). Imperfect aspect *zhe*, agent deletion, and locative inversion in Mandarin Chinese. *Natural Language and Linguistic Theory*, 14, 409-432.
- Pinker, Steven. (1989). *Learnability and Cognition*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Pustejovsky, James. 1995. *The generative lexicon*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Randall, Janet H. (2010). *Linking: The Geometry of Argument Structure*. Springer, Dordrecht
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin. (1988). What to Do with θ -roles. In W. Wilkins (ed.) *Thematic Relations: Syntax and Semantics* 21, 7-36. Academic Press, New York, San Francisco, London.
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin. (1998). Building verb meanings. In M. Butt and W. Geuder (eds.). *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, 97-134. CSLI Publications, Stanford.
- Ravin, Yael. (1990). *Lexical Semantics without Thematic Roles*. Clarendon Press, Oxford, New York.
- 任鷹 (2005). 『现代汉语非受事宾语句研究』. 社会科学文献出版社, 北京.
- 任鷹 (2007). 「存现句的句式特征及其语序原则」. 张黎, 古川裕, 任鷹, 下地早智子(编), 『日本现代汉语语法研究论文选』, pp. 184-204. 北京语言大学出版社, 北京.
- Ross, Claudia. (1991). Coverbs and category distinctions in Mandarin Chinese. *Journal of Chinese Linguistics*, 19, 79-115.
- Shi, Yuzhi. (2002). *The Establishment of Modern Chinese Grammar: The Formation of the Resultative Construction and its Effects*. John Benjamins, Amsterdam.
- 宋玉柱 (1982a). 「定心谓语句存在句」. 『语言教学与研究』, 3, 47-54.
- 宋玉柱 (1982b). 「动态存在句」. 『汉语学习』, 6, 62-67.
- 宋玉柱 (1988). 「存在句中动词后边的“着”和“了”」. 『天津教育学院学报』, 1, 68-77.
- Sybesma, Rint. (1999). *The Mandarinian VP*. Kluwer, Dordrecht.
- Tai, James. 1984. Verbs and times in Chineses: Vendler's four categories. *CLS* 20/2, 286-296.
- 高橋弥守彦 (2002). 「二つの“了”について」. 日中対照言語学会 (編), 『日本語と中国語のアスペクト』, pp. 165-228. 白帝社, 東京.
- Tan, Fu. (1991). Notion of Subject in Chinese. Doctoral dissertation, Stanford University.
- Tang, J. Chih-Chen. (1989). Chinese reflexives. *Natural Language and Linguistic Theory*, 7-1, 93-121.
- Vendler, Zeno. (1967). *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press, Ithaca, NY.
- 王力 (1943). 『中国现代语法』. 中华书局, 北京.
- 王力 (1954). 『中国语法理论』. 中华书局, 北京.
- 王学群 (1999). 「中国語の V 着について」. 『日中言語対照研究論集』, 1 号, 71-89.
- Washio, Ryuichi. (1997). Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics*, 6, 1-49.
- Yamamoto, Kazuyuki. (1997). Locative inversion in English and Japanese. In Ukaji Masatomo,

- Masaru Kajita, Tohio Nakao, and Shuji Chiba (eds.), *Studies in English Linguistics: A festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday*. Taishukan, Tokyo.
- Yang, Suying. (1995). Ba and Bei constructions in Chinese. *Journal of the Chinese Language Teachers Association*, 30, 1-36.
- 于康 (2007). 「日本語の存在構文とその存在構文からみた動詞の意味と構文の意味とのかかわり」『国文学攷』第 192・193 合併号, 1-13.
- Yu, Yile. (2012). Agent object realization in Chinese: An LCS account. *Kobe Papers in Linguistics*, 8, 21-34.
- 于一楽 (2012). 「存現文における項の具現化」*KLS*, 32, 13-24.
- 由本陽子 (2005). 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』. ひつじ書房, 東京.
- 由本陽子 (2011). 『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』. 開拓社, 東京.
- Zou, Ke. (1993). The syntax of the Chinese BA construction. *Linguistics*, 31, 715-736.